2017 年度　　博士学位論文

大都市近郊における農村観光の発展と ルーラリティの関係

―上海市崇明区前衛村を事例として―

立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程

呂　　帥

2017 年度　　博士学位論文

大都市近郊における農村観光の発展と ルーラリティの関係
―上海市崇明区前衛村を事例として―

指導教授　　杜　国慶

立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程

呂　　帥

目　次

図一覧 4
表一覧 5
写真一覧 6
要　約 7

第１章　序論 11
第１節　研究背景 12
１．中国における農村観光の発展 12
２．中国におけるルーラリティの再編 14
第２節　先行研究 17
１．農村観光の概念 17
２．ルーラリティの概念と特徴 22
第３節　研究の目的と枠組み 30
１．大都市近郊の農村観光地 30
２．本研究の目的 30
３．本研究の枠組み 31
第４節　研究対象地域の概要 34

第２章　生産空間の観光化とルーラリティ再編 37
第１節　土地利用の分類 40
第２節　土地利用と農業の機能変化 43
１．伝統的な土地利用と農業機能 44
２．観光萌芽期（1991～98 年） 47
３．観光展開期（1999～2003 年） 51
４．観光拡大期（2004～10 年） 52
５．観光停滞期（2011 年以降） 57
第３節　観光活動とルーラリティの関係 61
１．農業生産におけるルーラリティとローカリティ 61

２．建築物の伝統性と現代性. 65
３．文化景観の再構築におけるルーラリティ再編と伝統維持. 67
４．都市的観光施設の侵入. 72
第４節　まとめ. 77

第３章　生活空間の観光化とルーラリティ再編. 81
第１節　農家楽経営の台頭と拡大. 83
１．農家楽経営の経緯. 84
２．農家楽の分布. 87
３．農家楽経営規模の特徴. 90
第２節　人の変化. 92
１．村民の変化. 92
２．観光者の増加. 94
第３節　居住空間の変化. 96
１．住宅外観の変化. 96
２．間取りと内装の変化. 100
３．居住習慣の変化. 107
４．庭の変化. 107
第４節　集落景観の変化. 110
１．建築景観の商業化. 110
２．道路景観の変化. 110
３．公共空間の再構築. 114
第５節　まとめ. 115

第４章　社会関係にみるルーラリティ再編. 118
第１節　職業と収入構成の変化. 120
１．職業構成. 120
２．家庭の収入構成. 122
第２節　人間関係の変化. 125
１．村民関係. 125

２．ホスト―ゲスト関係 127
３．ソーシャル・ネットワーク 129
第３節　生活習慣の変化 131
１．勤務時間 131
２．技術の習得 134
３．村民の余暇活動 136
第４節　村の管理と運営の変化 138
１．管理者 138
２．管理方式 141
第５節　まとめ 144

第５章　結論 146
第１節　前衛村におけるルーラリティ再編の特徴 148
１．生産空間のルーラリティ再編 148
２．生活空間のルーラリティ再編 149
３．社会関係のルーラリティ再編 150
第２節　農村観光発展とルーラリティ再編のメカニズム 151
第３節　本研究の意義 156

参考文献 158
謝　辞 166
索　引 168

図一覧

図 1－1　中国における国内観光者延べ人数の推移 13
図 1－2　中国における都市と農村の行政区分 22
図 1－3　都市・農村連続体 23
図 1－4　本研究の枠組み 32
図 1－5　前衛村の立地 35
図 2－1　前衛村の土地利用（1990 年） 46
図 2－2　前衛村の土地利用（1998 年） 49
図 2－3　前衛村の土地利用（2003 年） 53
図 2－4　前衛村の土地利用（2010 年） 56
図 2－5　前衛村の土地利用（2015 年） 58
図 2－6　前衛村における土地利用構成とその変化 59
図 2－7　前衛村における観光対象の設立概況 75
図 2－8　生産空間における農村観光の発展とルーラリティ変化 79
図 3－1　前衛村における農家楽経営軒数の推移 86
図 3－2　前衛村における農家楽の開業年と分布 88
図 3－3　前衛村における農家楽の規模別軒数（2015 年） 91
図 3－4　前衛村の常住人口ピラミッド（2015 年） 93
図 3－5　前衛村における観光者数の変化（1999-2014 年） 95
図 3－6　1980 年代の住宅「独埭頭」の間取り 97
図 3－7　前衛村における家屋の階数別軒数（2015 年） 98
図 3－8a　改造前の間取りの一例 100
図 3－8b　改造後の間取りの一例 101
図 3－9a　増築前の住宅敷地の一例 108
図 3－9b　増築後の住宅敷地の一例 108
図 3－10　生活空間におけるルーラリティの変化 115
図 4－1　前衛村における村民の勤務状況構成（2015 年） 122
図 4－2　前衛村における村民の労作繁忙期の変化 132
図 5－1　前衛村における農村観光の発展とルーラリティの変化 152

表一覧

表 1－1　農村観光に関する概念 21
表 1－2　都市観光と農村観光の特徴 26
表 1－3　先行研究におけるルーラリティの考察側面と本研究の関係 29
表 2－1　土地利用の分類 41
表 2－2　前衛村における土地利用の変化（1980-2015 年） 43
表 2－3　前衛村生産空間における宿泊・飲食施設の概況 66
表 3－1　前衛村における 1999 年に開業した農家楽の概況 85
表 4－1　前衛村における農家の農家楽経営類型と収入状況（2015 年） 123
表 4－2　前衛村における村内勤務の村民の就業形態 133
表 4－3　前衛村における宣伝サイト所有農家楽一覧 135

写真一覧

写真 2－1　前衛村におけるアブラナの栽培 62
写真 2－2　前衛村におけるイチゴ栽培温室 63
写真 2－3　前衛村のラベンダー栽培 64
写真 2－4　古瀛飯荘 66
写真 2－5　瀛鼎農荘 67
写真 2－6　崇明島開拓期の民居「環洞舎」 69
写真 2－7　伝統的な生産設備「水車」の観光体験 69
写真 2－8　宋・元代の崇明島の製塩作業の展示 70
写真 2－9　伝統的な結婚式の展示 71
写真 2－10　娯楽施設ゴーカート 73
写真 2－11　珪化木博物館 73
写真 3－1　前衛村の入口 87
写真 3－2　1990 年代建築の住宅 97
写真 3－3　2000 年代以降建築の住宅 99
写真 3－4　農家楽のフロント 103
写真 3－5　農家楽の客室 104
写真 3－6　農家楽のトイレ兼浴室 104
写真 3－7　農家楽のキッチン洗い場とガスコロン 105
写真 3－8　農家楽のキッチンのかまど 106
写真 3－9　現代的な農家楽の看板 111
写真 3－10　観光化以前の道路の景観 111
写真 3－11　現在の道路景観 113
写真 3－12　前衛村の路標 113
写真 4－1　クロスステッチの学習クラス 136

要　約

本研究は、上海市近郊の農村観光地である崇明区前衛村を事例に、その生産空間、生活空間、社会関係におけるルーラリティの変化について考察することで、農村観光の発展とルーラリティ再編の関係性、およびルーラリティの変化メカニズムについて明らかにする。論文は第 1 章「序論」、第 2 章「生産空間の観光化とルーラリティ再編」、第 3 章「生活空間の観光化とルーラリティ再編」、第 4 章「社会関係にみるルーラリティ再編」、第 5 章「結論」の 5 章から構成されている。

序論では、本研究の背景と目的、方法を述べ、先行研究を整理する。中国において、経済の向上と余暇時間の増加により、観光業は著しく発展している。それに加え、都市住民の自然環境に対する意識の向上や労働ストレスの解消が求められるようになったことを背景となって、農村観光に対する需要が高まっている。農村観光の発展に伴い、農村観光商品の中心的でユニークなセールスポイントと認識されているルーラリティも変容している。先行研究の整理を通じて、農村観光を広義に「農村地域におけるすべての観光活動である」と定義し、ルーラリティについては先行研究の定義を援用して「農村的要素や農村らしさの諸相」と捉える。

ルーラリティの変化とその要因について考察していくために、先行研究で議論されている様々なルーラリティの指標とその特徴を考察した。農村観光の発展において、各指標のの変化はそれらの特徴が維持される場合、ルーラリティの維持とされ、特徴と異なる方向に変化する場合は、ルーラリティの低下と判断する。ルーラリティの維持には、村に従来存在しなかった施設が造られた場合、新規ルーラリティと判断する。また、地理学が空間を扱う学問であることに基づき、本研究は生産空間と生活空間、社会関係の 3 つの側面から研究の枠組みを構築する。研究対象については、農村観光が大都市近郊に発達しやすいことと近郊の農村においてルーラリティの衰退と維持のせめぎ合いが著しいことを踏まえ、上海市近郊に位置し、農業生産を主な産業とした状態から農村観光地へ成長してきた崇明区前衛村を事例とする。

第 2 章では、前衛村の生産空間における観光施設の展開実況を把握したうえで、土地利用と観光対象におけるルーラリティの強弱の変化を考察し、その変化と農村観光発展の関係について分析する。結果、以下の 3 点が明らかになった。

第一に、土地利用と農業機能の変化からみると、前衛村における農村観光の発展に伴い、

萌芽期には従来の農業生産にいて補助的な存在にしか過ぎなかった観光機能が、村の主要な機能へと転換していた。農林漁業の農的な用地が観光に利用される一方、多様な人工的な観光施設の導入によって、農村地域の農的な用地が都市的な用地へ転換しつつあり、土地利用におけるルーラリティは低下していた。

第二に、農業生産の観光化を分析すると、前衛村では 1990 年代から発展してきた生態農業の展開により、その観光機能が認識され、後に農村観光発展の契機となった。当初、村が生産していた新鮮かつ安全な野菜は重要な観光アトラクションとして都市住民に受け入れられた。生産空間における観光機能の強化により、生産物がローカルな農産物からイチゴやブドウなど従来栽培されていなかった商品性の高い農産物やハーブといった景観作物へ転換した。これは新規ルーラリティの出現と理解できる。一方、従来的な農産物も景観形成のためにある程度残されており、ルーラリティの維持に寄与していた。

第三に、人工的な観光施設に関しては、遊園地や博物館、テニス場など都市的な観光施設の出現によってルーラリティが低下する一方、伝統的な生産・生活文化を活用して建設された施設は、その「伝統的」という特徴から新規ルーラリティと認められる。このように、生産空間の観光化に伴い、ルーラリティは農村の土地利用類型と農業機能、および生産空間の景観と相互に影響し合いながら変化している。

第 3 章では、前衛村の生活空間における農家楽経営の展開に伴い、居住空間と集落景観におけるルーラリティの再編を解明し、その変化と農村観光発展の関係について明らかにする。結果、以下の 4 点が明らかになった。

第一に、従来の研究では、農村建築におけるルーラリティは「伝統的」、「古い」、「小規模」であることが特徴とされてきた。しかし、農村地域における経済向上を背景に、住民の生活空間を改善する需要が高まったため、新しい家屋を建造するケースが多くなった。こうした住宅におけるルーラリティの再編は、生活空間観光化の前提となった。また、農家楽経営によって経済がいっそう向上したため、建設された西洋風「別荘」住宅は一部の観光者に対してアトラクションになっていた。この西洋風別荘は現代の大都市には比較的に少ない特徴であり、農村環境の優位性を表しており、新規ルーラリティとして出現した。

第二に、農家が自宅の空き部屋を活用して観光者に宿泊を提供することで、生活空間における観光化が始まってきた。しかし、現代的な生活設備の欠如は都市からの観光者を満足させることができなかった。農村観光の進展により、観光者のアメニティ需要と政策規制、政府の改善指導により、部屋の内装や間取り、設備が都市部の宿泊施設並みに整備さ

れた。これらの変化により、生活空間におけるルーラリティが低下した。一方で、これののようなアメニティ改善は、受け入れ環境の整備という面で農村観光の発展にポジティブな影響を与えるものでもあった。なお整備の後も、かまどのような農村的特徴を持つ設備が残されており、農村の雰囲気を保ち、ルーラリティの維持にある程度貢献している。

そして、より多くの観光者を受け入れるため、一部の経営者が菜園だった中庭を利用して新しい建物を増築し、経営規模を拡大する動きも現れた。この増築による庭の農村景観が減少しルーラリティを低下させたことは、農村観光にネガティブな影響を与えている。

農家楽経営を背景に、家屋には広告看板が立てられ、また観光客の利便性のために路標や街灯、ごみ箱などが設置されたが、これらは集落景観におけるルーラリティを低下させている。一方、農村住民が綺麗と感じる都市部の街路樹も村に導入され、従来の街路樹と共に新たな農村風景を創り出した。

第 4 章では、生産空間と生活空間における観光化の進展に伴い、社会関係の要素である就業・収入構成と人間関係、生活習慣、村の管理などにおいて生じたルーラリティの再編と農村観光発展の関係を分析した。結果、以下の 4 点が明らかになった。

第一に、前衛村において、農村観光の発展に伴って、現在、全ての土地が村に統一管理され、農業を営む村民はいなくなった。それゆえ、村からの補助金の他に、観光関連産業による収入がメインとなった。この面でルーラリティの低下が著しい。これは生活空間と生産空間における観光化の結果であるが、このような収入構成であるゆえに、村民が観光業の発展を強く希望し、内部からの農村観光を推し進める原動力となる。

第二に、人間関係の側面では、伝統的で親密な村民関係において、とくに農家楽経営の競合により、トラブルが頻発するようになった。一方、従来の地縁・血縁関係に基づいて、経営者の間に観光客の宿泊を「紹介」する形式も現れた。これは農村観光の発展における従来の人間関係に新しい特徴が出ていると理解できる。また、農村における伝統的な道徳や習俗に基づいて、来客に親切に応対することはルーラリティの一つでもあり、都市住民にとって魅力的な存在になっている。しかし、観光者が増加してくると、親密的なホスト—ゲスト関係に経済関係が強く働き、従来のパーソナルな人間関係はアノニマスな関係へと転換していく。一方、村民と観光者の接触は閉鎖的な農村社会を打破するものでもあり、経済関係に基づいた新しいソーシャル・ネットワークも次第に形成されてきた。

従来、農村では伝統的な農業生産のスケジュールに基づいて村民の生活リズムや農時期が規定されており、勤務規則に厳しく規定された生活をおくる都市住民にとっては自由度

が高く感じられ、農村の魅力の一つとなっていた。しかし、村の産業転換に伴い、村民の就職構成が変わり、日常生活のリズムも観光産業に影響されて変化した。これは生活習慣におけるルーラリティの低下であろう。

観光化以前、村内部の権力構造は体制エリートの村幹部と一般村民によって構成されていたが、観光産業の発展による経済力の向上を背景に影響力を有する非体制エリートも出現した。それゆえ村の管理がより複雑になり、経済管理や企業運営の能力が必要とされるようになった。実際に村ではそれらの管理要素が導入されたものの、管理者の権威不足や村民の素質低下などが理由で、村の発展施策を適切に実行することができない事象も発生している。

第 5 章では、前衛村における農村観光の発展とルーラリティの再編を、生産空間と生活空間、社会関係の 3 つの側面から要約してまとめる。この 3 つの側面において、各要素のルーラリティ再編が相互に作用しながら展開することで、関連が強固であることが確認できる。

以上のように大都市近郊における農村観光の発展とルーラリティの再編のメカニズムをまとめ、最後に本研究の意義は動態的にルーラリティを考察することと、ルーラリティ再編を解明すること、農村観光とルーラリティの関係を考察することと述べる。

キーワード：農村観光、ルーラリティ、生産空間、生活空間、社会関係、前衛村

第１章　序論

第１節　研究背景

中国では 1978 年に開始された改革開放政策の進行に伴い、国民経済が著しく成長してきた。その過程で、とくに都市において生活向上のために労働者の勤務時間を短縮させる傾向が出現した。これらは経済力と余暇時間という観光の条件を満たすものであり、以降の飛躍的な観光発展の基礎を築くものだった。1980 年代後期からは、観光需要の増大と農村発展の需要が結びつくことで、観光活動は都市から農村地域へと拡大していった。

農村地域においては、伝統的に農業生産に基づいた生産・生活景観および社会関係が構築されてきた。しかし観光業の進入を契機として、農村では従来の物質的な生産・生活景観や無形の農村文化、村民の社会属性などの様々な側面に変化が現れるようになった。しかし、新たな産業としての農村観光の影響下で、地域がよりよく発展するための具体的な手法は未だ明らかになっていない。今後、農村観光を適切に地域の発展に寄与させていくためには、この農村地域に現れた新たな特徴の実態とその変化のメカニズムを究明する必要があると考えられる。

１．中国における農村観光の発展

中国において、1978 年以前は国民の収入が低く、観光はブルジョワ的なライフスタイルであると批判され、社会的にも政治的にもタブーと見なされていた（韓、2008）。そのため観光業はさほど発展しなかった。しかし、1978 年に経済改革・対外開放の政策が開始されると、市場経済が振興し、中国には大きな変化の波が押し寄せた。国民所得に関していえば､都市住民の一人あたり可処分所得は 1978 年の 343 元から 1999 年には 5,854 元となり、さらに 2014 年には 29,381 元と 1978 年比で 85 倍にまで増加した。農村住民に関しても同様の傾向があり、一人当たり収入は 1978 年の 133 元から 1999 年には 2,210 元、2014 年には 9,892 元と 1978 年比で 74 倍にまで増加した（中華人民共和国国家統計局、2016a）。このような経済の高度成長期は、都市部でも農村部でも国民生活を著しく向上させた。都市部においては、経済とともに住民の生活水準も向上し、物質的な豊かさだけでなく、心の豊かさを求めるニーズも増加しつつある。また工業の発展による環境汚染を背景に、都市住民の自然環境に対する意識の向上や労働ストレスの解消が求められるようになったことを背景として、農村観光に対する需要が高まっている。

また、1995 年 5 月 1 日から中国国務院によって勤務時間の短縮と土日を休日化する「双

休日」[1]政策が実施され、1999 年 からは旧暦の正月や「メーデー」（5 月 1 日）、「国慶節」（10 月 1 日）の 3 日間の休日のほか、前後土日の「双休日」が設けられたことで、連続 7 日間ずつの大型連休が誕生した。これはいわゆるゴールデン・ウィーク[2]休日制度の実施であり、国民の余暇時間の拡大に大きく寄与した。

このように、観光産業の発展に必要な経済条件や余暇時間が整備され、国内観光が急速に発達してきた（図 1－1）。従来、大勢の国際観光客を受け入れていた中国の観光業は、中国人、とくに豊かになった都市住民のニーズを満たすことを要請され、農村観光はその手段として重要視されるようになっていった。

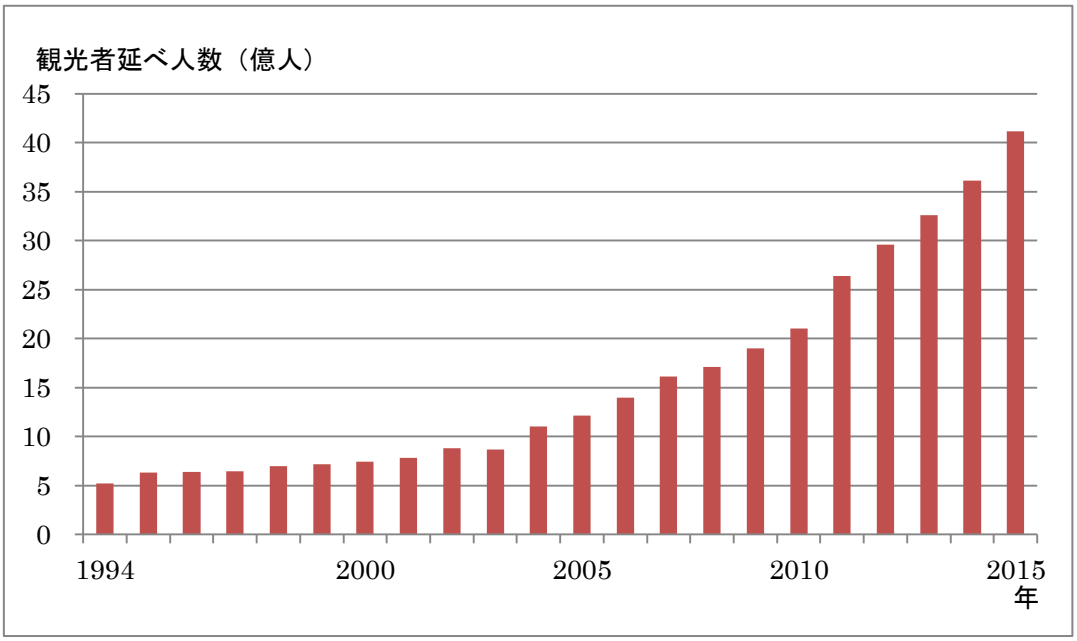


図 1－1　中国における国内観光者延べ人数の推移

注：1994-2014 年は中華人民共和国国家統計局（2016a）により、2015 年は中華人民共和国国家統計局（2016b）により作成。

この一方、農村地域では都市部との収入格差や過疎化が進展してきた。1990 年代から、「三農問題」と呼ばれる農業の低生産性、農村の荒廃、農民の貧困問題を解消するために

[1] 1994 年以前、中国には週に 6 日間、1 日 8 時間で勤務する体制を取っていた。1994 年 3 月 1 日から隔週に土曜日連続で休暇し、いわゆる「1+2 休暇制度」が実施された。

[2] 2008 年にメーデー（5 月 1 日）の 7 日間の連休が取り消しされ、ほかに清明節（新暦 4 月 4 日或いは 5 日）や端午節（旧暦 5 月 5 日）、中秋節（旧暦 8 月 15 日）の 3 つの伝統節分に 1 日休暇と前後の土日と調整し、4 つの 3 連休になった。

開始された「社会主義新農村建設」の推進過程では、農村観光参入の容易さや収益の高さが認識され、地方から中央政府まで農村観光への取り組みを重視するようになった。中国国家旅游局は観光産業を推進するために、1992 年から毎年、観光市場の需要を考慮した 1 つの観光テーマを定め、その特色を売り出す大規模な観光プロモーションを展開してきた。その中で、1998 年の観光テーマには「華夏城郷游」（中国の都市と農村観光での観光）が設定され、キャッチフレーズには「現代城郷・多彩生活」（現代的な都市と農村・多彩な生活）が謳われた。これは中国国内において初めて国家レベルで都市観光とともに農村観光を推奨したものであった。そのプロモーションでは、『古城新貌』（歴史の長い都市の新しい風貌）と『郷村旅游』（農村観光）という政府公認のガイドブックが出版され主要都市の伝統的景観や新たな観光ポイントとともに、従来あまり注目されてこなかった、改革開放以降に大きく変貌した農村部の近代的景観や主要なイベント・祭りなどが重点的に紹介された（王、2001）。そして、2006 年には「2006 中国郷村旅游年」（中国農村観光の年）をテーマとし、「新農村・新旅游・新体験・新風尚」（新しい農村・新しい観光・新しい体験・新しい気風）がキャッチフレーズとして使用され、大規模な広報活動と観光開発事業が展開された。さらに翌年の 2007 年はそれぞれ「和諧城郷游」（都市・農村観光の調和）、「魅力郷村・活力城市・和諧中国」（魅力溢れる農村・活力溢れる都市・調和の中国）という表現が使用された。また、中国政府は農村観光の発展目標として、2010 年までに 100 か所の「農村旅游特色県」（農村観光の特色のある県）、1000 か所の「農村旅游特色郷」（農村観光の特色のある郷）、1 万か所の「農村旅游特色村」（農村観光の特色のある村）を整備する計画を提示した（中華人民共和国国家旅游局、2006）、このように、中国では政府による強い後押しを背景に農村観光が重視されるようになった。

その結果、農村を訪れた観光者数は 2014 年に 12 億人に達し、国内観光者数の約三分の一を占めるほどになった。中国全土では 200 万軒の農家楽（農家が村で経営する民宿または飲食店）が誕生し、農村観光に直接従事する農民は 3,300 万人にまで達している[3]。

２．中国におけるルーラリティの再編

農村観光が進展する一方、農村地域の生態は都市的土地利用の拡大によって脆弱化していった。それに伴って景観や生活環境は変化し、農業の衰退で生じた隙間には多様な産業が現れた（Ilbery、1998）。さらに農民の離農化によって、農村の社会関係も変容しつつあ

[3] https://news.cncn.net/c_550243

る。それらを受け、農村観光の核になっているルーラリティにも再編がみられる。

まず、1990 年代中国中央政府が都市化推進戦略を策定して以降、「農村の都市化」、「農業の産業化」、「集落合併」、「都市と農村の一体化」、「社会主義新農村[4]の建設」などの開発戦略が次々に実施されたことで、農村地域において都市化が進展した。これによって伝統的な農村の特徴が消失しつつあり、同時にルーラリティも弱まる傾向が表れた。また農村観光地においては、人口の変化や農民の考え方、生活様式の変化などの内的な要因と、農村観光の拡大によって増加した観光者の需要といった外的要因によって、非農的な施設の建設とそれによる生産用地の占用が進んだことで、農村の特徴はいっそう変化している。

農村住民は都市と農村の収入格差の影響から都市への出稼ぎを行うが、それによる人口流出は農村地域の過疎化をより進行させている。農村に止まっている住民についても、農業から観光業への転業などで離農傾向が強まってきた。これらのことは農業生産を核として成立した農村文化が弱体化しつつあることを示すものといえる。

農村観光の主な観光者である都市住民は農村地域の希有な文化や景観に引き付けられているが、農村観光を経営している農村住民は都市的な生活への願望を持っている。その願望は都市への移住や農村の建物を都市的な建物を模して改築するという行為に繋がっている。また農村地域では都市住民が賃貸などの方法を通じて観光開発の主体になっている傾向も現れている。このような改築による景観の都市化と外来者による観光経営の主導という要素によって、農村地域のルーラリティは低下する傾向がある（鄒、2006）。

一方、農村はダイナミックな特徴を持っている。経済の発展に伴い、農村住民が農業から他の産業へ移転し、農村地域が総合的な発展をしていくこともまた、国と地方政府の目標である。農村の発展により、農村自身も歴史上と大きな差異がある（張、1998）。また、グローバル化によって様々な社会集団に新たな複雑な関係がもたらされ、農村地域における諸要素もその例外ではない。農村空間と農業空間の分化により、伝統的な「農村空間＝農業空間」という認識は成立しなくなっている。農村資源の利用については、農業生産より自然風景や環境、レクリエーション、娯楽の追求といった点でさらに注目されるべきである。これらの変化は農村地域の新しい特徴と認識されている（Norman、2007）。とくに、ルーラリティが農村観光の核と認識され、農村観光の発展に伴い、各地でルーラリティの

[4] 2005 年 10 月の中国共産党第 16 期中央委員会第 5 回全体会議で打ち出された政治目標である。都市と農村の格差の是正に向けてインフラ整備の重点を農村に移し、都市の公共サービスを農村まで拡大する。また、農民の負担軽減や義務教育の普及、環境整備などにも資金を積極的に投入する。

再編を重視する傾向がみられるようになった。このように、農村地域においてルーラリティは再編されている。

第２節　先行研究

農村観光については、これまで多くの研究者によって様々な定義と解釈が行われてきた。しかし、農村観光における理論研究はまだ萌芽の段階にあり、基本的な概念に対する認識や方向性には相違がみられるという現状にある。ただしルーラリティに関しては、農村観光の核であるとの認識が一般的となっている。本節ではまず先行研究における農村観光とルーラリティに関する概念を分析し、それを踏まえながら本研究における農村観光の概念を明確化する。次に既存研究におけるルーラリティを研究する側面とその要素特徴を考察したうえで、本研究の分析視点を検討し、論文の枠組みを構築する。

１．農村観光の概念

農村観光を簡潔に定義するならば、農村という領域で行われているすべての観光活動のことである。これは広義的な農村観光と呼ばれている（Lane、1994；菊地、2008）。しかし広義の定義ではそれが持つ多様な側面を見過ごすことになりかねない。OECD[5]はあらゆる国の全ての農村地域に適用できるような、より複雑な定義を行うことは難しいと述べ、農村観光に多様性があることを指摘している（OECD、1994）。そして、広義の定義について、以下の問題を指摘している。

①都市あるいはリゾートを核とする観光は都市地域に限定されず、農村地域にも及ぶこと。

②農村地域それ自身を定義することが難しく、国によってその判定標準も違うこと。

③農村地域で行われている観光の全てが必ずしも「農村的」であるとはいえず、都市的な形式をとることもあり、単にそれが農村地域でも発生している可能性もあること。

④歴史的にみると、観光は都市的な概念であり、多くの観光者は都市に住んでいる。観光は農村地域に都市化の影響を与え、その文化や経済、地域構成の変化を促進してしまうこと。

⑤異なる地域に発達している農村観光の内容には違いがみられること。たとえば、ファームを核とする観光はドイツとオーストリアで非常に重要であるが、アメリカとカナダには少ない。

⑥農村地域自身には複雑な変容プロセスがある。グローバルマーケットと通信、テレコ

[5] 経済協力開発機構の略称である。

ミュニケーションの影響で、伝統的な製品のマーケット状況やその志向を変更した。環境保護主義の流行は、「アウトサイダー」による土地利用や資源開発のコントロールを促進している。多くの農村地域は依然として過疎化が進行しているが、一部分の地域に定年者や新しい「非伝統的」事業を展開するために人が流入していることもある。都市と農村との明確な区別は郊外化、長距離通勤とセカンドホームの開発によって不鮮明になった。

⑦農村観光は、複雑かつ多面的な活動であること。それは単なるファームベースの観光ではなく、その他にも特別な関心が寄せられる自然休暇やエコ・ツーリズム、ウォーキング、登山、乗馬、冒険、スポーツ、ヘルスツーリズム、狩猟、釣り、教育旅行、芸術、文化遺産観光、一部の民族観光を含む。

この 7 つの問題点を分析すると、農村観光を「農村において農業、農家生活、地域文化、農業景観などを媒介に展開される観光活動である」（楊、1992；肖ほか、2001）と狭義に定義することと同様である。これは主に農村観光の内容が多様であることと農村自身の概念が曖昧であることに基づいたものである。また、林・石（2006）は中国国内外における 20 個の農村観光の定義を整理したうえ、農村観光は①農村の田園景観、②民俗文化、③農業生産活動、④農家生活体験、⑤農村地域で行うこと、⑥休日の観光遊覧の活動など 6 つの項目を含んでいると指摘している。この 6 つの項目は、①～④が観光活動の内容を示しているが、⑤は地域を限定したもの、⑥は観光活動の時間を限定したものといえる。このように異なる分類基準が混在していることで、提示されている概念は複雑になっている。例えば、張（2010）は行政範囲としての都市内であっても、農村の特徴を持つ地域を含めて農村観光の活動範囲と捉えることとしているが、鐘（2007）は農村観光は農村地域に依存し、観光活動が農村地域で発生しなければ、農村観光と称することができないと規定している。その例としては、都市における農業・農村をテーマとするテーマパーク、都市に展開されている民俗観光が挙げられている。何・李（2002）は農村観光を農村自然観光と農場観光、農村民俗観光に分類し、農村のテーマパーク、リゾート観光、先進科学農業園などを農村観光から除外している。これらの内容は現在農村地域に展開している新しい観光内容と考えられる。

もし単純に農村観光をその言葉のみで考えると、観光は主語、農村は限定語であるという視点から、農村観光とは農村地域で行われているすべての観光活動であることと捉えられる。農業観光が都市部に展開すれば、都市観光に所属すると考えられる。農業あるいは

農村文化と関係がないテーマパークなど観光活動が農村に展開すれば、それは農村観光ということになる。農村が開発され、経済・景観・機能などの条件を満たし場合、その地域が都市になると同様に、農村観光の発展による都市化が進展した場合、その地域で行われる観光は観光内容が変わらなくても、都市観光ということになる。つまり農村観光であるか都市観光であるかという問題は観光活動に展開される地域の属性に決められているということである。このように農村観光は農村地域で行われているすべての観光活動であると定義できるが、困難なのは農村地域の定義である。

伝統的社会における村落は、都市の絶対的対立概念として「都市―農村」二分論的に捉えられていた。農村は第一次的に職業を求め、農業を基礎とする地域的システムとそれを基底とする生活様式で規定される。産業革命以降、都市と農村は密接な連関をもつようになり、村落の閉鎖性は崩れ、農村地域はさまざまなタイプの村落が同居するいわば異質空間へと変化する。こういった村落変化と農村地域分化への接近は都市―農村連続体論の枠組みから議論されている（高橋、1997）。こうした議論を踏まえていえば、農村を定義するのは困難である。それは今日までに職業的、景観的、生態的、社会・文化的など多様な観点から定義が試みられてきたが、未だ統一的見解は存在していない（ホガート・ブラー、1998；張、1998）。したがって農村というものを扱う際には、それをどのように捉えていくかという視点を設定することがあらかじめ必要になると考えられる。例えば緒方（2009）は、中国の郷村観光[6]を議論する上で「郷村」という言葉が示す範囲の曖昧さを避けるために、郷村観光をとくに行政村が主体となって行うものであると定義している。このような行政範囲という客観的に認識できる地域を一つの農村として捉えることは有効な手段である。したがって、本研究でも農村という概念の複雑さを避けるために、行政区画で「村」と規定されている行政村を研究対象とする。

前述の通り、農村観光は農村地域（行政村）で行われているすべての観光活動であると定義したが、先行研究においては農村観光に類似する概念としてルーラル・ツーリズムやグリーン・ツーリズム、農業観光、アグリツーリズム、ファーム・ツーリズム、エコ・ツーリズムなどの用語が挙げられている。これらの概念の区別に関する研究も数多くなされているが、同一視して扱う場合も少なくない（宮崎、1998；劉、2006；菊地、2008；張、2013）。そこで、以下ではこれらの類似概念を整理し、各概念の分類基準から区分を試みる。

---

[6] 中国において、「郷村旅游」と呼ばれているが、本研究では全て「農村観光」と翻訳する。この部分のみ緒方（2009）の研究を直接引用して「郷村観光」という言葉を使用する。

グリーン・ツーリズムという概念は、時代ごとに変化し、現在は従来とは異なる意味で使用されている。1980 年代に提起された当初は、環境への影響を最小限に抑えながら自然地域を訪れる小規模な観光を指していた。ほかに、エコ・ツーリズム、自然観光、農村観光などの概念と同意義で使用されてきた（Sung et al、2003)。ただし、観光ビジネスでは、一般的な定義よりも広い意味を有し、環境に優しいすべての観光活動を指すとされている（Pintassilgo、2016)。このようにグリーン・ツーリズムは環境への影響を配慮することが中心要素となっている（Jones、1987；Pintassilgo、2016)。したがってこの言葉は農村地域だけでなく、都市化された海岸地域やスキーリゾート地域にも展開されている（Jones、1987)。概念を区別の基準から見ると、グリーン・ツーリズムというのは、「グリーン」が観光内容に関する象徴的な色を名づけている用語である。色彩によって象徴された観光であり、カラフル・ツーリズムとして認識されて、類語はブルー・ツーリズムやホワイト・ツーリズム、イエロー・ツーリズム、ダーク・ツーリズムなどがある（舛谷、2009)。しかし、日本の場合、グリーン・ツーリズムとは農村での滞在型余暇活動を指すことが多い。またこうした利用者に宿泊サービスを提供する民宿経営など、農家が行う観光的活動を指すこともある。政策の面では 1992 年に農林水産省によって農山村地域活性化の重要な手段として位置付けられ、1995 年には通称「グリーン・ツーリズム法」（農山漁村滞在型余暇活動促進法）が施行された。農林漁業の体験を組み合わせて宿泊サービスを提供する体験民宿の登録制度が整備され、農家民宿を中心に組織化が図られるようになっている（長谷、1997:13)。

エコ・ツーリズムは自然環境の保全を強調している観光形態であり、マス・ツーリズムによる弊害の反省から、従来それほど重視されてこなかった自然環境の保全という点を強く主張している点に特徴がみられる（長谷、1997)。それは環境意識を中心とした概念であり、グリーン・ツーリズム本来の意味とほぼ同義である。これは観光活動を環境に対する影響の判断基準としたものであり、すなわち観光活動は地域の環境に弊害があるかどうかで判断される。類語は存在しないが、意味だけをみれば、破壊的な観光に対立するものといえる。

農業観光およびアグリツーリズムとは、農業資源を活用した観光形態である。具体的には収穫体験や農産物の食体験、農家民泊などが挙げられる。産業類型に基づいて作られた言葉であり、工業観光の類語である。

ファーム・ツーリズムはファームという場所をベースとした観光であり、農村観光が内

包する 1 つの観光形式であると理解できる。

このように、農村観光に関する概念は分類の基準により、表 1−1 のように整理できると考えられる。

表 1−1　農村観光に関する概念

概念	分類基準	類語
農村観光	観光地域の特徴	都市観光
農業観光	観光対象の産業分類	工業観光
グリーン・ツーリズム	観光対象の象徴色	ブルー・ツーリズム ダーク・ツーリズム レッド・ツーリズム[7]
エコ・ツーリズム	観光の環境影響	
ファーム・ツーリズム	観光活動の場所	

以上から、農村観光は観光活動が展開される地域の特徴を分類基準として、都市地域で行われている都市観光と対峙する概念だと考えられる。ルーラル・ツーリズムは農村観光の和訳用語で、同様の意味であると理解できる。したがって本研究における農村観光とは、農村地域で行われている全ての観光活動を含む概念と定義する。

なおここでの農村は行政区画上農村と呼ばれている行政村のことである。中国において、都市と農村の関係は以下の図 1−2 で示すことができる。都市域において、市区（あるいは城区と呼ばれる中心市街地）と郊外に分かれている。市区は都市の中心部であり、行政上では複数区に分けることが多く、区レベルの下には街道を設置している。郊外は都市の外縁部にあり、行政上では県（あるい区）に分けられている。県（区）レベルの下は郷（あるい鎮）が設置され、その下は村であり、すなわち農村になる。

[7] 中国において、レッド・ツーリズムは歴史を代表する重大事件や重要人物、歴史的な文化遺産などを取り入れ、貧しかった中国がいかに国民を解放し、富強に努め、繁栄してきたかという歴史的過程を観光内容とする観光活動である。

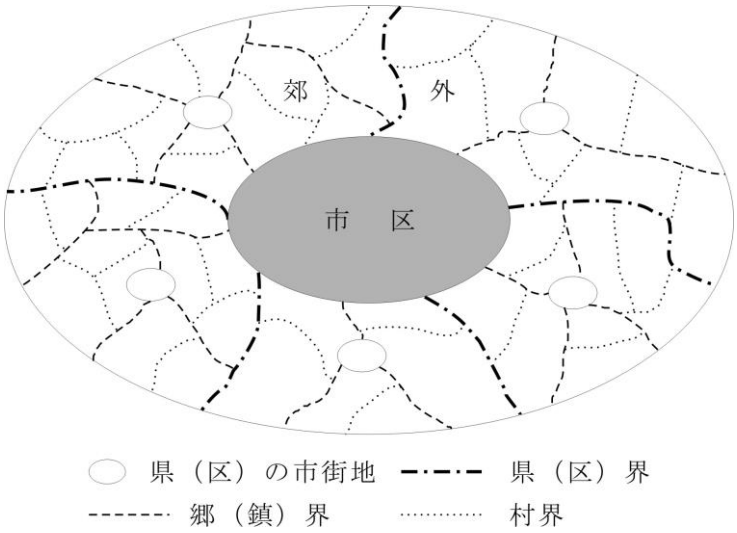


図１－2　中国における都市と農村の行政区分

２．ルーラリティの概念と特徴

（１）ルーラリティの概念

前述のように、農村観光とは農村地域で行われている全ての観光を対象とする概念である。次に農村地域の概念をみると、社会の生産力向上に伴う都市化の進展による伝統的な特徴という点に変化がある。経済上の農業から非農業へ、社会構成における農民の分化、集落の農村型から都市型への変化といった点は、都市と農村を明確に区分することを極めて困難にしている（張、1998）。純粋な農村から都市への変化は急激に進行したのではなく、漸進的なものである。したがって、都市と農村を連続体と考えて、一方の極である都市域と他の極である農村域を対比することは容易である（高橋ほか、1997）。この背景から 18 世紀に rural という英語から ruralité というフランス語が派生した。それに基づいて rurality という言葉が誕生し、農村の成立条件として指すようになった（龍・張、2012；李・張、2015）。農村を定義することより、一定の地域内で、ルーラリティの強さ（対立面から見ると、アーバニティの強さもいえる）を考察することが重視された。図１－3 のように、ルーラリティ指数が 1（アーバニティ指数は 0）であれば、その地域は純粋な農村であり、逆にルーラリティ指数が 0 であれば、その地域は純粋な都市である。ある地域はルーラリティとアーバニティの統一と見られ、ルーラリティが強い地域はアーバニティが弱く、農村地域である（張、1998）。しかし、これは理論上の分析に止まっており、具体的にルーラリティをどのように考察するかについては言及していなかった。

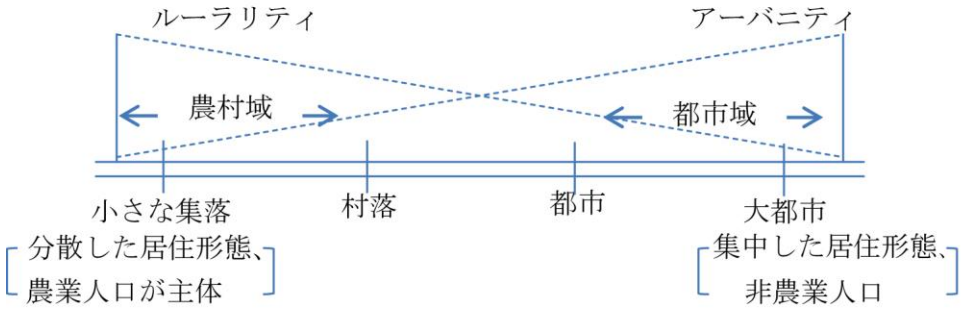


図 1－3　都市・農村連続体

（高橋ほか（1997）と張（1998）より引用作成）

地理学において、ルーラリティの評価基準は、人口と経済特性が利用されている。Cloke（1977）は、人口密度と主な農村産業における男性雇用の割合、他地域で仕事をする当地住民の割合を変数とした計算式から算出したルーラリティ指数から、イングランドとウェールズの地域を極度の農村や中程度の農村、中程度の非農村、極度の非農村、都市の 5 種類に分類した。龍ほか（2009）は耕地変化率や人口変化率、農業従業率、農地産出率、農業労働力生産率を利用して、加重平均値で計算したルーラリティ指数により、中国東南部沿海地域の 615 県・市を考察した。しかし、これらの研究はいずれも農業に関する指標に基づいた考察であるため、ルーラリティは基本的に農業に関する特徴と認識されている。農村地理学において、ルーラリティに関する研究は地域の経済構成を対象としている。

観光学においても、ルーラリティの重要性が認識されている。農村地域におけるルーラリティと都市地域におけるアーバニティとの差異が都市住民を農村観光に駆り立てる原動力であり、その意味でルーラリティは農村観光が存在する基盤である。また農村観光の内容は地域によって大きく異なるが、農村観光が持つ特徴として、ほとんど全てのケースにおいてルーラリティが農村観光商品の中心的かつユニークなセールスポイントになっていることが挙げられている（OECD、1994）。

これらが強調しているルーラリティは都市が持たない特徴である。Bramwell（1994）は持続可能な観光における農村観光の持つ意義を分析する際に、都市部と都市社会から消失した全ての特性、つまりルーラリティが重要であり、保護する必要性が高いと論じている。篠原（2013）は北海道羅臼・標津町の漁村が都会では持ちえない独特の風景や体験空間の雰囲気により外来者を惹きつけていると指摘している。また呉羽（2013）は農村観光において農村独自の景観、雰囲気、文化、さらに生産物などルーラリティの消費が重要であり、

ルーラリティとは農村空間に独自な特徴で、また農村空間と関連する文化的重要性でもあると捉えている。しかも、高柳（2013）によれば、都市からの観光者にとって、魅力的な観光対象になる農村の特徴は理想的な農村像であり、郷愁、自然、純朴、静寂といったことがその構成要素である。この際、農村が抱えてきた前近代的、因習、不便、貧困などのネガティブな要素は排除されているという。このように観光学において強調されているルーラリティは農村地域が持つ都市地域とは異なる特徴であり、経済構造のほか、景観上、文化上の特徴も強調されている。

またルーラリティは社会文化的な現象としても定義される。小原（2004）はルーラリティの意味がしばしば農村地域の性格と関連付けられるとしたうえで、その性格は農業生産、土地利用、農地、農家の他に、それらから生じるコミュニティから成っていると指摘した。

しかし、このような見方は都市―農村二分論に基づく意識が強いと考えられる。前述で都市と農村の関係を分析した通り、現代において都市と農村を明確に区別するのは困難である。したがって農村観光において、必ずしも都市が持たない特徴が消費されているとはいいがたい。農村観光、とくに大都市近郊における農村観光は、主に都市住民によって観光価値が見出されているが、観光者の需要に変化が生じると、農村地域もその変化に対応しようとする。小原（2010）が定義したように、農村観光に構築されるルーラリティは、生産主義のパラダイムの下で構築し続けられた従来の農業や農民、そして農村的土地利用によって構成される農村ではなく、ポスト生産主義という新たなパラダイムの下で都市住民やメディアなどの外部の主体によって表象される農村のものである。そしてルーラリティは、外部の主体の背後にある社会や歴史、文化などに影響を受けながら、農村（田園）景観や農業、農産物などの要素だけではなく、それらの要素の組み合わせによって表象されていくものである。このように農村観光の発展過程においては、農村地域には都市的な要素が侵入することが一般的であると考えられる。

また従来農村が持っていたネガティブな要素が農村の発展によって変化したことで、そのプロセスが農村発展の成果を示すものとして観光対象となっている。とくに中国における「社会主義新農村建設」[8]の成功例が観光対象になる場合が多い。前述のようなルーラリティの定義を用いると、農村における都市的な要素の侵入が無視され、農村観光の発展を

[8] 2005 年 10 月の中国共産党第 16 期中央委員会第 5 回全体会議で打ち出された政治目標。都市と農村の格差是正に向けてインフラ整備の重点を農村に移し、都市の公共サービスを農村まで拡大する。また農民の負担軽減や義務教育の普及、環境整備などにも資金を積極的に投入する。

全体的に把握することが困難になる恐れがある。

そこて本研究においては、菊地（2012）が指摘している「ルーラリティは農村的要素や農村らしさの諸相を捉えることにより展開している」との考えを援用する。次に、ルーラリティの特徴を考察する。

（２）ルーラリティの指標と特徴

農村観光の発展によるルーラリティの変化を解明するために、まず先行研究からルーラリティに関する指標を究明する。ルーラリティがどのような要素で判断され、伝統的にそれらの要素はどのような性質・特徴を持っているかについて確認することが必要である。

Lane（1994）は観光学に先行してルーラリティを研究対象としてきた地理学者や社会学者、経済学者たちの研究に基づいて、ルーラリティが人口密度と居住地サイズ、土地利用（農業と森林が主とするもの）と経済、伝統的な社会構成という 3 つの変数から認識されていると述べている（表 1-2)。具体的には以下の特徴を指す。

(1) 少ない人口と広大な自然空間・農場・森林による低い人口密度、規模が小さな居住地。

(2) 農業や森林、自然空間が主となっている土地利用。詳述すると土地が建築物に占められている割合が 10－20%以下であること。

(3)「伝統的」な社会構成とコミュニティアイデンティティ、遺産などを持つ。

Bramwell（1994）はルーラリティを農村地域固有の土地景観、居住地、多様な人文遺産などであると指摘している。

山田（2008）はグリーン・ツーリズム登場以前の 1992 年までの、日本の農山村地域における農村観光の変遷について、「農家」、「農地」、「農村景観」の 3 つの視点から考察し、それぞれの観光との関わりを明らかにした。具体的に述べれば、「農家」の変化については主にスキー場の開設による民宿開業、テニスなどの夏季におけるレクリエーション活動の増大によるテニス民宿開業、民宿の改装・拡大に影響された結果であるとしている。民宿は農村観光と認識されているが、スキーなどの観光者の増加によって展開し、民宿自身は観光アトラクションではなく、「農的な要素を観光客へのアトラクションとして持っていない観光」として区分されている。一方、「農地」「農村景観」については、観光農園、「ふるさと」を売りにした都市住民との交流、自然休養地などのレクリエーション地、美しい農村

表 1－2　都市観光と農村観光の特徴

	指標	都市観光	農村観光
土地利用	オープンスペース	狭い	広い
	インフラ	整備	未整備
	土地利用	農地と林地が少ない	農地と林地が多い
	環境	建造物／人工的	自然的
人口と居住地	住民数	10,000 人以上	10,000 人以下
	人口密度	高い	低い
	居住地	大規模	小規模
	居住と勤務先の距離	遠い	短い
	訪問者	多い	少ない
	建物	現代的	伝統的、古い
社会関係	活動	室内	室外
	企業活動	国内、国際	地元
	観光への関与	フルタイム	パートタイム
	季節の影響	弱い	強い
	観光産業と他産業の関係	独立	依存
	ホスト―ゲスト関係	アノニマス	パーソナル
	マネジメント	プロフェッショナル	アマチュア
	雰囲気	国際的	ローカル
	発展	速い	遅い
	アピール	ジェネラル	スペシャリスト
	マーケティング	一般的	ニッチ

（Lane（1994）より整理作成）

景観の観光対象化など「農的な要素を観光客へのアトラクションとして持っている観光」として区分している。

この研究では「農的な要素」の変遷に注目して、「非農的な要素」であるスキー場、テニス場を民宿の単なる展開要因として扱い、その要素の変遷を十分に分析していなかった。

王（2009）はルーラリティを農村地域における都市的な性質・特徴と異なるものであり、その本質には農村の人々に創造された農村文化があると述べている。それには農村的な建築や服飾、食品、田畑、果樹園、環境などの有形のものと、民俗、風俗などの無形のものから構成されると述べている。

井口ほか（2008）は静岡市増集落の石垣イチゴ地域の農村商品化を考察し、観光農園での摘み取り行為や摘み取られるイチゴ、および関連商品だけが消費されるのではなく、久能地域独特の自然環境や景観、そして石垣イチゴ栽培の生産活動そのものやその歴史なども観光客を引き付ける重要な要素であると指摘する。すなわち、観光者は新鮮な農産物のほか、その栽培風景や施設、そして多様な農産加工品やそれを提供する店などが一体となって醸し出す農村らしさ、いわゆるルーラリティに触れることを求めている。この研究は、ルーラリティの要素として生産物や栽培風景、自然環境を示している。

呉羽（2013）は市民農園、産地直売施設、自然休養村、農作業体験などの観光内容を、ルーラリティを商品とする農村観光と区分する一方、観光農園、民宿、観光牧場などがルーラリティを消費しない農村観光と認識されていると述べた。ここではルーラリティを農村の雰囲気や文化に極めて制限している。

他方、Halfacree（1995）はイギリスの農村住民に対する調査により、農村地域を性格づけるものであるルーラリティが生態的基盤と経済的基盤、社会的基盤の有機的な相互関係のシステムによって作られていると指摘している。これらの基盤は農村空間の基礎的な構成要素であり、それらの機能の及ぶ範囲や舞台が農村空間になる。このシステムに基づき、Kikuchi et al（2002）は小平地区と寺家地区を事例として、そのルーラリティの商品化プロセスを解明した。まず、美しい田園景観を保全しながら、土地と人を含めた農村資源を活用する。そして、観光農業の推進などで農業の第三次産業化を促し、農家の生活安定と地域での就業機会の増大に努め、地域の活性化を図る。最後に、農村と都市の相互理解を深める。このように、農村の生態的基盤が山の林地や谷地田を保全することにより維持されるようになり、1つの基盤の維持・発展はほかの基盤にも維持・発展する方向で影響を及ぼし、ついにはルーラリティの維持・発展にも繋がっていると述べた。こちらに言及している生態的基盤と経済的基盤は農村地域の土地利用およびその土地に展開している産業構成を指し、空間上は生産空間として反映されている。

一方、景観学においては、伝統的な農村景観の特徴は粗放的な農林業が主となる土地利用景観や低密度の集落空間、その農村環境や背景と融合している生活方式で構成されてい

る（李、2005）。尤ほか（2012）はルーラリティを農村景観と農村文化の 2 つの側面に分け、農村景観を集落建築、田園景観、生態環境の 3 要素に、農村文化を生活方式と農作文化、民俗の 3 要素に細分化して考察するべきだと主張している。

以上のように、先行研究では農村住民や観光者など主体の認識を基準に、ルーラリティ（農村的要素、農村らしさ）の評価指標を設定したうえで、その特徴が分析されている。しかし、農村観光の観光対象には、意図的に開発されたものも存在する。そして、それらが各指標の特徴を変化させ、農村の新たなルーラリティとして認識されるケースもある。農村観光の発展において、各指標のの変化はそれらの特徴が維持される場合、ルーラリティの維持とされ、特徴と異なる方向に変化する場合は、ルーラリティの低下と判断する。ルーラリティの維持には、村に従来存在しなかった施設が造られた場合、新規ルーラリティと判断する。そこで本研究では、ルーラリティに関する指標の特徴変化から、ルーラリティの維持と低下、新規を分析することで、ルーラリティの再編を考察する。

日本においては、菊地（2008、2012）のように農山村地域の発展プロセスを事例に、農業生産や自然風景の維持によるルーラリティの商品化メカニズムが考察されている。しかし、中国の事例では、ルーラリティの維持・構築が重視され、ルーラリティの低下を農村観光の阻害要因に位置付けることが多い（鄒、2005；席ほか、2011）。本研究は日本においてみられる地域発展プロセスを中国における農村発展の事例に援用し、ルーラリティの再編実態とメカニズムについて考察する。これによって、中国における農村観光研究を補完できると考えられる。

地理学は、空間を扱う学問であるため、本研究も空間の視点からルーラリティの変化を考察する。農村空間の構成について、龍（2013）は農村空間が生産空間、生活空間、生態空間の 3 つの部分に構成されていると述べている。ここでの生態空間は生産空間と生活空間における生態環境のことであり、生産空間と生活空間にそれぞれ反映されている。この分類は物質空間に注目して、社会関係について言及していない。

農村観光が生産空間と生活空間において展開されることで、村民たちの社会関係もその影響を受けている。ルーラリティを考察する先行研究では、社会関係も重要な構成内容だとされている。

農村観光の発展プロセスを概していえば、農村地域における生産風景の観光機能が認識され、実際多くの観光者を惹きつけたことで、農村観光の発展が始まる。そして観光者の増加による飲食と宿泊の需要拡大に応じて、村民生活の場である農家が民宿として利用さ

れるが、こうした生活空間への観光機能の侵入は農村観光による影響の拡大を意味する。最終的には、農村において観光業による地域への経済的貢献が農業生産のそれを上回り、村民の職業と収入構成が変化し、村民関係もその影響を受ける。このように農村観光が生産空間から、生活空間ないし社会関係まで進入するプロセスを見渡せる。

また、伝統的な農村空間では、生活空間と生産空間をはっきり分けることが難しいが、農村地域の発展に伴い、生活空間と生産空間とは徐々に分離し、それぞれの機能・役割がすみわけしている。とくに、中国においては、すべての土地の所有権が国に帰属しており、住宅の建築も村によって計画されている。現在中国の農村でも、一般的に村民が集中的に居住し、生産空間と生活空間とは分離できている。

そこで本研究は物質空間と非物質空間の双方を対象とする。具体的には生産空間と生活空間、および社会関係の 3 つの側面から、ルーラリティの変化について考察する。前述の先行研究に言及されているルーラリティの考察内容をこの 3 つの側面から整理すると、表 1－3 のように整理できる。それぞれ 3 つ全て、あるいは 2 つ以上の側面に該当していた。本研究において、各側面を考察する内容は基本的に Lane（1994）のルーラリティとアーバニティを区別する指標に基づきながら、必要に応じて他の研究内容を補助的に用いていく。

表 1－3　先行研究におけるルーラリティの考察側面と本研究の関係

既存研究	生産空間	生活空間	社会関係
Lane（1994）	土地利用	居住地	社会構成
Halfacree（1995）	生態基盤、経済基盤	—	社会基盤
李（2005）	土地利用	集落空間	生活方式
山田（2008）	農地、農村景観	農家、農村景観	—
尤ほか（2012）	田園景観	集落建築	生活方式

第３節　研究の目的と枠組み

１．大都市近郊の農村観光地

農村観光地の多様化が益々進んでいる。空間分布の特徴から見ると、農村観光は都市近郊型や観光スポット近隣型、遠隔地域型の 3 つの類型に分けられる（肖ほか、2001）。農村観光は都市化の進展による環境汚染や生活ストレスの増大を背景に発展し、その主体は都市住民が中心である。そのためこの 3 種類の農村観光地の中でも、とくに都市近郊型の農村観光は、農村的な観光資源の他に都市からの移動距離の短さや人口の多さという立地的な条件の良さがあるため発達しやすい。

一方、都市的な要素の影響を受けやすいという性質もある。都市近郊農村において、都市的要素が景観や社会経済、および生活文化などの面において農村のそれを凌駕し、ルーラリティが都市的要素やアーバニティの拡大に伴って脆弱になり、ついにはルーラリティの衰退を決定づけてしまうという観点（菊地、2012）がある。それに対して、ルーラリティを農村観光の核心的な存在で独自のセールスポイントとして認識する観点（OECD、1994）もあり、農村観光においていかにルーラリティを維持するかが重要であると指摘する研究（小原、2010）もある。中国では、ルーラリティが農村観光の開発と評価について利用され、それが農村観光の基礎となることから、観光開発におけるルーラリティの維持の重要性も認識されている（鄒、2005）。これらを踏まえれば農村観光の重要な役割を果たしているルーラリティの維持と再編を行うことは重要だと考えられるが、大都市近郊における農村観光地には、ルーラリティの衰退と維持のせめぎ合いが著しい。

そのため、大都市近郊における農村観光地を研究対象とすることが重要である。本研究は上海市近郊に位置し、農業生産の村から農村観光地に発展してきた上海市崇明区前衛村を研究対象とする。

２．本研究の目的

従来の農村観光ではルーラリティの重要性が強調され、それをいかに維持していくかが主要な課題であった。しかし一般的には、ルーラリティは都市化の進展とともに低下していく。農村地域では、経済や生産力の発展に伴って都市生活の利便性などを望む意識が拡大している。実際に都市的な要素が導入されたことで伝統的な農村の特徴、つまりルーラリティ自身も再編している。その中には都市からの観光者の需要に合わせて創り出されて

きたものや、都市的な要素に影響されたものもあると考えられる。これを踏まえれば、農村観光研究においてどのような要素がルーラリティを維持し構築しているか、そしてどのような都市的な要素がルーラリティに影響しているかという観点から、ルーラリティの変化を考察することは重要である。

このように農村観光の発展によりルーラリティは農村地域における都市化の進展とともに低下しながらも、農村観光の核として認識されている。またルーラリティは農村地域のいくつかの基本的な要素を再編することで維持され、新たに生み出されていることもある。そこで本研究では、伝統的な農村から農村観光地に発展してきた上海市崇明区前衛村を取り上げ、大都市近郊の農村空間における農村観光がどのように進み、観光化された農村地域がどのような特徴を持つように至ったか、すなわち農村観光の発展に伴うルーラリティの低下と再編の実態および要因について考察し、そのメカニズムを明らかにすることを目的とする。

農村観光の発展に伴い、農村地域における変化が様々な側面で表れて、従来の地理学、経済学、文化学、人類学などの研究者はそれぞれの分野から考察している。しかし、観光学においても非常に重要な概念であるルーラリティの観点からは、包括的に地域の変化を分析する例はみられていない。

ルーラリティは農村観光の核として強調されているが、ほとんどの先行研究ではルーラリティが都市の持たない特徴として強調されている。この文脈ではルーラリティは都市に居住する観光者が持つ理想な農村像を示すものであり、ネガティブな要素は排除されている。このような背景において、中国の研究者の間では、農村観光における都市的な要素を批判することが多い。日本におけるルーラリティの商品化に関する研究は、農業や自然資源、伝統的な文化を活用することが注目されてきた。しかし、農村のネガティブな要素は農村観光の発達を妨げる要素であり、農村観光を発展するために、これらの要素が改善対象とされている。とくに中国における研究は地域発展のための提言を意図していることが多いため、伝統的なルーラリティだけ強調すると、農村観光の発展を阻害してしまう危険性がある。本研究はルーラリティに着目し、関連する要素の変化を考察することを通じて、ルーラリティの再編を全面的に把握したうえで、その変化のメカニズムを究明する。

３．本研究の枠組み

先述したように、本論文はルーラリティを生産空間と生活空間、社会関係に分類し、前

衛村の観光化プロセスにおける、それらの 3 つの側面の変化とそれぞれのルーラリティとの関係について明らかにする。

農村観光地としての前衛村は、農産物を生産する農地の観光化からはじまり、その発展に伴って、多様な観光施設が農地で展開されるようになった。また、宿泊需要の増加により、住宅を農家楽とよばれる宿泊施設に転用したことが、観光発展に重要な役割を果たしている。本研究では土地利用の変化を生産空間から考察し、住宅に関する変化は生活空間に考察する。

ルーラリティを評価する指標を設けた上で、それに基づいた各観光対象におけるルーラリティの強弱を定量的に評価し、ルーラリティの変化とその要因について考察する。最後に、ルーラリティの変化の特徴とその要因を考察して普遍的なモデルをまとめることを試みる（図 1－4)。

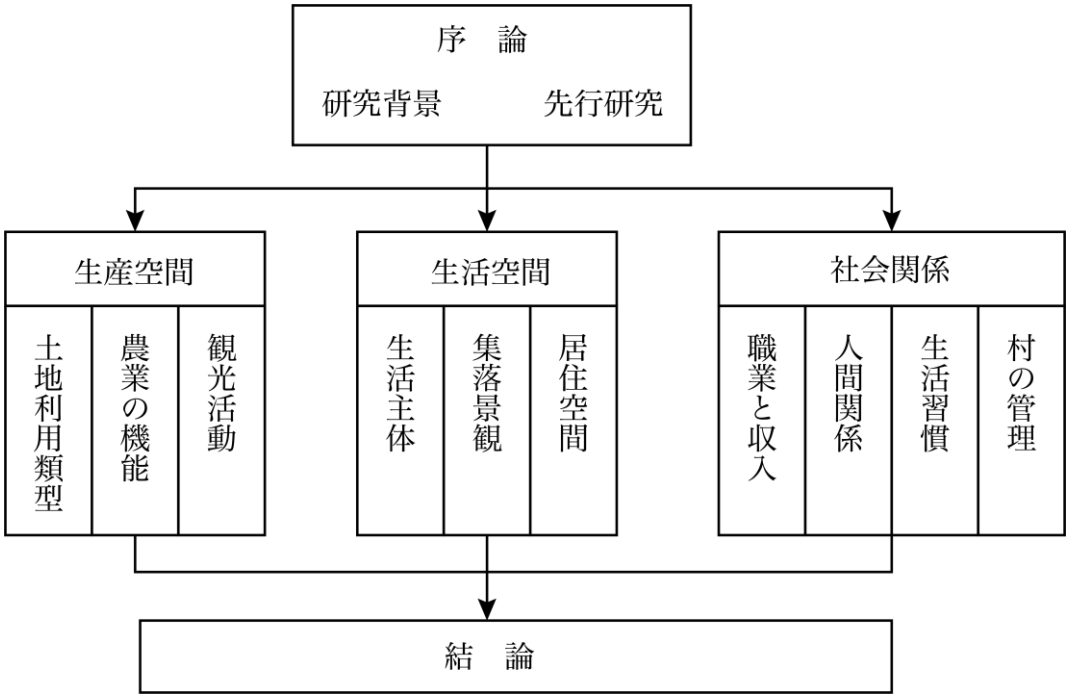


図 1－4　本研究の枠組み

本研究を進めるため、前衛村の農村観光に関する現地調査を、2014 年 3 月と 2015 年 3～4 月に 2 回に渡って実施した。

第 1 回の現地調査ではまず村長の N 氏に聞き取り調査を行い、前衛村の農村観光発展の経緯を調査した。村民委員会によって発行された観光パンフレット、2012～14 年の観光者

統計表などの資料を収集し、前衛村における農村観光の概要を把握した。その次に現地調査では前衛村の農家楽を経営している農家の 40 世帯を対象に、聞き取り調査を行い、経営者構成と経営の経緯、経営内容、客室数、集客方法、収入構成に関する情報を収集した。

第 2 回の現地調査では、農家楽経営者に対する調査を引き続き実施するとともに、農家楽を経営していない農家にも聞き取り調査を行い、家族構成と職業、収入、生活習慣の情報を収集した。出稼ぎなどの原因で実家に住んでいない村民に直接調査できない場合、近隣住民からその家族に関する情報を収集するように努めた。中国の農村地域において、近隣に住む住民同士には密接な付き合いがあるため、代替策であるものの、調査結果には、信憑性が確保できると考えられる。最後に、前衛村では歴史的な土地利用に関する資料が作成されていなかったため、本研究は観察調査によって前衛村における土地利用の現状と観光施設の分布を把握するとともに、経営者と村民への聞き取りから、各施設の開業時間と経営内容、開業前の土地利用状況、開業のきっかけについて調査し、土地の利用歴を明らかにしたうえで、前衛村の観光施設の発展と土地利用変化のプロセスを把握した。

第４節　研究対象地域の概要

崇明区は元々中国最大の都市上海市に属する県であったが、2016 年 7 月 22 日に中国国務院の許可によって、区に行政区画が変わった（撤県設区）。長江河口に位置する崇明島[9]を中心に、長興島と横沙島などの島部により構成される。崇明島の面積は約 1,225 ㎢であり、東西約 80km、南北約 15km の、中国で 3 番目に大きい島である（台湾を含む場合）。また、世界一大きい沖積島でもあり、長江の門戸、東海瀛洲とも称される。島の東に東シナ海、南と西、北には長江に囲まれる。島は全体的に平らで、山も丘もなく、島域の約 90%が標高 3～4m で、西部が東部よりもやや高い。崇明区は島であり、2009 年に長江トンネルと大橋が開通される以前、宝楊路埠頭から崇明区の南門埠頭までフェリーでのアクセスしかなかった。2009 年以降、アクセスには高速道路と水路とも利用されている。

本研究は、崇明区において農村観光地として注目されている前衛村を研究対象として選定する。前衛村は 1970 年代に干潟を埋め立ててできた村で、崇明区の北西部に位置し、上海市中心部から 100km 離れ、上海の中心市区を囲む外環高速から約 70km の距離に、崇明区役所からは北東へ 23 ㎞の距離に立地する（図 1-5）。村域の大部分の標高が 4.0～4.3ｍであり、3.6ｍ以下の土地は総面積の 2.5%を占める。2014 年末現在、村の面積は 245ha で、うち耕地面積が 35ha である。1993 年から発達した生態農業により、上海市都市部からの観光者が前衛村に訪れるようになり、1999 年以降は「農家楽」経営の展開による農村観光が発展した。2004 年に中国国家旅遊局に「中国農業旅遊示範村」、2008 年に中国環境保護部に「国家級生態村」、2009 年に AAA 級観光スポット、2010 年に AAAA 級観光スポットに認定された。現在、前衛村の全 250 世帯の中、117 世帯が民宿農家楽を経営しており、ベッド数は約 3,000 床もある。1993 年からの 24 年間の農村観光の発展に伴い、前衛村は伝統的な農業型農村から現代的な観光農村に変化してきた。その変化には村の土地利用、産業の機能および居住空間、村民たちの生活習慣、社会関係までさまざまな側面に反映されている。

前衛村における産業変化と観光業発展のプロセス、観光者数の変化など指標に基づいて、前衛村の観光発展期間を以下 4 つの時期に分ける。

①観光萌芽期（1991～98 年）：前衛村は 1980 年以前、伝統的な農業に専念していた。1980 年代に郷鎮工業が発展したが、農村観光の発展はまだみられなかった。1990 年代に入り、村内の農業生産が伝統的な農業から生態農業へ転換し、この新しい農業業態がマスコミに

[9] 崇明島のごく一部が江蘇省海門市海永郷と啓東市啓隆郷に属する。

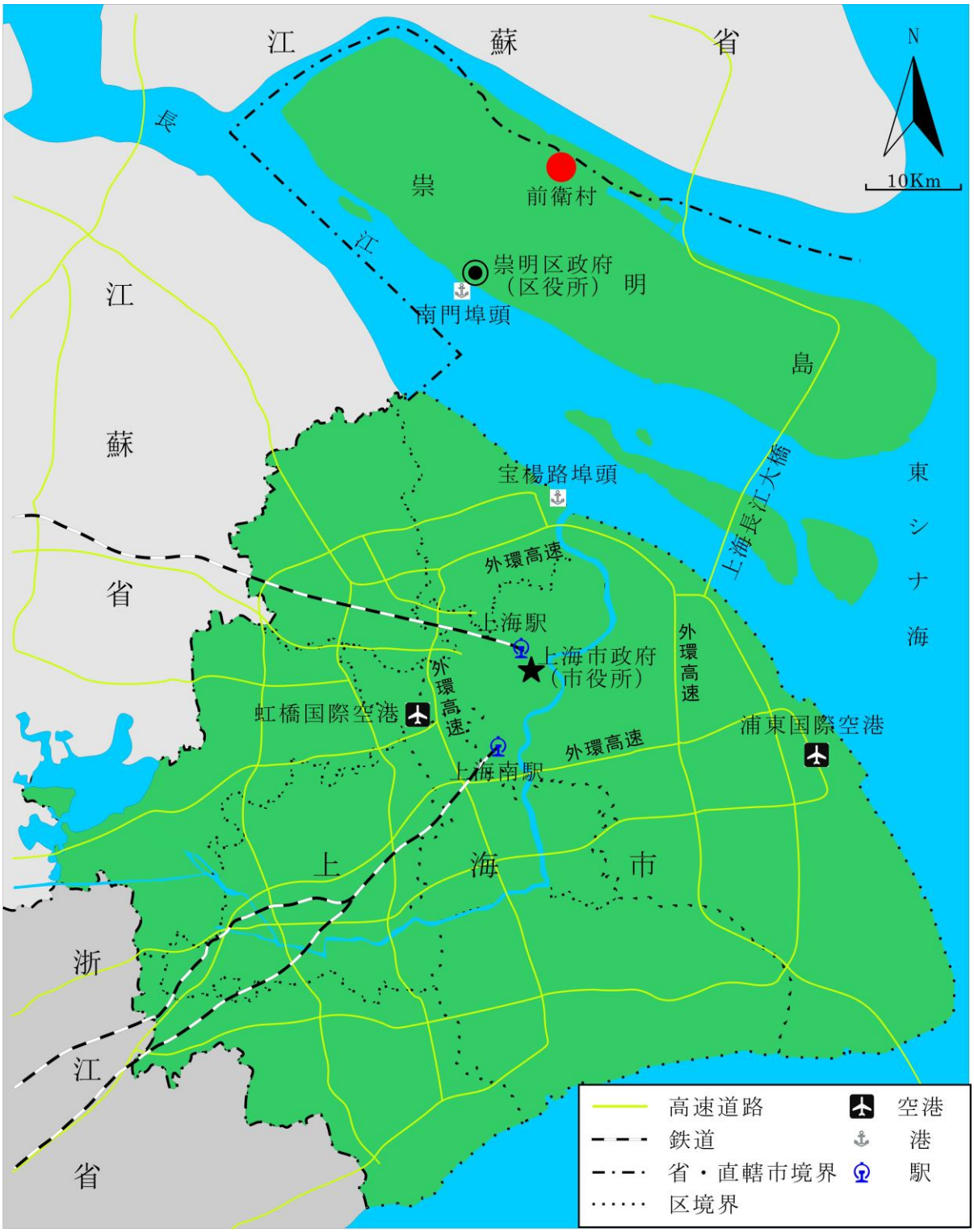


図 1－5　前衛村の立地

注：上海市城市総体規劃により、外環高速に囲まれている域は上海の中心市区で、それ以外の域は郊区と定義されている。

報道されたことで、観光者が自発的に前衛村を訪れるようになった。この時期は観光者数が少なく、正式な統計も整備されていなかった。

②観光展開期（1999～2003 年）：生態農業と農村観光の発展により、前衛村が新農村発展の模範事例になり、メディアに広く宣伝された。前期の観光萌芽期より観光者が増加した。観光者の宿泊、飲食の需要を満たすことで村の経済を一層向上させるために、1999 年に前衛村農家楽[10]を正式的に開業し、正式な観光統計の調査も始まった。

③観光拡大期（2004～10 年）：2004 年 7 月に、当時中国共産党総書記である胡錦濤氏が前衛村を視察したことをきっかけに、村の観光がよりいっそう発展した。その後、2010 年に上海万博の開催に伴い、前衛村が上海市政府に「万博観光農園」と指定され、2010 年に観光業の最盛時代を迎えた。

④観光停滞期（2011 年～）：2009 年に開通された上海長江トンネルと大橋により、崇明区へのアクセスが改善され、崇明区への観光者数が増加したが、大橋の出入口は崇明区の東部に位置していたため、出入口に近い農村観光地の立地条件が良くなった一方で、北部に位置する前衛村の立地条件が相対的に悪くなった。2010 年の万博により観光者が激増したが、その後、前衛村における観光者が年々減少している。一般的に安定期に入るのと違い、前衛村の観光業が停滞傾向にあるようになっている。

以下の第 2 章から第 4 章にかけては、前述の 3 つの側面から各時期におけるルーラリティの要素の変化とその要因について、それぞれの指標から考察していく。

[10] 生活空間における農民が自分の家屋を利用して、レストランと民宿を経営する施設である。具体的には第 3 章で分析する。

第２章　生産空間の観光化とルーラリティ再編

空間を研究対象とする地理学において、土地利用研究は重要な分野である。農村は、人間が生きていくために必要な穀物や野菜などを生産する場としての役割を果たしている。従来、農村地域における土地利用は農産物を生産する農地が中心となっていた。ルーラリティに関する先行研究でも、農村的・自然的な土地利用と農村景観が重視されている。しかし、伝統的な農村と農業機能の再構築に伴い、農村で農業生産活動が行われることにより生ずる農産物の供給機能の他に、国土の保全、水源の涵養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等の機能が認識されている。その中で、観光機能の発達により、農産物が農業体験の対象物になっている。また、生産空間においては、生産される作物が、従来から栽培されていたものからからイチゴやブドウなどの観光者が摘み取りできるもの、ないし単純に景観を創造するための景観作物へと変化していった。

また、従来単一的な農業生産を中心としていた農村において、観光業が導入されると、観光者の需要を満足させるため、農的な要素が観光利用されるほか、都市的な要素である宿泊、買い物、飲食、レクリエーションを目的とする多様な施設が整備される。その初期段階ではそれらの産業を展開するために元農業生産用地が占有され、生産空間における土地利用が多様なものに変化する。とくに、観光施設の建設により、農的な用地が縮小して、建設用地に転換を余儀なくされる。これらの土地利用の空間的な分布と歴史的推移を併せることで、土地利用の側面においてルーラリティの変化が把握できると考えられる。

一方、従来の農業生産活動が展開している農村生産空間では、農村観光の台頭により観光活動が展開してくる。その中に、農的な要素で観光者を惹きつける農産物の摘み取りから、非農的な要素を観光者に提供するレクリエーションなどまで、多種多様な観光活動がある。非農的な観光はルーラリティを損なっているとの指摘が多いが、本研究は地域を全体的に捉えていくことから、農的な観光、非農的な観光とも、農村観光の重要な構成要素と捉え、両者がいかに農村地域に展開するかを考察し、これらの観光活動の変化をルーラリティの重要な要素として分析する。

また、農業生産物と生産風景が農村観光の重要な対象であり、土地利用に変化がなくとも農業生産機能が観光機能と景観維持機能に変わることもある。それゆえ土地利用類型の変化によりルーラリティが低下する一方、農業生産の機能だけが変化し、ルーラリティが再編されることで維持されるケースもある。農村観光により、現代の都市住民は農村景観に交換価値を見いだし、農村は消費される空間になった（井口ほか、2008）。それにより農業も大きく変化してきた。例えば生産主義からポスト生産主義への転換によって、農業の

多面的な機能が重視されるようになり、レクリエーションや保養といった機能が注目されるようになった（高柳、2013）。またこれまで基本的に農業生産の場とみなされてきた農村は、農業生産のみならず、余暇活動や癒し、文化的・教育的価値、環境保全などの機能を持つ場として捉えられることが多くなっている（井口ほか、2008）。

前述のように、農村観光の発展に伴い、土地利用類型が変化し、都市的な施設が多く出現したことにより、農村は観光者の需要を満たすための施設整備に必要な土地を提供する役目を果たすようになっている。一方、都市住民にとって日常生活では見られない農業生産の景観は魅力的であり、農村の基本である農産物や農業を通して築き上げてきた農村景観そのものを見ることやハイキング、サイクリング、農作業体験など多様な農村観光活動も展開されている（菊地、2008）。観光者は農産物とその栽培風景や施設などが一体となって醸し出すルーラリティに触れることを求めている（井口ほか、2008）。こうした背景から、農林漁業が直接観光に利用され、土地機能が観光用農林漁業用地に変化しても、生産景観からみた際の土地利用は変化しなかった。その農産物の生産景観が観光者を引き付け、さらに観光者の需要に応じて新しい作物が栽培されることで新しい景観が創造される。つまり、伝統的にルーラリティは地元の資源を利用すること、すなわちローカリティが重要な特徴として強調されているが、このように農村観光の進展に伴い、観光者の嗜好に合わせて外部から輸入するものも重要な観光資源になっている。

したがって本章は土地利用における類型変化の分析を通じて、土地機能の変化と生産空間における観光活動の特徴を明らかにしていく。

第１節　土地利用の分類

農村観光の発展による観光施設の拡大に伴い、伝統的な農業用地の利用が多様化している。農村観光による土地利用の変化について、服部ほか（1976a）はスキー場開発に伴い伝統的な民宿が拡大し、農業生活が激しく変化した長野県白馬村を例として、自然的土地利用から施設型利用への変貌およびそれに伴う自然環境・生活環境の破壊を、土地所有・土地利用の変化を通じて明らかにしている。その研究では土地利用類型を田畑と宅地、山林・原野に区分し、観光開発による民宿の拡大を契機に田畑の宅地化および旅館、店舗の増加のため、田畑と山林・原野が減少したことを論じている。この分類は、自然的な用地が宅地へと変化したことを解明したが、それ以外の変化、とくに山林・原野からスキー場への変化については、反映できなかった。

農村地域における土地利用変化には、研究の蓄積が見られる。菊地・堤（1998）は前橋市元総社地区を事例として、農業的土地利用の持続性と変移性を分析する際に、農村土地利用を田と普通畑、桑畑、果樹園、森林、荒地、建物用地、幹線交通用地、その他用地、水域に分類して考察している。また菊地（2012）は横浜市青葉区寺家地区におけるルーラリティの商品化を究明するため、ルーラリティの生態的基盤である土地利用変化を山林・公園・緑地等と農地（畑地、樹園地、水田）、宅地・造成地の 3 種類を区分して考察している。具体的には寺家地区の丘陵地が住宅地や住宅団地、あるいは大学などへ土地利用が変化し、それを契機とする丘陵地の森林縮小が谷地の源涵養林の減少に繋がり、谷地における水田は田畑や樹林地、および都市的土地利用に転化され、水田が著しく縮小したことを述べている。この研究では、ルーラリティ的な特徴である土地利用は山林・公園・緑地等と農地であり、都市的な土地利用は宅地・造成地であることが認識されている。

中国において、席ほか（2011）は河北省野三坂旅游区苟各荘村を事例とした研究がある。中国では村レベル区画の土地利用分類が不完全であるため、国家分類基準の「土地利用現状分類」（標準番号：GB/T21010-2007）と「村鎮規劃標準」（標準番号：GB/T21010-2007）を参考にし、現地調査による農村地域観光用地の特徴に基づいて、土地利用を耕地と林地、商業サービス用地、住宅用地、公共管理用地・公共サービス用地、交通運輸用地、水域・水利施設用地、その他などの 8 種類に分類したうえで、商業サービス用地をさらに観光買い物用地と観光宿泊用地、観光飲食用地、観光娯楽用地に分類している。苟各荘村には観光農園など農的な観光が発達していなかったため、耕地と林地に展開している農村観光に

よる土地利用変化が確認できなかった。

本研究には、以上の研究における土地利用の分類を参考にし、観光の機能を考慮しながら、研究対象の現状に合わせて、以下の分類（表 2－1）を考案した。これに基づいて、前衛村における土地利用の変化実態を分析する。

表 2－1　土地利用の分類

農的土地利用	耕地		水田と畑、果樹園を含め、食糧作物や野菜、果物、花卉を栽培する用地。
		観光利用	観光利用されている耕地。本稿ではイチゴ狩り、ブドウ狩り、香草花園の用地を指す。
	林地		林木が立つ土地。農産物を保護するための防風林、堤防を保護するための防食林、経済林を指す。
		観光利用	観光利用されている林地。本稿ではキャンプ場として利用されている林地を指す。
	養殖・飼育場		魚など水産物を養殖する生簀と豚や鶏を飼育する飼育場。
		観光利用	観光客のために作られた魚釣施設用地。
	水域		生産活動（水産物）が行われていない川や湖などの自然水域。
都市的土地利用	観光施設用地		観光者のために作られた観光専用の施設敷地。宿泊施設と観光対象になっている民俗展示館と博物館、遊園地、騎馬場、野外研修基地、テニス場、動物園、科学普及教育基地、観光サービスセンター、駐車場などの施設用地。
	公共用地		村の公共事業のための土地。村役場、倉庫、メタンガスプールおよび村民たちが利用するレジャー広場の用地。
	工業用地		工業生産のために使用されている土地。
	宅地		村民が住んでいる家屋の敷地。
	その他		工業や観光業の停滞によって廃棄された施設が再開発されないまま、放棄されている土地。

農村観光の発展による土地利用変化のプロセスと特徴を把握するため、2014 年 3 月と2015 年 3～4 月に現地調査を実施した。前衛村における土地利用現状を把握するために村民を対象とした聞き取り調査を行い、各施設の設立年月、設立前の土地利用状況について把握し、1980 年から現在までの土地利用変遷過程を定性的に把握した。そして Google Earth の衛星画像を下図に、GIS を用いて、時期ごとに各種用地の面積を計測し、土地利用の類型変化を定量的に分析する。以下では、その結果を説明する。

第２節　土地利用と農業の機能変化

中国経済の高度経済成長において、農村地域では若年層の出稼ぎが急増し、農地の粗放的管理や耕作放棄による農地の崩壊を引き起こすことは少なくない。森下・宮崎（2008）は雲南省元陽県において出稼ぎが農民にとってよい現金収入の機会となったため、出稼ぎにより農業従事者が減少し、棚田の崩壊などの弊害も発生していることを述べた。そのうえで集落経営の農家楽は組織メンバーへの経営収入の分配と、メンバーの出稼ぎ禁止が参入条件とされているため、それらが出稼ぎによる農業従事者の減少とそれによる棚田の崩壊といった事態を防ぐ役割を果たしていると考察している。このように農村観光の発展による農業・自然的土地利用が観光施設へ転用されるケースの他、農業的な風景を保存するため、農業用地の維持の必要性を示唆したケースもあった。本研究はまず、以上の土地利用分類に基づいて、前衛村における土地利用の側面から、ルーラリティの変化とメカニズムを考察する。前衛村における各時期の土地利用変化を表 2－2 で示す。

表 2－2　前衛村における土地利用の変化（1980-2015 年）　（面積：ha）

	1990 年	1998 年	2003 年	2010 年	2015 年
耕地	96.2	83.7	70.9	66.3	97.3
観光利用	0.0	6.8	6.8	13.5	13.5
林地	40.1	43.8	45.5	45.0	45.0
観光利用	0.0	0.0	0.0	10.8	10.8
養殖・飼育場	36.1	38.4	38.4	33.2	1.2
観光利用	0.0	3.2	3.2	0.0	0.0
水域	3.8	6.9	6.9	8.9	8.9
観光施設用地	0.0	0.9	15.5	24.3	20.5
公共用地	2.1	4.6	1.1	0.5	0.5
工業用地	1.7	1.7	1.7	1.7	1.0
宅地	16.8	16.8	16.8	16.8	16.8
その他	0.0	0.0	0.0	0.1	5.6
合　計	196.8	196.8	196.8	196.8	196.8

（2014 年 3 月と 2015 年 3～4 月の現地調査により作成）

１．伝統的な土地利用と農業機能

（１）伝統的な土地利用概況

長江は流量が年間約 9,240 億㎥であり、その巨大な流量によって毎年約 4.86 億トンの土砂が運ばれ、その砂やシルトなどが沈殿・堆積しやすく河口付近で干潟が形成される。上海市は長江の河口に位置し、とくに崇明区に干潟が多く形成されている。伝統的な農業社会では、土地が最も重要な生産基盤であり、土地が多ければ多いほど食糧が多く手に入ると認識されていた。そのような土地の需要に応じて、上海市は 1958 年から 1984 年にかけて、約 82 万畝[11]（約 5.47 万 ha）の干潟を埋め立て農場や林地に造成した。この背景のもと、現在の前衛村の近くに位置する長江農場、東風農場などからの村民によって、前衛村は 1970 年代に干潟を埋め立て作られた。当初、水稲と小麦、大豆、トウモロコシを主な栽培作物とする伝統的な農業が営まれていた。沿岸部では土地を保護するためにメタセコイアを主とする林地が作られた。また、村の北部が海に接しており魚の養殖に適しているため、養殖・飼育場も造設された。耕地と林地、養殖・飼育場を合わせた農林漁業の土地利用は 9 割を占めている。

1978 年に「改革開放」政策が実施されてから、中央政府の「郷鎮工業」[12]の促進政策により、全国各地の農村地域で工場が数多く造られた。1980 年、前衛村では村民委員会の話し合いによって、ガラス製品と扇風機組立、食器（箸）製造、靴墨製造など 4 つの工場を作ることが決定された。しかし技術や運営経験の不足などが原因で不採算に陥り、全ての工場が倒産した。失敗の原因を究明した上で、前衛村の幹部たちは技術や運営経験を学ぶため、当時近隣にあった経営状況の良い国営農場の長江農場化学製品工場を訪問し、工業発展の希望を伝えた。中央政府の農村工業を発展させる政策に応じて、1981 年に長江農場は技術と管理人材のほかに 18.5 万元の資金を提供し、前衛村は土地と労働力を負担して、双方による共同経営の上海勝利日用化工廠（日常生活用化学製品工場）を開業した。技術と管理人材、資金が保証され工場は成功した。この成功から前衛村は工場経営を拡大し、1984 年に 2,000 ㎡の敷地を利用して歯磨き粉製造工場を開設し、1986 年には上海市の歯磨き粉

---

[11] 畝（ムー）は中国に特に農村地域に利用されている面積単位であり、1 畝は約 666.7 ㎡である。

[12] 中華人民共和国郷鎮企業法によると、郷鎮企業とは、農村集団経済組織または農民の出資を主として（出資が 50%を超えるか、実質的に農民組織が支配する）、郷鎮（所轄の村を含む）で設立された企業であり、農業支援を義務とする各種の企業を指す。郷鎮企業の中で、主に工業生産を担う企業を「郷鎮工業」という。中国において、郷鎮企業が 1980 年代から農村地域で発達してきた。

製造工場と提携して当時中国国内で有名な「中華」、「白玉」などのブランド商品の生産を下請するようになった。これ以降、村の工業発展は急激に進展し、1990 年における工業用地は 1.7ha にまで増加した。

また経済発展によって移住者が増加し、増加した人口に対応するために新築住宅が 16.8ha に拡大された。元々、干潟を埋め立てるために造られた堤防に沿って、住宅が建設された。1980 年代中期から、村が集中居住の方針を定め、新しい住宅は主に村の中心部に建設された。1990 年以降、住宅はほぼ元の敷地で改増築され、住宅用地の面積には変化がみられない。農村観光による住宅敷地の変化については、次の第 3 章で述べる。

このように、前衛村において 1990 年の土地利用は耕地が 96.2ha（構成比：48.9%）、林地が 40.1ha（同：20.4%）、養殖・飼育場が 36.1ha（同：18.3%）、住宅地が 16.8 ha（同：8.5%）、水域が 3.8ha（同：1.9%）、公共用地が 2.1ha（同：1.1%）、工業用地が 1.7ha（同：0.8%）の構成となる（図 2－1）。観光施設用地と土地の観光利用はみられない。農林漁業の農的な用地がおよそ 9 割を占めている。

（２）伝統的な農業の生産機能

中国は世界最大の人口を有し、農産物の消費大国でもある。『漢書』に記載される孟子の言葉「王者以民為天、而民以食為天」（王は民をもって天となし、民は食をもって天となす）があまりに有名である（張、2014）。しかし、中華人民共和国が建立されてから 1970 年代までは、人口が急増したこともあり、食糧問題が上手く解決できたとはいえず、「以糧為綱」（食糧生産を基本とする）の政策が実施され、食糧生産する場という農村の性格も基本的に変化しなかった。

従来、農村では作物生産の機能が重視されてきた。前衛村はより多くの作物生産用地を確保するため、1970 年代に干潟を埋め立ててできた村である。伝統的な農業時代には、前衛村で大規模な農業生産を可能にするため、水稲やトウモロコシ、小麦、大豆などを栽培し、作物生産の機能が卓越していた。この時期には、生産量を増加させようとする意図と農業技術の発達が併せてみられ、結果として化学肥料の使用量が飛躍的に増加した。崇明区でも 1940 年代から少量の化学肥料の利用が始まった。1949 年に、1 畝あたりの化学肥料の使用量が 0.9 斤[13]となり、1959 年には 35.4 斤、1960 年以降は化学肥料使用量が急増し、1969 年に 190.6 斤、1970 年には 239.1 斤まで増加した。1970 年代以降、化学肥料の過剰使

[13] 斤は中国の重量単位で、1 斤は 500g である。

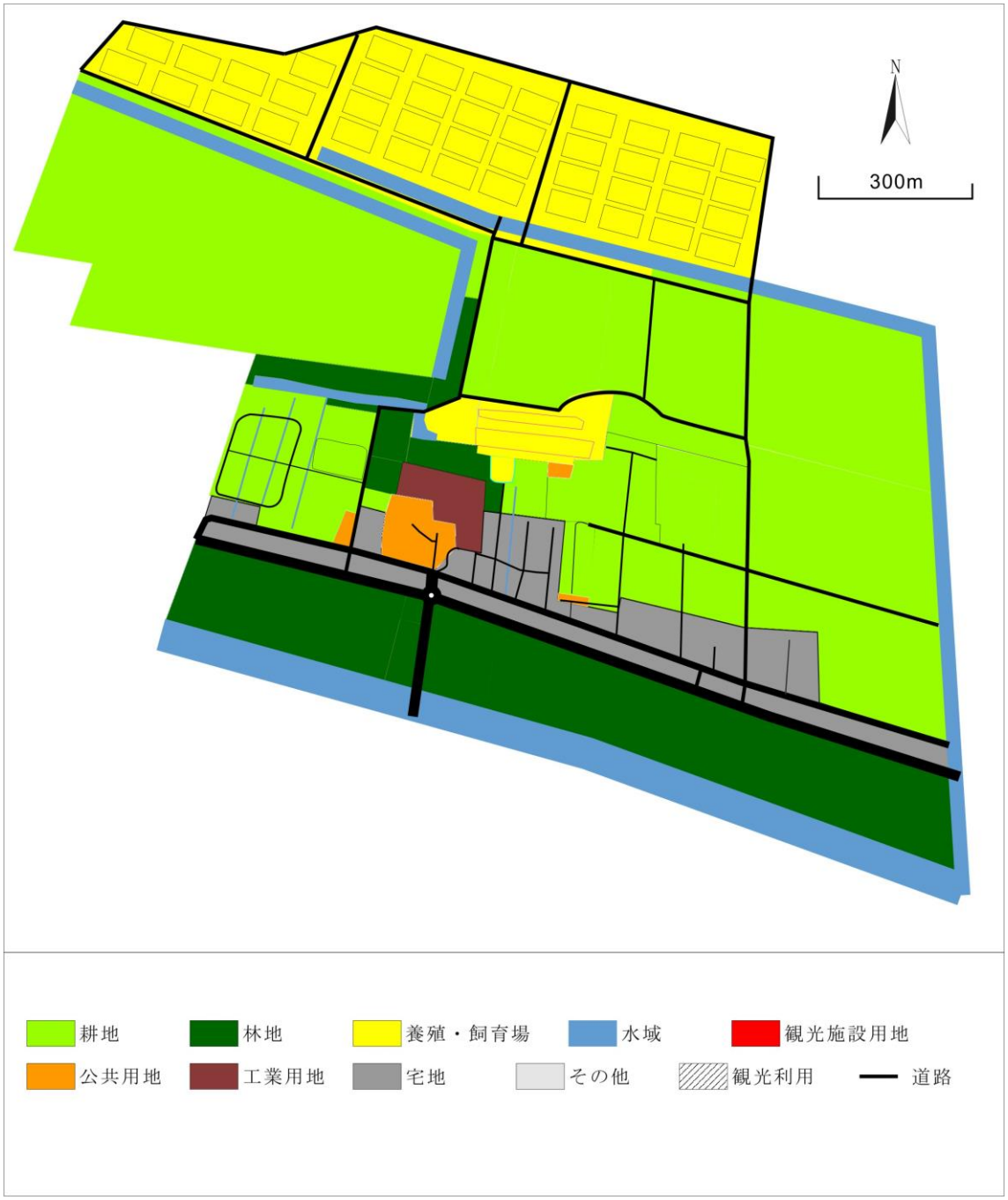


図 2－1　前衛村の土地利用（1990 年）

（2014 年 3 月と 2015 年 3～4 月の現地調査により作成）

用が問題視されたものの、1984 年にも 350 斤まで急増するなど勢いは止まらなかった（崇明県誌編纂委員会、1989）。このような化学肥料の過剰使用は農産物の化学肥料残留量を高め、土壌硬化の問題も悪化させた。

このように、この段階に農業の主な機能は農産物生産であり、あくまで生産量の追求が中心であった。農業の生産に伴う環境負担の増加についてはあまり重視されていなかった。

２．観光萌芽期（1991〜98 年）

（１）土地利用の変化

1990 年代に入ると、中国では環境汚染が拡大し、人々の環境に対する意識が徐々に高まってきた。それを背景に化学肥料や農薬の過剰使用にも関心が寄せられ、安心安全に食用できる農作物に対する需要が高まってきた。一方、工業開発の成功により、前衛村は政府に農村発展の模範として評価された。当時前衛村支部書記[14]を担当するＸ氏は、上海市政府の幹部に随行して国内と国外を視察する機会が増加した。このような視察を機に、専門家との交流が増え、経済発展と同時に生態や環境を保護する理念を強く認識した[15]。まず、工業において、元の労働力密集型から技術型へ転換するように方針転換を行った。1992 年、村は上海市工業微生物研究所より技术提供を受け、中国科学研究院上海分院と復旦大学の専門家の協力を得て、「L 乳酸菌」生産工場を新設した。そして、農業においては、生態農業総合開発指導チーム（中国語：領導小組）を結成し、上海市政府の支援を得て上海市生態農業協会や華東師範大学、南京環境科学研究所などの研究機関から専門家を招いて指導を受け、生態農業開発企画を策定した。この生態農業の代表的なプロジェクトとして、1992 年に 600 ㎥の大型メタンガスプールが建造された（徐、1995）。臭気の拡散を防ぐため、養豚場、メタンガスプールと住宅地の間に 0.9ha の果樹園が整備された。この果樹園は臭い拡散防止のほか、景観上の美化効果が重視され、果実収穫は重視されなかった。この点からこの時期には農産物の生産より景観構造が重視されたといえる。

農産物は、伝統農業から特色農業へ転換し、1993 年に 6.8ha の無公害野菜生産基地（野菜の有機栽培）の整備が完了した。養殖業において、1993 年に一部の養殖場を魚釣りセンター（3.2ha）として観光者に開放した。伝統的な魚養殖のほか、1995 年には経済効果の高いスッポン養殖を開始し、孵化場と養殖場（2.2ha）が造られた。

---

[14] 中国には、地方政府は郷（鎮）、県（県レベルの市）、市と省（直轄市、自治区）が法的な行政区分の単位とされ、各レベルの政府には 2 人の重要な官僚が置かれる。彼らは中国共産党を代表する人物、つまり共産党委員会書記であり、政策立案者として活動し、上官によって任命される。地方政府の長は規定上は人民によって選出され、通常そのレベルに応じて省長、市長、県長と呼ばれ、政策の実行と儀礼の遂行を司る。村は一般的に党支部と村民委員会を設置し、担当幹部はそれぞれ支部書記（略称は市書）と村民委員会主任（俗称は村長）である。

[15] 前衛村元書記Ｘ氏への聞き取り調査により。

また村へのアクセシビリティを向上させるため、3.7ha の耕地を道路建設会社に抵当し、村への道路を整備した。道路建設会社は耕地を取得したが、農業の担い手や経験がないため、農業生産能力を持ったない。代わりに、林業は農業生産より必要な労働力が少なく、そして道路を建設する際に街路樹が必要であり、苗圃の整備も村の環境づくりに対して好ましい影響があったため、この土地は会社に街路樹用の苗栽培として利用され、林地に転換された。

一方、村民たちが豊かな生活を享受するため、1993 年には人工湖（3.1ha）が建造され、湖内の島（2.4ha）には村民用のレジャー広場が開発された。舞台やバスケットボールのグランド、人工山、あずま屋などが整備された。

この時期には生態農業の発達により、前衛村への視察に訪れた者をはじめ、安心で安全な農産物のほか、農村の素晴らしい自然環境や景観が評価され、マスメディアを通じて都市住民に広く知られるようになった。観光者の需要を満足させるため、1993 年に村を眺望できる 2 階建ての「鴛鴦楼」（0.1ha）が造られた。１階の村の歴史館では、写真を通じて村の発展を紹介し、厳しい自然条件のなかで努力して豊かな生活が送れるようになってきた「悪戦苦闘」精神を展示する。また 1995 年にはレジャー広場の周りにゴーカート、海賊船、ミニジェットコースターを有する遊園地（0.8ha）も開業した。

こうした村内の整備を通じて 1998 年の土地利用は耕地が 83.7ha（構成比：42.6%）へと減少した。林地が 43.8ha（同：22.3%）とやや増加した。水域が 6.9ha（同：3.5%）、公共用地が 4.6ha（同 2.3%）と倍増する一方、養殖・飼育場が 38.4ha（同：19.5%）と僅かに減少した。住宅地（16.8 ha、同：8.5%）と工業用地（1.7ha、同：0.8%）に変化がみられなかった（以降住宅地には変化なかった工業用地も 2010 年までに変化なかったため、以下の分析では省略する）。観光対象になったものに関してでは、観光利用の耕地が 6.8ha（3.5%）、観光利用の養殖・飼育場が 3.2ha（1.6%）であり、観光施設用地が 0.9ha（0.5%）と極めて少なかった（図 2－2）。

これらを踏まえれば 1991 年から 1998 年にかけての観光萌芽期には、耕地と養殖・飼育場の観光利用への転化が土地利用変化の重要な特徴といえる。観光業において、主なアトラクションは安全安心・新鮮な野菜を生産する生態農業施設である。補助施設として、景色を観賞する建物やレクリエーション施設など人工的なものも少量建設された。観光対象は農産物とその栽培風景が中心であり、それを補完するものとして人工的な観光対象が狭い範囲に存在している。

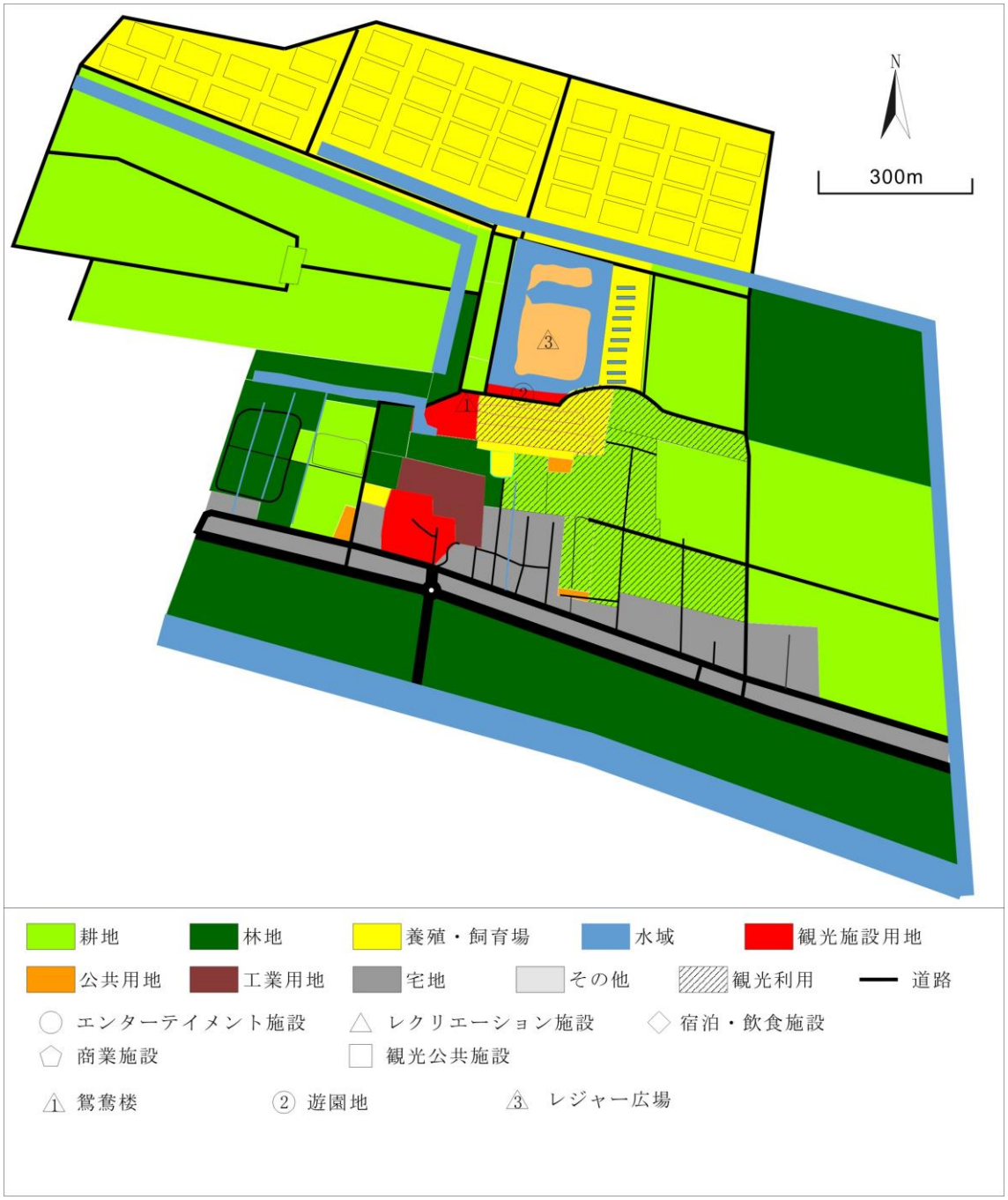


図 2－2　前衛村の土地利用（1998 年）

（2014 年 3 月と 2015 年 3～4 月の現地調査により作成）

（２）生態農業の発展と農業の環境機能重視

中国において、1980 年代後半には農業生産技術や関連施設の発達によって、水稲や小麦の生産量が上昇し、主要穀物の生産が保証された。しかし野菜など副食の供給状況は依然として低水準にあった。そこで、都市住民の食卓を豊かにするため、1988 年に中国農業部は「野菜カゴプロジェクト」[16]を実施し、都市近郊の農村地域を野菜生産基地として発展させようと試みた。1990 年代、全国の農産物の提供が量としてほぼ確保されたが、品質はまだ低く、化学肥料や農薬の残留量も高かった。そこで上海市政府は、1994 年に「3 年以内に高水準で新しい上海の野菜カゴを建設する」方針を定め、自然環境の良い崇明区が理想な野菜基地としてその対象に選ばれた。前衛村は 1990 年代初頭に生態農業を開始し、1993 年に上海都市部の野菜需要に合わせて 13.4ha の耕地を野菜栽培地として転用した。1994 年には、その野菜栽培地が「上海市無公害野菜基地」（有機野菜基地）と認定された。

前衛村は有機農業を始めとする環境保全型農業を推進し、地域で発生する有機物を堆肥化して農地に還元し、循環型農業を村で展開した。化学肥料や農薬を減少し、有機肥料を利用することにより、環境への負荷を低減することが重視された。農業の生産機能だけを重視することから環境保全機能も重視されるようになってきた。

前衛村は上海市における生態農業の先駆者であり、上海市と崇明県政府からも非常に重視されている。当時の上海市書記呉邦国、市長朱鎔基などの幹部が前衛村を訪れて視察した。そして 1993 年に第一回前衛村金秋生態文化旅游節（ゴールデン・オータム生態文化観光フェスティバル）を開催した。この時期は観光の萌芽期であり、観光フェスティバルも村の生産物を宣伝するための良い機会となり、「旅游搭台、経済唱戯」（観光が舞台を作り、経済が劇を演じる）といわれている。幹部たちの視察と観光フェスティバルの開催が多くのマスメディアに宣伝され、前衛村の生態農業と優美な自然環境がよく知られるようになった。

この生態農業の野菜栽培基地は元々上海市に野菜を供給するために造られたが、観光者がここでトマトやキュウリなどの新鮮野菜を収穫してその場で食べるようになり、新たな観光形態が誕生した。この時期は、前期の作物の収穫量を追求することから農産物の生態効果を重視するようになり、観光機能も発現した。

この時期の観光農園の機能を兼ねた野菜農園の面積は 13.4ha であり、村の耕地面積の

---

[16] 中国語では「菜籃子工程」といい、都市住民へ野菜など副食を提供するため、都市周辺の農村地域を都市住民の野菜カゴと例え、野菜生産基地を発展させる政策である。

16.3%を占めている。当時の農村観光は都市住民の新鮮な農産物への需要に応える形で、農園の野菜生産と同時に提供されたものである。つまり、生業である農業の生産機能が依然といてメインであり、観光機能はあくまでも副次的なものとして展開されていた。農村の生産空間における従来の農産物の生産機能は数量の追求から品質の追求へ転換したが、農産物の生産といった本質的機能はほとんど変化していなかった。

以上のように農業生産は生産主義からポスト生産主義への転化に伴い、農村の生産環境が重視されるようになり、副次的ではあるもののマスメディアを通じて観光機能が認識されてきた。

３．観光展開期（1999～2003 年）

萌芽期に増加した観光者は前衛村における単一的な観光内容に満足できなくなった。一方、この時期、中国における農村観光も盛んになり、さらに高い収益を追求するため、前衛村は 1999 年により多くの観光施設を開設した。農家も住宅を活用して宿泊施設経営を始め、村が日帰り観光地から滞在型観光地に転換する傾向が現れた。

まず管理上の利便性向上を図って、1999 年に村委員会の集会所が住宅地の中から外れた村の入り口付近に新たに設置された。同時に、観光サービスセンターが設立され、駐車場も開設された。

そしてこの時期に整備された観光施設としては、元の村委員会の建物を改築した宿泊施設、農村地域の伝統文化を展示するための民俗資料館「瀛洲古村」（0.2ha）、そして上海野生動物園と契約した動物幼児の訓練基地である前衛村動物園（3.1ha）がある。

同時に、元々近くの建設鎮という町で仕事をしていた獣医が農業生産における機械化の普及に淘汰された数頭の馬を連れて前衛村で騎馬場を開設した。村は観光施設を拡大するため、非常に安い賃料で獣医に土地を貸与した。騎馬場の隣に、浙江省からの投資者によって遊園地「児童楽園」（1.1ha）が造られ、バンパーカーやミニジェットコースター、回転木馬などの施設が設置された。

2003 年、宿泊観光者の増加に応じて村が大型宿泊施設「玉壺氷」（0.3ha、150 室）を新規開設した。元々住民の余暇活動のために造られたレジャー広場だったが、景色の美しさから多くの観光者が惹きつけられ、観光者のための施設としても利用されるようになった。

一方、持続可能な発展理念に基づいて、上海市は崇明区を生態島として開発する方針を打ち出した。前衛村は生態農業の発展により生態村という名称がよく宣伝され、投資者を

呼び寄せた。2001 年、崇明区唯一の上場企業である上海亜通株式会社は企業の規模を拡大する際に、「緑の産業」と呼ばれる林業を重視して、前衛村に「亜通千畝苗木基地」[17]を整備した。その中では樟やイチョウ、ホルトノキなどの苗木がを栽培され、耕地が林地に転換された。

このように 2003 年に前衛村の耕地が 70.9ha（構成比：36.0％）へ、公共用地が 1.1ha（同：0.6％）へと大幅に減少した。林地は 45.5ha（同：23.1%）とやや増加し、観光施設用地は 1998 年の 15 倍超の 15.5ha（同：7.9％）へと急増した（図 2－3）。

観光展開期には、耕地が著しく減少している（表 2－2 参照）。しかし、農産物とその栽培風景、伝統的な農業文化を展示するための民俗館などの農的なものが依然として観光対象となる一方で、遊園地などの都市的な要素を持つものが出現し、両者が共存する状況となった。これらの都市的要素は、観光対象施設は多ければ多いほど観光者を誘致しやすいと考える村側の見方と、観光者からの収益を見込む投資側の事情が合致して成り立ったものだった。この時期に、観光対象施設の増加によって、公共用地のほかに、耕地と林地も多く占用された。

４．観光拡大期（2004～10 年）

（１）土地利用変化

中国の政治体制において、地方官僚の昇進はある程度上級官僚との関係によって決定づけられる。しかし、上級官僚はすべての下級官員の業績を随時かつ全面的に把握することはできない。上級官僚に業績をアピールするためには、当人が育成に関わった何らかの模範事例を見せる必要があり、地方官僚が管轄地域でできるだけ多くの模範事例を育成し提示することは、自分の競争力と存在感をより高く示す重要な方法である（馮、2007）。各階層の官僚は代表的な模範事例を育成するために、多種多様な優遇政策や資源を下級組織に提供する。そして、このような模範事例を上級官僚に示し、自分の成果を認可してもらうように努力する。上級官僚の地域視察はこのような模範事例を承認する機会とみられ、その視察も地域のブランド力を高める無形の資本となる。前衛村における生態農業の発展も、崇明区ないし上海市における農村発展の模範事例として位置付けられた。そのため、村には上海市政府と中央政府から多くの官僚が視察に訪れた。その中でも、最も重要だったのは 2004 年の当時中国最高指導者である胡錦濤氏の視察であり、この視察は中央政府によっ

[17] 千畝は抽象的に広いという意味であり、計測面積は約 162 畝（10.8ha）である。

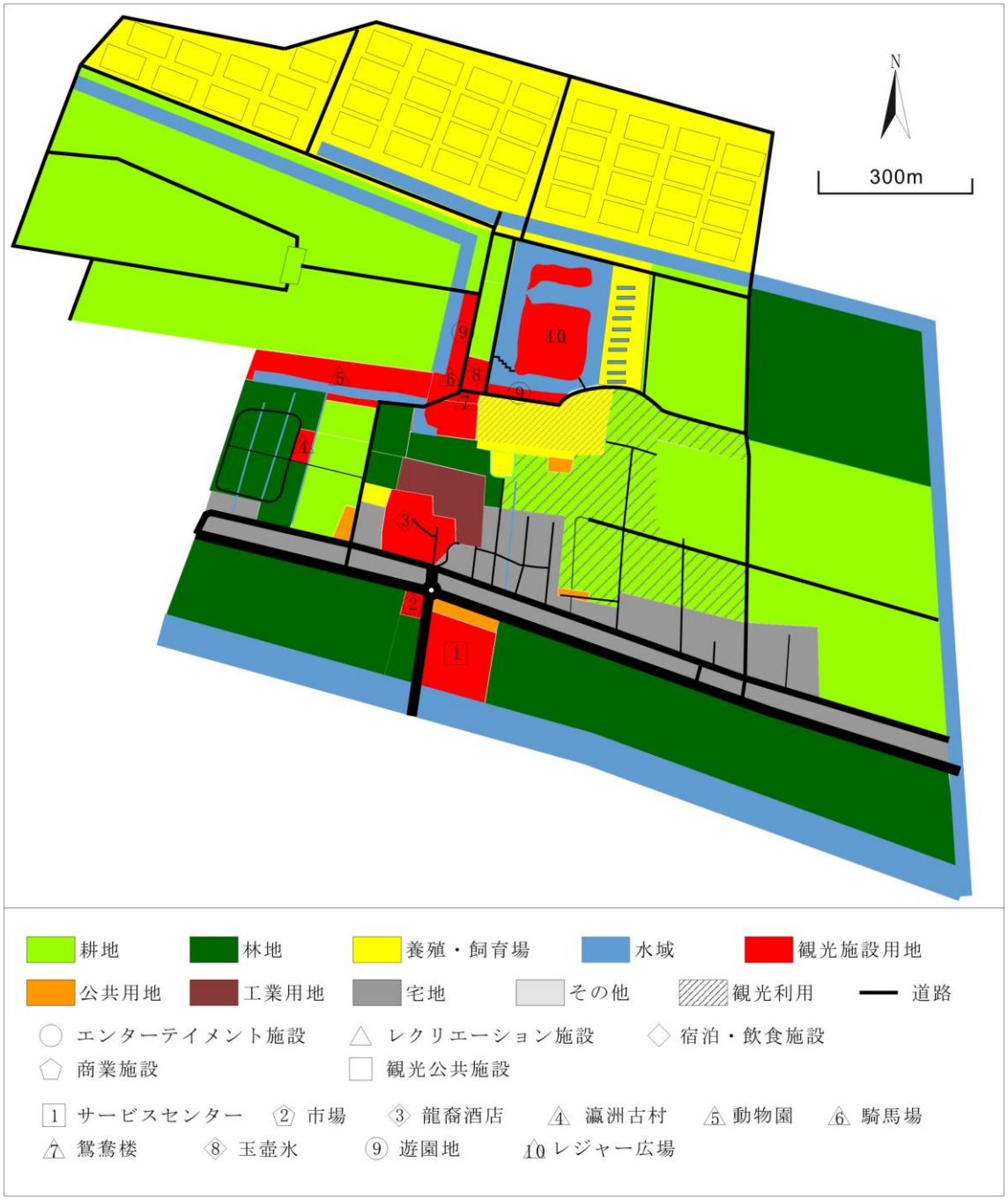


図 2－3　前衛村の土地利用（2003 年）

（2014 年 3 月と 2015 年 3～4 月の現地調査により作成）

て前衛村の生態農業と農村観光の発展の成功を認める証となった。それは中国国内で極めて大きな名誉であり、同時に重要な政治資本の獲得とも認識できる。地方政府からの支援のほか、都市部からの投資者もこの機会を攫んで、多くの資金を前衛村に投入し、より多

くの観光施設が整備された。

まず 2004 年に、前衛村の生態農業は生態教育において重要な役割を果たすと上海市政府に評価され、全国科学普及教育基地と指定された。その後、生態農業を展示する農地のほかに、新しい生態教育の実験用施設が整備された。中国科学院など上海の研究機関は実験室を造るほか、上海市の多くの中高生が軍事訓練[18]する際、前衛村で訓練をしながら、生態教育も受けるようになった。台湾からの投資者 C 氏は、自らが多く所有する珪化木や奇石を用いて、上海市に博物館を作る予定だった。しかし、市の関係者に前衛村を推薦されたため、2004 年にその博物館を前衛村に開設した。また、根彫（樹木の根を利用して造ったオブジェ）の芸術家である F 氏は 400 点の作品をこの博物館に寄贈している。結果、博物館は現在、前衛村の重要な観光施設となっている。2009 年に上海市政府は博物館の 1 つの部屋を利用し、共産党教育の基地である「上海市雷鋒[19]記念館」(2013 年修繕）を開館した。

その他、1999 年開業の民俗館が 2005 年に改築・拡大され、「瀛農古風園」としてリニューアルオープンした。歴史館は「鴛鴦楼」から元民俗館の建物に移された。そして、民俗館は新しく建造され、展示物も大幅に増えた。

民俗館の北側に、崇明区からの投資者がもう一か所のゴーカート施設（0.7ha）を造った。

この時期、土地利用変化が最も大きいのは宿泊施設の整備である。2010 年に上海市中心部と崇明区を結ぶ大橋（一部はトンネルで、実際は 2009 年に開通した）の完成と上海万博の開催によって前衛村の観光者数も増加すると見込まれた。さらに高級宿泊施設を求める観光者の需要に応じることと農村部の土地の安さから、宿泊施設が大規模に開発された。これらの宿泊施設は耕地や養殖・飼育場、公共用地、林地を転用して整備されたものである。一方、それらの宿泊施設の周辺景観を整備するために、林地や人工河川が造られたことで、林地と水域の総面積は増加した。

そして、生態農業発展初期の象徴であるメタンガスプールは運営経験が欠如していたために、使用停止となり、敷地が空き地になった。

---

[18] 中華人民共和国国防法により、中学校、高校、大学に入学する際に、学生は一般的に 1 周間から 1 か月間くらいの軍事訓練を受けることが義務付けられている。基本的な軍事知識を身に付け、愛国意識と集団意識を高める手段として認識されている。

[19] 雷鋒（1940 年 12 月 18 日―1962 年 8 月 15 日）は、中国人民解放軍における模範兵士とされる人物のひとりである。1963 年 3 月 5 日に毛沢東が題詞した「向雷鋒同志学習（雷鋒同志に学ぼう)」るまでをスローガンに、キャンペーンが全国的に展開されました。その後も今日に至る愛国教育の重要内容として中国各地に記念されている。

上述の通り、観光発展に伴い、耕地は1990年の半分程度の66.3ha（構成比：33.7%）へ、林地は 45.0ha（同：22.9%）まで激減し、養殖・飼育場は 33.2ha（同：16.9%）、公共用地は 0.5ha（同：0.3%）とやや減少した。観光利用の養殖場は水域の風景の良好さが、住環境としての評価に繋がり、全て高収益の宿泊用地に転用された。観光施設用地は 24.3ha（同：12.3%）、観光利用の耕地は13.5ha（同：6.9%）へ、観光利用の林地は10.8ha（同：5.5%）まで増加した（図2－4）。

この時期には、従来伝統的に営んできた耕地が急速に減少した。代わりに、農村観光の発展に伴い宿泊施設などの観光施設用地が増えた。この現象は、農村地域の土地利用に都市的な要素が付加されていったものではあるが、利用者にとってはその施設の利用が重要なのではなく、それらの施設が農村地域に立地しているからこそ享受できる良好な環境が重要であるを意味する。また、宿泊施設の増加という点から、農産物のもぎ取りなどの日帰り観光のほかに、農村の風景や環境を享受する宿泊観光が増加してきたといえる。

（２）観光発展と農業の観光機能

2000 年代に入ると、野菜と比較して果物の収益性が高いこと、観光アトラクションとしての人気が高いことから、観光菜園が観光果樹園に変わるようになった。2007 年に 3.3ha のブドウ園が開園し、同年に観光農園として流行していたイチゴ園（6.8 ha）も開園した。この 2 か所の観光農園は農産物を生産しているが、伝統的な生産物を市場で出荷することと違い、前衛村に訪れた観光者がその場で消費するために作られたものである。現地での経営者に対する聞き取り調査では、果樹園が増加した理由として「前衛村に観光者がたくさんいるため」という回答が得られた。この点から農業生産より、果樹園の観光機能が重要視されているといえる。

呉羽（2013）は、日本にはほとんど存在しなかった観光牧場は人工的な遊園地の一種であり、ルーラリティを消費しないと論じている。しかし、その観光牧場は農村地域でなければ存在するのは難しいという点からみると、地元であったかどうか、いわゆるローカリティはルーラリティの評価基準にならないと考えられる。山本（2013）もルーラリティは必ずしもその土地に根差したものではなく、農家や農村によって都市住民のニーズや嗜好に合わせて創り出されることがあると指摘している。前衛村でも、2007 年に台湾人経営者が中国で当時まだ珍しかった香草花園（3.5 ha）を開園し、香草の植物観賞のみならず、香り袋とエッセンシャルオイルの DIY 体験を行っていた。このように、地元の農業生産物

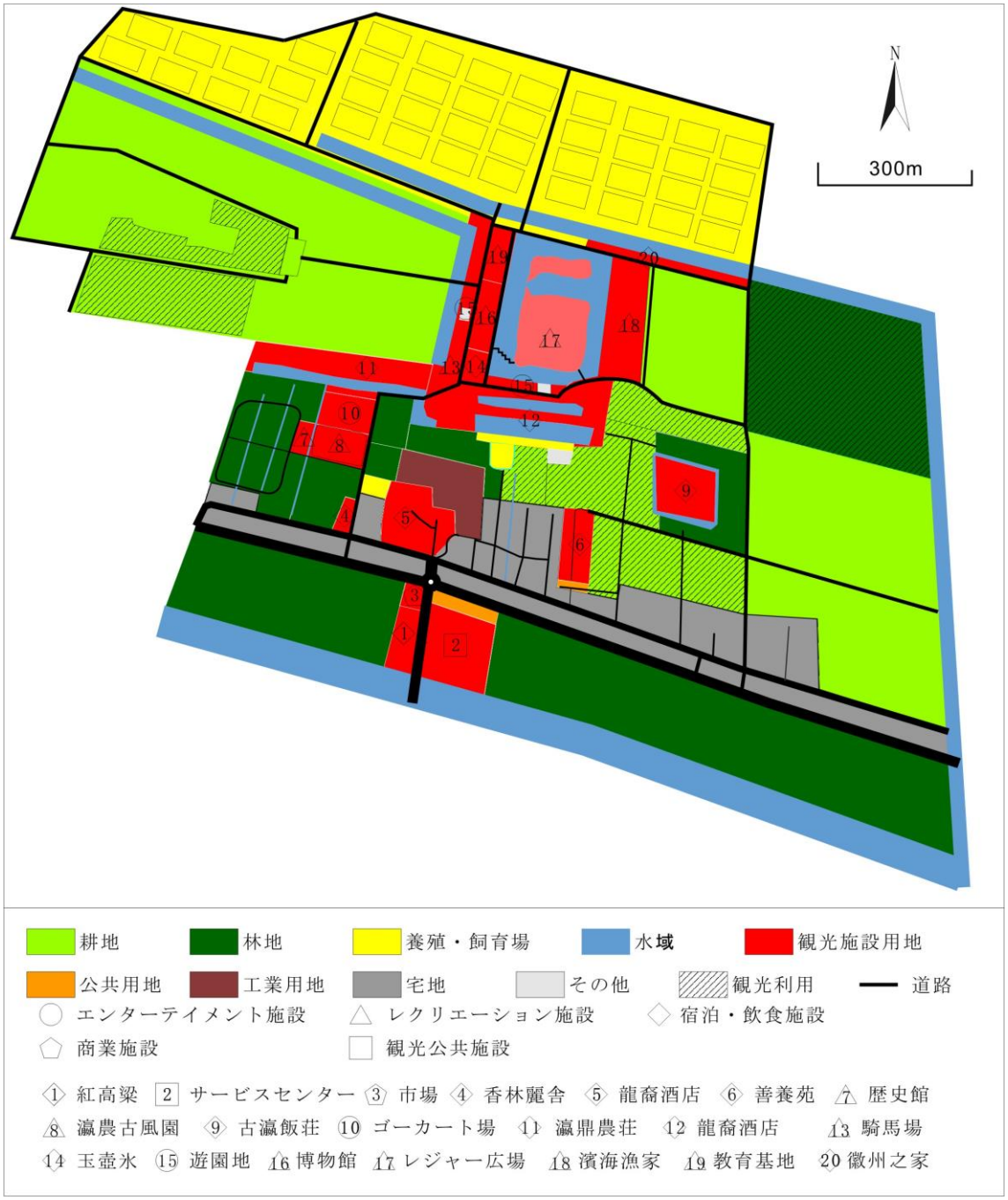


図 2－4　前衛村の土地利用（2010 年）

（2014 年 3 月と 2015 年 3 月の現地調査により作成）

から展開してきた農村観光は、その発展に伴い、地元にはなかった生産物を導入し、新しいアトラクションを作り出した。すなわちローカルな生産物は伝統的なルーラリティの特徴を持っているが、観光化が進展すると、外部のものであっても観光資源になりえれば、

それが導入されて観光に利用される。これは農業の観光機能を高めることが重視されたためだと考えられる。

そのほか、1999 年に村の中心部にある養殖池も観光用の釣り堀として整備された。2001 年に作られた林地の「亜通苗圃」は 2005 年には観光用の散策場やキャンプ場として利用されている。このように村内の土地利用における観光機能は広がりをみせている。

上述のように農村地域における土地利用は農業や林業、漁業を核とした生産機能が卓越し、住民の生活を支える基盤として機能してきた。しかし農村観光の発展に応じて観光者ニーズへの対応から農産物の種類が変わり、土地利用類型に変化のないまま土地利用の機能が観光に転換した。こうした農村観光のインパクトに対して、新たな高収益の作物や景観作物の栽培、多機能利用によってルーラリティが維持できている。

５．観光停滞期（2011 年以降）

2009 年の長江大橋の開通と 2010 年の万博開催の波及効果を受け、前衛村の観光業が最盛期を迎えた。しかし、その後は観光業の急激な転落に伴う経営難の問題が顕在化するようになった。宿泊施設の「濱海漁家」が 2013 年に廃業し、娯楽施設では海賊船やミニジェットコースターの検修費用が高く、コストを回収できないと予想され、廃棄された。また崇明区が生態島として登録される計画によって、崇明区中心部にある工場の撤退が決定されるなど、市場経済の発展によって前衛村の工業立地に不利な点が現れた。そして工業生産がほぼ停止し、残った一部分も生活空間から外れた村の北部に移転された。村では都市部の食料需要を見計って養豚業を拡大して北部に「万頭養豚場」を整備する計画が立てられたが、資金不足などの理由で頓挫した。このような観光の停滞に伴う施設の荒廃により廃棄用地が現れ、空き地が増加した。

さらに国家の基本耕地保護政策[20]が厳格化し、加えて、人工的養殖量の大幅増加による水産物養殖の不景気を背景として、この時期には 30ha の養殖・飼育場が耕地に転換した。それによって耕地が増え、養殖・飼育場の面積は急減した（表 2－2 参照）。

2011～15 年の間に、前衛村における土地利用の変化で最も著しいのは耕地が 97.3ha（構

[20] 中国は人口が多く、耕地資源が不足している。食糧安全を確保するため、1998 年に国務院は「基本農田保護条例」を定めたが、地方は経済発展を優先して、厳格には条例を順守しなかった。2010 年以降、前衛村の観光発展に停滞の傾向が現れ、1990 年代に村幹部に売買された土地が、村民に問題として提起され、政府が介入する事態となった。これにより耕地問題が重視されるようになった。

成比：49.4%）へ激増したことである。対照的に、養殖・飼育場が 1.2ha（同：0.6%）へ激減している。他には工業用地が 1.0ha（同：0.5%）へ、観光施設用地が 20.5ha（同：10.4%）へ減少したことに伴い、廃棄されたその他の用地は 5.6ha（同：2.8%）まで増加した（図 2－5）。

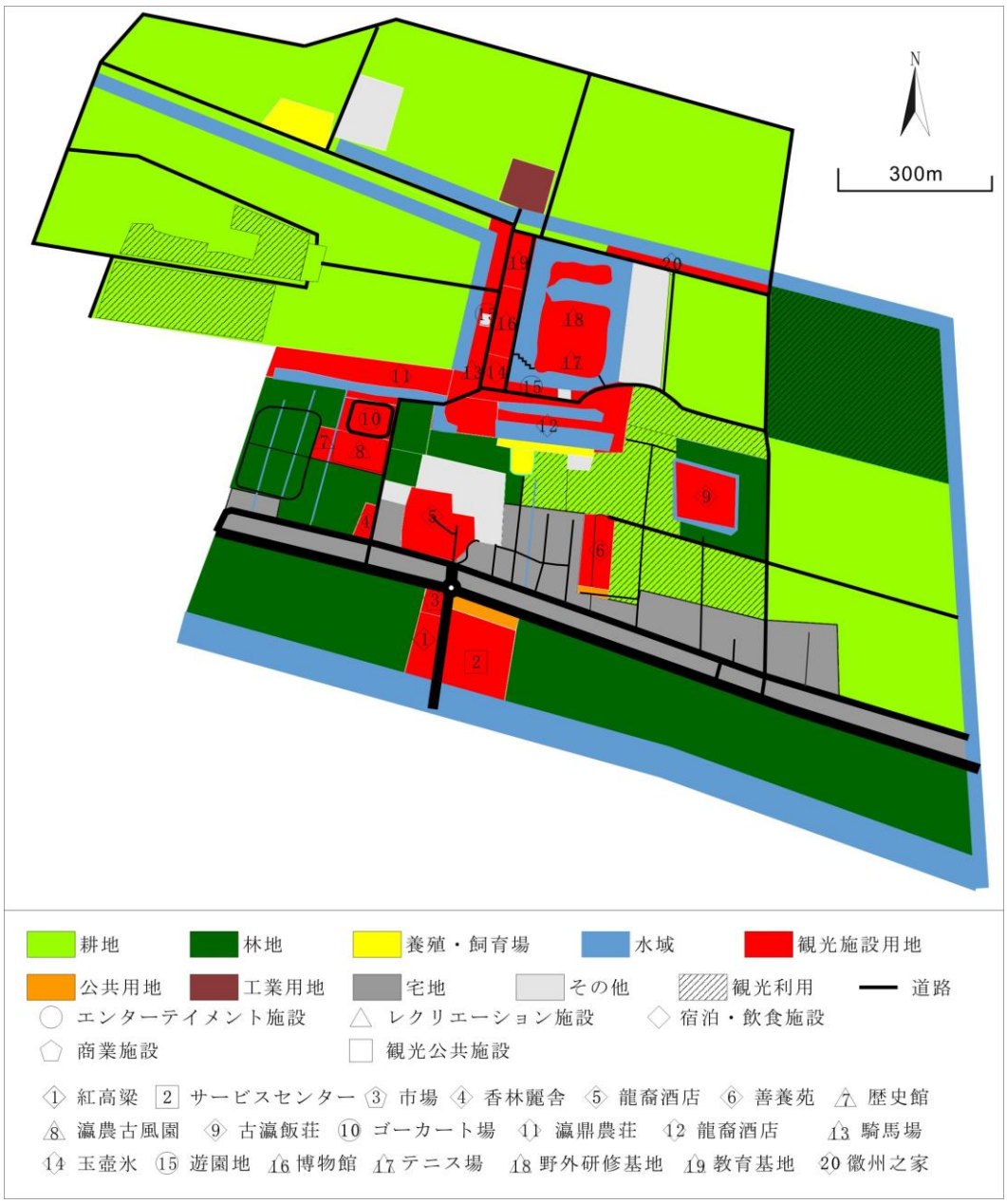


図 2－5　前衛村の土地利用（2015 年）

（2014 年 3 月と 2015 年 3 月の現地調査により作成）

次に全体的な土地利用と内訳の変化を分析し、その結果を図 2－6 に示す。

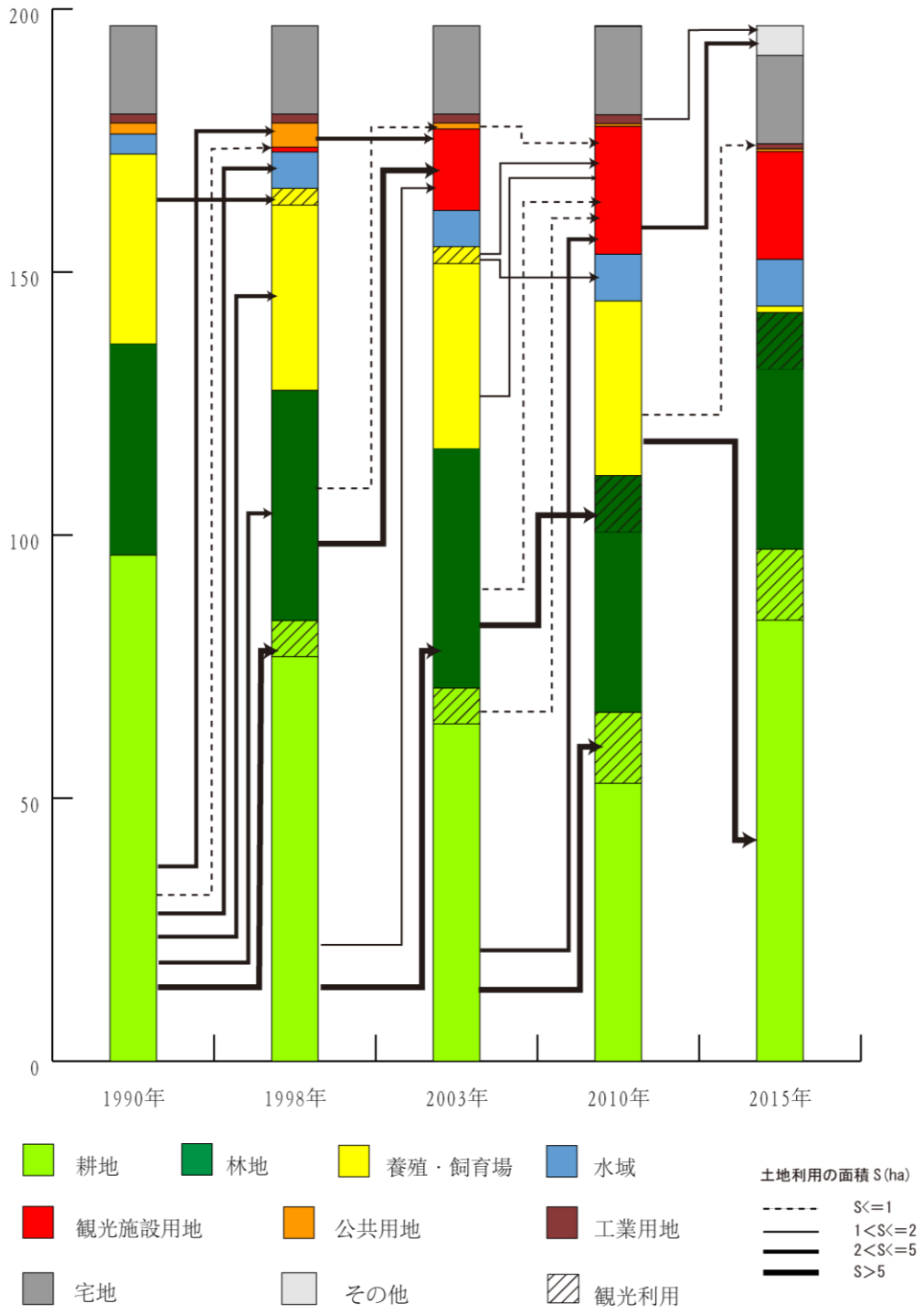


図 2－6　前衛村における土地利用構成とその変化

(2014 年 3 月と 2015 年 3 月の現地調査により作成)

1991 年から 1998 年にかけて、観光利用への変化が 10.9ha でみられる。これは土地利用の変化総面積の 48.4%も占めており、最も顕著な変化である。観光利用の用地の内訳は、耕地の観光利用が 6.8ha（変化総面積の 30.2%）、観光施設用地への利用が 0.9ha（同：4%）、養殖・飼育場の観光利用が 3.2ha（同：14.2%）である。変化源について、耕地からほかの用地への変化が 19.3ha（85.8%）と最も多い。農村観光発展の萌芽期には主に農業生産物が観光アトラクションであり、農業的な用地が観光的に利用されることで、地域の観光化が現れた。

1999～2003 年の観光展開期には、観光利用への変化は観光施設の新設に集中している。その中、耕地からの変化（2ha、変化総面積の 7.7%）のほか、林地から（8.6ha、同：33.2%）と公共用地から（4ha、同：15.4%）も利用された。一方、景観造成のため、耕地から林地への著しい変化（10.8ha、同：41.7%）がみられた。展開期には前期萌芽期の農業用地に展開された観光のほか、主に人工的な観光施設が整備され、その中には、都市的な要素も数多く侵入してきた。

2004～10 年の観光拡大期には、観光施設への変化（8.7ha、変化総面積の 30.5%）がいっそう拡大し、耕地（4.5ha、同：15.8%）と林地（0.5ha、同：1.8%）、養殖・飼育場（2.0ha、同：7%）、公共用地（0.5ha、同：1.8%）からの変化のほか、自然的な観光対象である観光利用の養殖・飼育場も宿泊施設へ転換した（1.2ha、4.2%）。それに伴い、養殖・飼育場の水域は景観水域になった。

2011 年以降、前衛村での土地利用変化の顕著的な特徴は養殖・飼育場が耕地に変化することであり、基本農田確保という理由の裏に、前期の観光発展により、耕地が多く占用されたことも分かった。そして観光の停滞に伴い、観光施設の廃棄が著しくなった。

このように土地利用の側面から見ると、伝統的なルーラリティ研究が指摘しているように、農村観光が農的、農的な土地利用が観光者を惹きつけてきた。その中でルーラリティは多くが維持されていた。しかし観光の発展に伴い、観光者が多く訪れるようになると、よりいっそうの増加を求めるために都市的な観光施設が侵入した。観光の形態も日帰り観光から発展し、観光拡大期には宿泊観光を増加させるために宿泊施設の整備に重点が置かれた。結局、必要な資金がかさみ観光に停滞が現れると、経営の困難な都市的な観光施設が先に廃業していった。土地利用変化を概観すると、農林漁業的な土地利用が観光に利用される一方、農的な土地利用から都市的な土地利用への変化という傾向が見て取れる。

第３節　観光活動とルーラリティの関係

先行研究においては、ルーラリティは観光活動の面で強調されている。具体的には地元の生産風景、伝統的な生産活動や生活活動の他、文化活動といった面である。これらはルーラリティの特徴をローカリティと伝統性という点から強調している。呉羽（2013）は観光牧場が日本に従来なかったもので、ルーラリティを消費していないと指摘している。しかし、農村観光の発展に伴い、外部からの生産物の輸入や、観光者のアメニティへの需要が満たされるようになると、農村に展開している観光活動には外部性、現代性が出現する。本節では前衛村における観光活動のローカリティと非ローカリティ、伝統性と現代性の展開実態を考察することで、観光活動の特徴からルーラリティの構成を明らかにする。

１．農業生産におけるルーラリティとローカリティ

（１）ローカルな農業生産の維持

伝統的な農業は粗放な生産を特徴としている。しかし 1990 年代に入ると、前衛村における生態農業の発展に伴い、栽培作物に変化がみられるようになった。まず都市部の野菜需要に応じて、野菜の生産に転換した。そして生産施設として、害虫防止と野菜生産の季節性を緩和するため、グリーンハウスが造られた。さらに生態農業の発展を象徴するシンボルとなったメタンガスプールも造営された。このように粗放な作物生産から集約的施設農業に転化した。農村観光発展の萌芽期（1991～98 年）と展開期（1999～2003 年）に、上海市民からの野菜需要に応じて、野菜の生産景観が村の新しい特徴になり、野菜とその栽培風景に惹き付けられて観光者が訪れるようになった。この時期、農作物の生産は前衛村が集団的に経営しており、その作物は従来村で栽培されいているものに限定されていた。

農村観光の発展に伴い、前衛村では伝統的な作物である小麦と水稲の栽培面積が減少しつつあるが、生態農業が主軸とする農薬や化学肥料を使用しない高品質な農産品の栽培のため、ルーラリティは維持されてきた。この新しい業態の農業生産は伝統農業と異なっているが、その生産景観はほぼ変化していない。その他には、栽培面積は減少傾向ではあるものの、魅力的な景観を作り出すために、黄色の花を咲かすアブラナの栽培も一部残されている（写真 2－1）。このように、かつて重要な農業生産物であった小麦、水稲、アブラナの栽培は農村観光の発展に伴い、面積が大幅に減少したが、生産方式の変化と景観造成によって、伝統的な生産景観が一部維持されて農的な観光資源になっている。

写真 2－1　前衛村におけるアブラナの栽培

（2015 年 4 月　筆者撮影）

（２）観光発展による農業生産とローカリティの離脱

農村観光の発展に伴い、都市部からの投資者は農村経済の収益性を認識し、農村観光の開発に注力した。耕地経営では、収益性が高く観光者がもぎ取りやすい果物に栽培作物が変化してきた。

2007 年には、上海からの投資者 G 氏によって上海珊蒂農産品専業合作社が設置されブドウ栽培を主とする農園が開設された。設置当初の面積は 3.3ha であったが、ここで栽培されたブドウが 2013 年に上海市農産品安全中心に無公害農産品[21]と評価され、2014 年には栽培面積が 12ha まで拡大した。

[21] 中国において農産品は一般農産品のほか、以下の無公害農産品と緑色食品、有機食品の 3 種類に規定されている。①無公害食品は重金属、残留農薬を国が規定する許容量以下に抑えた食品である。中国国家質量監督検験検査総局と農業部が共同で定めた「無公害農産品管理弁法」に基づいて、農産品品質安全センターが認証する。②緑色食品は持続可能な生産原則に基づき、特定の生産方式で生産されるものを指す。認証機構の認証によって緑色食品のマークの使用が許可された汚染されていない安全、優良な品質、健康的な食品と定義される。中国緑色食品発展センターと国家工商行政管理局商標局が認定する。③有機食品は国際的に認められた有機認証体系の下で認証される食品である。

2007 年、日本とアメリカへの留学経験がある生物学博士 Z 氏が帰国し、上海の大手貿易会社の経営者との結婚を契機に上海市に移住した。新しい農業生産基地として、上海喆畋農業科学技術会社を前衛村に設置し、イチゴの栽培を開始した（写真 2－2）。しかも、Z 氏は高級農芸師の資格を有しており、イチゴ栽培の実験を行い、日本の紅ほっぺと中国長白山地域の野生イチゴを掛け合わせた「喆畋 1 号」と「喆畋 2 号」という新しい品種を開発した。これらのイチゴは、国の果物栽培の基準に従って品質管理が行われ、緑色食品（日本の有機果物に等しい）と認定された。

写真 2－2　前衛村におけるイチゴ栽培温室

（2014 年 3 月　筆者撮影）

このように農村観光の影響を受けて、観光者が利用しやすく農民の高収益が高い、前衛村で従来生産されていなかった農産物が導入された。このような農産物としての価値と観光の価値を併せ持つブドウやイチゴは、ローカリティから脱離した農産物といえる。これらは村において新たな農産物を提供し、さらに農業生産風景の維持にも寄与している。

2001 年には、台湾のドラマ『薫衣草』（ラベンダー）と、同名の香港映画が中国大陸で上映された。二つの作品とも恋愛物語で、ラベンダー畑の美しさが視聴者を魅了した。プロヴァンスのラベンダー畑が「死ぬまでに見たい世界の絶景」としてよく取り上げられた。

その後、中国新疆のイリ[22]、北京、広州など都市の近郊にもラベンダー畑が整備され、「ラベンダーを見たい場合、プロヴァンスに行く必要はない」をキャッチフレーズに、宣伝が始まった。

台湾からの投資者S氏は2007年に前衛村を訪れて、当時上海にまだ珍しかったラベンダー畑を「香草花園」の名で造った。園内はラベンダーをはじめ、ローズマリーやイブキジャコウソウなど十数種類の植物が植えられている（写真2－3）。観光者はここで植物を観賞するだけでなく、エッセンシャルオイルと花の香りがする石鹸の手作り体験を行うこともできる。

写真2－3　前衛村のラベンダー栽培

（2014年3月　筆者撮影）

ラベンダーなどの香草は前衛村でこれまで全く栽培されなかった作物であり、伝統的な中国の農業生産においても珍しいものである。オリジナルと区別が付かず、歴史、労働過程、社会的関係を覆い隠し（ハーヴェイ、1999）、ただほかの地域における観光者に対して

[22] 新疆ウイグル族自治区には、1960年代にフランスからラベンダー栽培が導入されたが、現在のようにはヒットしなかった。

魅力があるものを模倣して提供するために作られた新しい景観である。そして、この香草花園は、商品作物としてのラベンダーの収穫を目的とせず、新しい田園景観として観光者誘致のために栽培されたものである。収益も作物の販売からではなく、入場料で成り立っている。

このように、農村観光が優先され、ローカリティも農業生産の特性も持たない作物が導入された。伝統的な観光農園に農産物のもぎ取りを中心とする体験型観光と異なり、自然的な風景を享受する観光が主目的になっている。

２．建築物の伝統性と現代性

Lane（1994）は建築物におけるルーラリティの特徴を建築物の古さと伝統性であると認識している。実際に現在の中国において、都市からの観光者は農村の伝統的な建築文化を体験することや農村の自然風景を享受すること、農村生活を体験することなどを望む一方、農村におけるインフラ設備の利便性向上と宿泊施設におけるアメニティの現代化を求めている。それゆえ、このような伝統性と現代性の二重に消費する需要が農村観光地の建築物、とくに生産空間における宿泊施設において伝統性と現代性が共存するような開発が行われる。

農村観光発展の展開期（1999～2003 年）と拡大期（2004～10 年）において、宿泊観光者の需要に応じて、前衛村の生産空間に数多くの宿泊施設が整備され従来の農村景観に影響を与えた。これらの宿泊施設は、デザインにおいて伝統的なものと現代的なものの両方が混在している（表 2－3）。

たとえば、2003 年に開業した古瀛飯荘は、明清時代に崇明区の典型的な「三進両場心」といわれる富豪の住宅の様式に従って建設された。「三進両場心」というのは崇明島の特有な呼称であり、建築様式は北京の四合院と類似し、前後に 3 列の家屋が配置され、各列の両脇に脇屋で連接し、「日」の字のような形を成す。壁は煉瓦造りで白い漆喰が塗られ、屋根が灰色の瓦で覆われた住宅である（写真 2－4）。周囲に溝を掘って水を流して家屋を保護する。古瀛飯荘の周りには林地が作られ、景観が非常に良好である。また、龍裔酒店 II もこのような形で、元生簀の水辺空間を利用し作られ、規模は更に大きい。これらの施設は宿泊機能を果たしながら、伝統建築の文化を展示する役割も果たしていると考えられる。

表 2－3　前衛村生産空間における宿泊・飲食施設の概況

名称	開業年	経営者	様式	客室数	経営内容
龍裔酒店 I①	2003	外来者	現代	100	宿泊、飲食、カラオケ、会議
玉壺氷	2003	村②	現代	150	宿泊
濱海漁家③	2004	外来者	伝統	10 棟	宿泊、飲食
徽州之家	2005	外来者	伝統	不明	宿泊
香林麗舎	2005	外来者	現代	23	宿泊、飲食
古瀛飯荘④	2003	村	伝統	—	飲食、カラオケ
龍裔酒店 II	2008	外来者	伝統	150	宿泊、飲食、カラオケ、会議
善養苑	2009	外来者	現代	50	宿泊、飲食
紅高粱	2009	村民共同	現代	27	宿泊、飲食、お土産
瀛鼎農荘	2010	外来者	現代	15 棟	宿泊、飲食、会議

注：①元村委員会の建物である。　②2012 年に経営困難のため、龍裔酒店に転売された。
③2011 年に倒産した。④飲食が主であり、同時に 400 人が飲食できるキャパシティを有する。

写真 2－4　古瀛飯荘

（2014 年 3 月　筆者撮影）

一方、玉壺氷などの宿泊施設は現代的な煉瓦とセメントで作られ、都市部のマンションのような景観を呈している。これらの施設自身は単に宿泊機能を満たすだけであり、地域あるいは伝統的な文化に触れることはできない。その中で、瀛鼎農荘（写真 2－5）は、周辺の自然環境に合わせた小規模なコテージの形を取っており、樹木で囲まれているため、景観が良好である。

写真 2－5　瀛鼎農荘

（2015 年 3 月　筆者撮影）

また、外観は現代的なものと伝統的なものに区別されているが、内装はどちらも現代的なものとなっている。客室は通常のホテルの基準で整備され、 宴会場や会議室は荘厳華麗で、都市部の宿泊施設と変わらない。

３．文化景観の再構築におけるルーラリティ再編と伝統維持

社会の発展に伴い、農村と都市との交流が盛んになり、伝統的な文化景観が消失することは珍しくない。しかし、農村観光では都市と農村の差異が強調されるため、観光のため

に意図的に伝統的な文化景観を再構築することが遍在している。このように新しく作られた景観は、必ずしも真正な地域文化を展示しているとはいいがたく、「農村＝伝統」という観光者のイメージに応じて再構築されたものも存在する。この伝統的文化を観光に利用することは、地域の歴史発掘、再発見・再認識のよい契機ともなる。ルーラリティは伝統と関連しているが、農村観光により伝統が観光化する時、異なるレベルの伝統が繋がっている。例えば、前衛村における観光施設の 1 つである民俗館の「瀛農古風園」では、伝統的な建築文化と生産器具、生活文化が展示されている。以下では、これらの観光対象からルーラリティと伝統の関係について分析する。

（1）前衛村に関連する伝統的な生産・生活文化

前述したように、前衛村は 1970 年代にできた村であり、歴史が浅い。村が経験した伝統的な生産・生活文化は 1970 年代から 1980 年代末のものである。

まず建築文化について述べると、崇明島の開拓が始まった唐代の民居は葦で作られ、環洞舎[23]（現地では「滚地龍」と称する、写真 2－6）といわれている。当時の崇明島の自然環境、生産資材、経済状況に合わせて、作られた簡易住宅である。崇明区は唐の時代から形成された砂州であり、696 年に住民が出てきた。その時期、陸上の建物を作るための材木などの用材が不足しているばかりか運搬費用がかかるほか、建築物が耐えられる地盤もなかった。そのため島上に遍在している葦を使って、非常に粗末な家を作った。社会の発展に伴い、近代にはほとんど消失したが、1960 年代崇明区における囲墾[24]を築く際、一時利用されたことがある。前衛村を囲墾する際も同様に、環洞舎を利用したことがある。現在では観光対象として再構築されたが、伝統的な民居を展示することより、その時代に村を作ってきた先人達の「悪戦苦闘」の様子を伝える他、前衛村の発展を社会主義新農村の業績と位置付け、共産党が中国を豊かな社会になれるように指導できることの証左としている。ここでは観光者に対する愛国教育機能を果たすことが重要視されている。

一方、時の流れとともに姿を消した近代農村の生産・生活用具が観光化の進展によって観光者向けに展示されるようになる。例えば、水車や機物、紡ぎ車、石臼、独輪車などの展示がある（写真 2－7）。これらの器具は現在ではほぼ使用されていないが、1970 年代に前衛村において使用されたものであり、村が経験した伝統である。

---

[23] 環洞舎は葦と茅などで作った簡単な住居である。

[24] 海岸の浅瀬を堤防で囲み、満潮には土砂が海水に運ばれて堤内に入り、干潮にはその土砂が沈殿してついに土地となること。または土石で一定の海岸の浅瀬を囲いその内側を埋め立てて田畑とすること。

写真 2－6　崇明島開拓期の民居「環洞舎」

（2015 年 3 月　筆者撮影）

写真 2－7　伝統的な生産設備「水車」の観光体験

（2015 年 3 月　筆者撮影）

（２）崇明島に関連する伝統的な生産生活文化

前衛村に関する展示物のほか、崇明島の生産・生活文化に再構築された観光対象は必ずしも農村と関連するものとはいえない。ただ歴史的なものであるがために、観光化されるようになっている。

例えば、崇明島の歴史に沿って 3 つの時期に分けて展示している。唐の時代に最初に砂州を開拓する様子、宋・元の時代に漁業と製塩業の発達、明・清の時代の民居の様子を模倣して展示している。

宋の時代には、死刑の執行猶予を受けた犯罪者を崇明島で塩作り業者として働かせたことで、製塩業が徐々に発展し、元の時代までは製塩業が重要な産業として崇明島で展開した。この製塩業の発展過程は民俗館展示されている（写真 2－8)。

写真 2－8　宋・元代の崇明島の製塩作業の展示

（2015 年 3 月　筆者撮影）

明・清の時代の民居の様子も必ずしも農村の民居とはいえず、その時代に都市にも農村にも存在した伝統様式の民居である。

このように歴史的な生産風景が観光対象として復元され、展示されている。しかし展示している内容は必ずしもローカル、あるいは農村と関係しているとはいいがたいものも含

まれているが、村が所在する地域の伝統文化ではある。

（３）中国に関連する伝統的な生産・生活文化

村の地域と関連する伝統的な生産・生活文化以外には、中国に関連する伝統も農村観光に利用されており、伝統的な結婚式の展示が例として挙げられる。飾りつけた輿に花嫁を乗せ、新郎の家に到着すると、赤い礼服姿の新郎新婦が本堂で天地、両親および相手を拝する一連の儀礼を行う儀式である（写真 2－9)。この儀式は中国の伝統的な形式で、かつては農村でも都市でも行われていた。しかし近代以降、とくに都市部では西洋文化の影響を受けて徐々に消失した。このような文化は農村的なものとはいえず、現実の農村生活で行われているものでもない[25]。伝統的な文化を演出して観光者に提供する商品にすぎない。

写真 2－9　伝統的な結婚式の展示

（前衛村観光パンフレットより転用）

したがって、文化景観の側面からみると、歴史的な生産・生活風景を再構築した文化景観は農村と関係するかどうかは考慮されていなく、開発者や観光者が想像する農村像に基

[25] 近年、復古の結婚式が流行しつつがあるが、それも農村に限らず、むしろ都市部で流行っている。

づいて開発されたものであるといえる。

歴史的な経緯をみると、20 世紀初期の「五四運動」以来、中国社会では伝統文化は現代化を妨げるものとして否定されてきた。農村を基礎とする中国の伝統的な日常世界は保守的、封建的、閉鎖的であると批判され、変革すべきであると謳われてきた。伝統文化はマイナスイメージの象徴として、文化大革命の時代には「破四旧」（古い思想、文化、風俗、習慣を打破する）の革命対象となり（周、2011）、消失しつつあった。農村観光の発展をきっかけに、これらの歴史や伝統的な文化は観光資源として広く認識されてきた。農村観光の発展は地域の歴史や伝統的な文化が観光において再発見されるという点で、重要だと評価できる。

以上のように農村観光において、村の伝統から地域ないし国レベルの伝統生産・生活文化が、観光対象として再構築されている。

４．都市的観光施設の侵入

農村観光はルーラリティを中心とするものであるが、一般的には観光発展によって、農村に多様な都市的観光要素が進入していることもある。前衛村において観光発展が始まった 1993 年に、野菜のもぎ取り料金だけが観光者からの収益であった。農村風景を観賞する観光者も少なくないが、その風景に対して料金を支払う必要はなかった。また観光対象が少ないため、観光者の滞在時間も多く半日以内と短かった。そこで、村側は観光者の滞在時間を延ばすために、より多くの観光施設を整備するように努力した。しかし、村の幹部たちは農村観光者のニーズを十分に理解できず、逆に都市部に卓越している娯楽施設が非常に面白いと考えて、都市的観光施設を村に導入する計画が出現した。観光者が多く訪れているため、経営者の前衛村に対する投資意欲は高かった。その結果、1999 年からの観光発展の展開期（1999～2003 年）に都市的要素であるゴーカート、海賊船、ミニジェットコースターを有する遊園地が整備された（写真 2－10）。

観光発展の拡大期に、現在前衛村の重要な観光対象である博物館（珪化木、奇石、根彫）が開設された（写真 2－11）。博物館は都市によく存在している観光対象であり、都市的な要素とも理解できる。宣伝資料によると、前衛村に設置された理由は前衛村が生態村であり、農村観光の重要な要素の 1 つは生態教育基地であるためだったという。珪化木と奇石、根彫は自然の力で造られたものであり、この展示を通じて自然や生態の教育を行うことを目的としている。しかし、前衛村元書記 X 氏からの聞き取り調査によると、当時、村はこ

写真 2－10　娯楽施設ゴーカート

（2015 年 3 月　筆者撮影）

写真 2－11　珪化木博物館

（2015 年 3 月　筆者撮影）

の博物館が村の観光開発計画に合致しないと考え、設置に消極的であったが、上海市政府の官僚の紹介でもあり拒否できなかったという事情があった。この点で観光対象の開発には、政府の指導者も重要な影響要因であることが明らかになった。

2011 年に観光発展が停滞期に入り、農村観光は農産物のもぎ取りと農村風景の観賞、伝統文化の体験のほか、農村地域の良好な空気と景色の中で心身の健康を図るハイキング、トレッキングなどの活動も重視されてきた。このようなニーズに対応して、前衛村では都市からの投資者が野外研修基地とテニス場を整備した。

前衛村における観光対象の設置状況をみると（図 2－7)、農村観光発展の萌芽期（1993～98 年）に、既存の農業・漁業の資源に村が投資することで、それによる観光業の展開が可能となった。農村観光がルーラリティの観光利用から発展してきたことが明らかになった。展開期（1999～2003 年）における観光者の増加によって、村はインフラ整備を重視するようになり、観光業の補助になるサービスセンターや市場を整備した。一方、外部投資者によって都市的な観光施設も導入された。拡大期（2004～10 年）では、宿泊施設の増加が著しいことから、農村観光が従来の体験型観光から農村環境を重視する保養型観光へ変化したことが考えられる。宿泊施設の建設により都市的な土地利用が増加する一方、伝統様式の建物による伝統文化の再構築も現れている。また、農産物のもぎとりもそれまでよく使用されていた野菜から従来地元で栽培していなかったイチゴやブドウ、ないし景観作物のハーブに転換している。停滞期（2011～15 年）には、一部の観光施設が廃棄されるようになった。

以上のように、農村は従来農産物を生産する場所であり、農業も生産機能を強調した第一次産業であった。時代の進展に伴い、農村・農業の観光、レクリエーションなどの機能が重視されてきた。その中に、本来市場に出荷される農産物を農村に訪れた観光者が自ら摘み取ることにより、新鮮で安全安心と思われる農産物を収穫しながら農業を体験するという行動が生じた。前衛村では無公害野菜基地から農村観光が始まり、このような地元の農産物が農村地域で最初に観光化されたものである。すなわち、最初に農村観光の対象になっていたのは、農村における農的・ローカルなものである。そして農村観光が発展し、観光対象の多様化を図って、自然的な観光対象のほかに、農村文化を展示する人工的な施設として民俗館が造られた。また都市的要素である遊園地も整備された。この遊園地の開業背景は、前衛村に観光者がいるというだけではなく、遊園地が農村地域に設置されているため、農産物の栽培風景や水域などの美しい農村風景に囲まれており、遊びながら自然

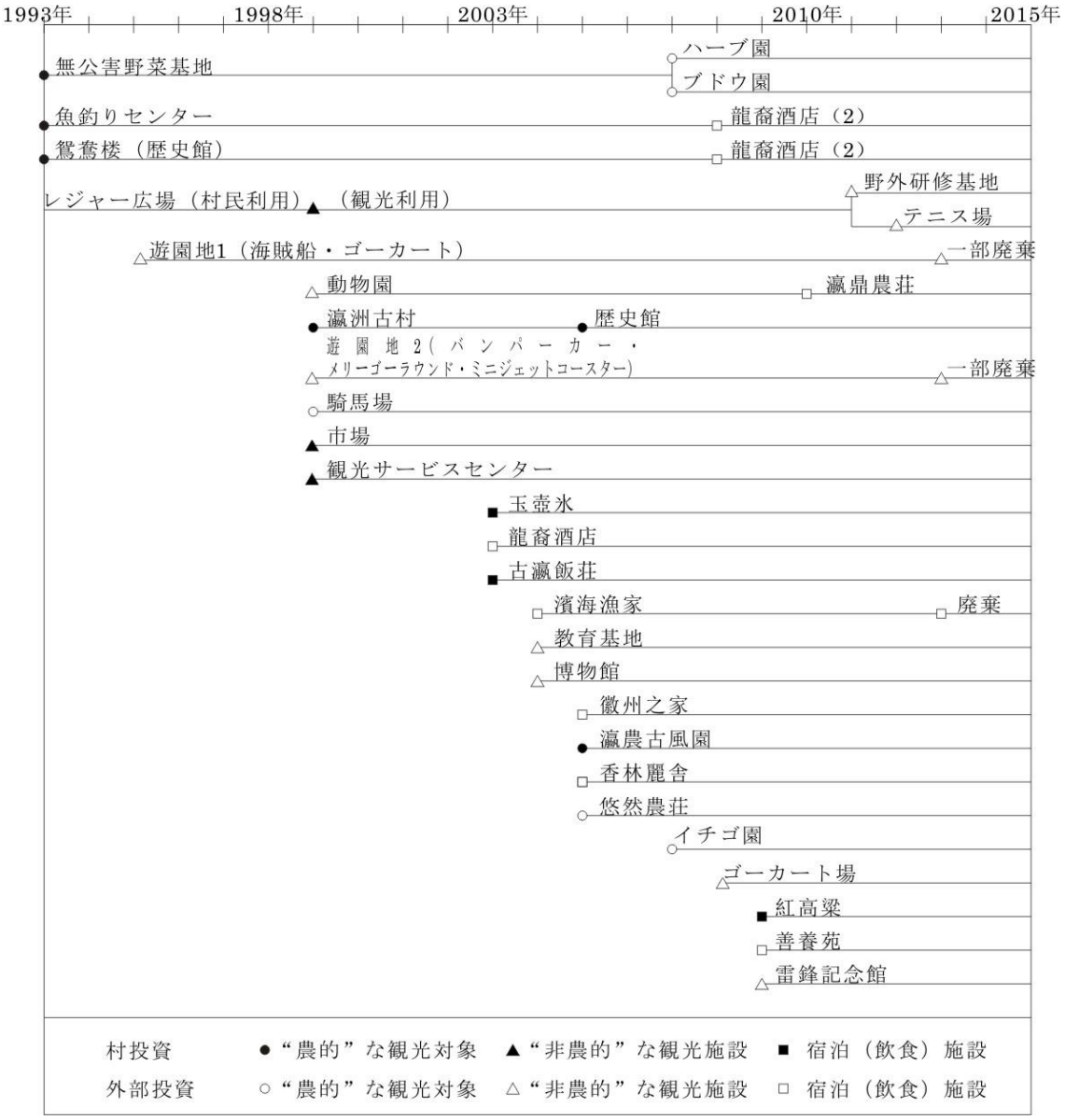


図 2－7　前衛村における観光対象の設立概況

（2014 年 3 月と 2015 年 3 月の現地調査により作成）

豊かな農村風景も眺めること、そして農村の良好な自然環境を享受することができるという理由があった。この点からみると、前衛村の遊園地は都市部に立地するものとは異なる性格を持つともいえる。このような遊楽施設は非ローカルなものであるが、農的な風景や雰囲気、環境を利用している。いわゆる農的な要素が開設の背景として利用され、非ローカルな都市的な観光要素が輸入された。結果として、観光者が増加して収益を出すことが可能となり、さらに農村が安価かつ広大な土地を提供することが可能であったため、都市

的観光対象が整備された。これらの都市的要素はローカリティとも「農的」とも関係のない施設は、観光客が頻繁に農村を訪れることを背景に付随してできたものである。最後には農業生産において収益性が高く観光農園を志向した果樹栽培が展開される一方、農村観光は美しい景色を享受する傾向に移り、地域に従来なかった景観作物が観光のために栽培された。これらのものは農的ではある、ローカルとはいえない。

以上のことから農村観光は農的・ローカルな資源の観光利用から始まり、非ローカルな要素が農村環境を背景として展開し、農的ともローカリティとも関係していないものが造られるという変化プロセスが確認できる。

第４節　まとめ

前衛村において農村観光が発展したことには以下の理由がみられる。

まず農業機能の変化である。生産主義からポスト生産主義へと変化する潮流に伴い、農業の多面的機能が重視された。その中の一つとして、農村の観光機能の強化が挙げられる。しかし、当初の観光機能は農業機能の変化により副次的に認識されたものである。観光者の増加によって、観光機能を主とするようになり、多様な観光内容を提供するため、宿泊などの観光施設が造られたことで土地利用に多様化の傾向が現れた。土地の機能として、観光需要に応じて食料生産機能から野菜や果物など収益性の高い経済作物の栽培、さらに景観作物の栽培へと、土地の機能が生産から観光消費へ転化する傾向がみられる。これは観光者の消費傾向が初期の農産物の追求から、農村環境での滞在に変化したことが関係していると考えられる。すなわち農業機能の変化により、観光機能が認識されるようになったということである。農業機能は観光者の需要に応じて再編され、観光を拡大した。

次に景観の貴重性が挙げられる。農村観光の原動力は農村地域におけるルーラリティと観光客の発地である都市地域におけるアーバニティとの差異である（鄒、2006）。一般的に、ルーラリティは農業および伝統と繋がっている。しかし、農業と伝統が遍在している農村が少なくなり、全ての農村に農村観光を発達させるべきではないという指摘もある。高柳（2013）は兵庫県佐用町南光地区におけるひまわり景観が観光者を引き寄せている理由を以下のように述べている。南光地区の景観は、本来、水田・里山・民家といった典型的な日本の農村に見られるものである。このような田園景観は、日本ではあまりにも普遍的であり、住民にとって必ずしも魅力的とはいいがたい。しかしながら、ひまわりは日本において農産物として珍しく、一面のひまわり畑が都市住民に対して非日常性を演出することに成功し、観光者が訪れるようになった。したがって、農村観光において、都市と違う農村景観の存在が重要といっても、農村観光が発達できる農村は一般的な農村と比べて何らかの希少性を持つことも重要である。この希少性から都市住民に認知され、来訪に繋がることが重要である。前衛村には伝統的な農業時代のように中国における通常の農村と同様に農産物の生産機能を重視している時期があったが、それを続けた場合は農林漁業を中心とした土地利用とその景観を観光商品化するのは困難であったと考えられる。しかし、前衛村はまず工業の成功によって経済力が向上し、当時中国において珍しい生態農業により安心安全な農産物だけではなく、美しい農村景観がマスメディアに取り上げられた。この

ため都市からの観光者が増加し、前衛村の観光化が始動した。

また都市近郊に立地していたことで、都市からの支援や投資が獲得しやすい点も重要である。生態発展理念は社会発展がある程度のレベルに到着してから、環境汚染などの問題が認識され、当初、都市部から提示された概念である。そのため生態発展に関する技術は都市部で研究されてきた。前衛村では、生態農業を発展する理念が決定されてから、上海市の大学や研究所からの技術支援があった。その支援がなければ、生態農業の発展は困難であったと考えられる。そして観光発展における初期投資は高額であり、農村自身の投資能力は極めて限定的である。都市部からの資金の流入があることで、観光を拡大させることが可能となる。前衛村における観光施設の開発は、都市部から投資が重要な役割を果たした。そして観光の発展にとっては、施設の開設よりも、運営能力や集客、宣伝などの経営力がさらに重要である。全体的にみると都市からの経営者は地元の村民より企業運営の経験が豊富であり、それらの経験は農村観光の発展においても大きなに貢献を果たした。

最後に、経営者の収益が高いことも農村観光発展の重要な点である。日本において農村観光は農山村地域過疎化の対策として使われることが多いが、中国では地域の発展が強調されている。高柳（2013）は兵庫県佐用町南光地区の農村観光を分析し、景観形成の要因として、農業が本質的に自給レベルで、経営規模が極めて小さく、担い手が高齢化しているため、農家が商品作物を生産して利益の最大化を求めようとはしていないという点と指摘している。しかし、中国は未だ途上国であり、経済的利益を得られなければ産業の展開が難しくなる。インターネットのニュース[26]によると、2009 年に前衛村の観光ブドウ園に生産されたブドウは販売価格が 1 キロ 56 元（約 950 円）で、市販の通常のブドウより 6 倍以上高額であった。2015 年 3 月に現地調査する時、観光イチゴ園に生産されたイチゴは 1 キロ 50 元（約 850 円）で、普通のイチゴの 5 倍程度の価格だった。しかも前衛村の場合は観光者が農園にて自ら摘み取るため、イチゴを市場に出荷する必要もなく、その分のコストが低下している。それゆえ前衛村における観光農園が発展することができた。

以上の通り、前衛村における生産空間の観光化に伴い、ルーラリティは農村の土地利用類型と農業機能、および生産空間の景観と相互に影響しながら変化している。結果を図 2－8 に示す。まず農村は伝統的に農産物を生産する場であり、土地利用はほぼ農林漁業用地であったが、生産主義からポスト生産主義へと変化する潮流に伴い、農業の多面的な機能が重視されるようになった （高柳ほか、2009)。前衛村の場合、伝統的な農業から生態農

[26] 有機葡萄、値這個価. http://news.sina.com.cn/o/2009-08-18/085616142037s.shtml

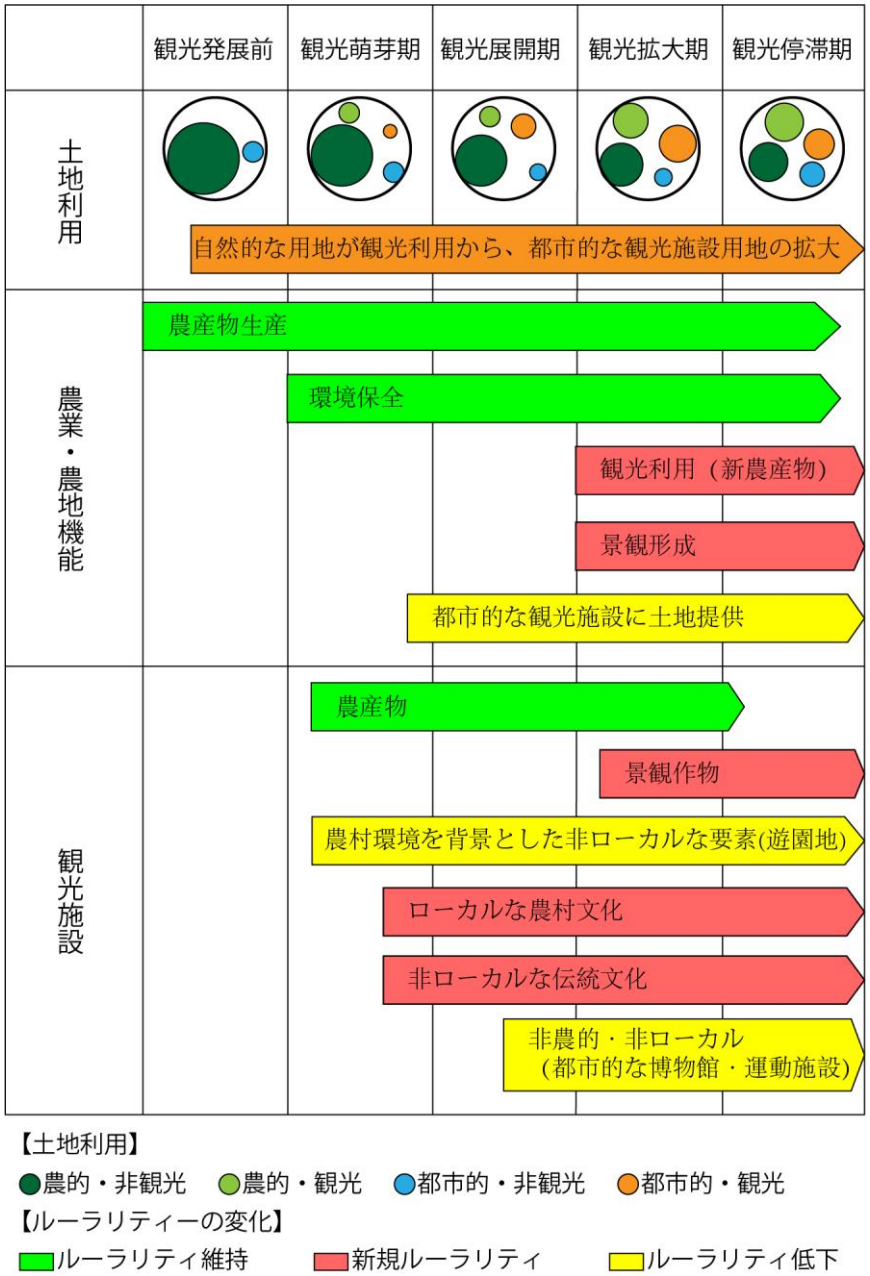


図 2－8　生産空間における農村観光の発展とルーラリティ変化

業に転換することによって、その農業機能は生態農業の環境保全機能を重視することへ変化し、新しい農業生産景観が誕生した。当時希少性があった生態農業により、観光機能が認識されてきた。観光発展の過程では、都市的な観光施設も導入され、農村地域の自然的な用地が都市的な用地へ転換しつつあり、土地利用の指標でルーラリティは低下している。

また、農村観光を発展するため、従来食糧生産を重視した水稲、アブラナなどが景観保全のために、ある程度残され、ルーラリティを維持している。一方、従来生産していなか

ったイチゴやブドウ、ハーブなどが観光のために導入され、農業生産風景を維持することで、新規のルーラリティもみられる。

最後、人工的な観光施設において、都市的な要素によりルーラリティが低下する一方、伝統的な生産・生活文化の活用により整備された観光施設は伝統性という特徴を持ち、新規のルーラリティと考えられる。

第３章　生活空間の観光化とルーラリティ再編

伝統的な農村というものは農業を営んでいる農民の生産と生活の空間である。第 2 章では農産物を生産する生産空間においてルーラリティの変化を考察した。観光産業の発展、とくに宿泊観光の成長に伴い、観光活動は生産空間から村民たちが居住、消費、休暇する生活空間にも進入してきた。とくに宅地を利用した民宿の出現と、その展開による住空間の変化も、農村地域変化の重要な側面である。個人や家族の家屋が居住用から経営のための場所へ転換することで現れる民宿建築の構造変化は、観光発展の段階ごとに異なっており、その重要な表象でもある（陳、2004）。住宅が経営用に変化したことに伴って、私的な利用空間から共有空間へ、利用者は家族から外来の観光者へ転換した（薛・王、2017）。つまり観光の発展に伴い、農村の集落景観と居住空間、公共空間が変化しつつある。伝統的なルーラリティは農村住宅において、古くて伝統的で小規模であるような特徴が認識されているが、農村観光の発展に伴い、これらの特徴は変化することが多い。民宿経営の展開において、農村生活空間において増改築による局部的建て詰まり、広告板や立見の氾濫、伝統と無関係の商業主義的な色彩とデザインの建築、カラートタンや新建材の乱用などが生じ、農山村の固有な景観が破壊されてきた（服部ほか、1976b）。

中国において、農民が自宅を利用し、あるいは外来者が農家の持家を賃貸し、農家が宿泊と食事を提供する営業形態を「農家楽」と呼称している。前衛村にも 1999 年から農家楽の経営が始まり、その展開によって生産空間に変化が生じた。

本章ではまず前衛村の生活空間において、農家楽の経営プロセスを解明したうえで、人口と集落景観、居住空間を対象として、生活空間の観光化によるルーラリティの再編について分析する。

第１節　農家楽経営の台頭と拡大

農家楽の語源は、南宋時代の詩人陸游（1125-1210 年）が書いた「岳池農家」と題する詩の「農家農家楽複楽、不比市朝争奪悪」（農家の生活が快楽であり、商業社会と官界における激しい権力や利益の争奪がない）という一説にあり、農家生活の楽しみ、または農家の生活を楽しむという意味がある。現代における農家楽の意味は、1987 年 5 月に当時中国国務院副総理谷牧氏が浙江省富陽市を視察した際、当地の農村観光を「農家楽、旅游者也楽」（農家が快楽で、観光者も快楽である）と題辞したことに由来する（応、2011）[27]。こちらの意味は農村観光による経済向上で農家が楽しくなり、農村観光を享受する観光者も楽しくなるということを指す。また現代中国の農家楽が誕生したのは、2006 年に中国国家旅游局に「中国農家楽旅游発祥地」と冠された四川省成都市郫県（現郫都区）の農村で始まったという説もある。1987 年に、郫県の花木を栽培する農民の徐紀元氏が買付人の便宜のため、自家の部屋や庭などを利用して、買付人に宿泊と食事を提供し始めた。これを土台として、郫県の新鮮な空気、花に囲まれた環境、美味な郷土料理が人気を集め、観光サービス技能と簡単な設備を取り入れることによって、農村観光に該当する「徐家大院」の経営を成都市市民向けに始めた。「徐家大院」は現代中国の農村観光の農家楽の原形となり、地域内に徐々に広まった。その後、1992 年 3 月に、中国共産党四川省委員会副書記馮元慰氏が郫県の現状を視察した際に、農家楽経営の第一人者徐紀元氏の家を訪ね、都市からの訪問者たちが楽しむ様子を見て、「徐家大院」に「農家楽」と題辞して贈呈した。これによって、最初から郫県で名付けられていなかった農村・農業観光事業が農家楽の名称でさらに普及した（展、2008）。成都市近郊における農家楽の誕生から 20 数年が経た今日では、農家楽の類型や特色も、より複雑で不明確になっているのが実態である（魯、2012）。このように、農家楽というものは農村観光を経営し、とくに外来者に宿泊と食事を提供し農家が経営する施設を指す。

本論文における農家楽とは、農民が自宅を利用し、あるいは外来者が農家の持家を賃貸し、農民が宿泊と食事を提供する営業形態を指す。以下、前衛村における農家楽の発展を分析する。

---

[27] 浙江日報（http://zjrb.zjol.com.cn/html/2011-05/06/content_822002.htm?div=-1）によって、富陽は農家楽の発祥地と称されている。

１．農家楽経営の経緯

前衛村では、1999 年 5 月から観光発展の展開期に拡大してきた宿泊の需要を満すため、農家楽が発展し始めた。当時 12 軒[28]から始まった農家楽が、2015 年には 117 軒まで増加した。以下では、まず前衛村における農家楽経営の全体像を分析することで、その特徴を把握する。

1999 年に当時前衛村支部書記だった X 氏は四川省の農家楽を視察し、前衛村の観光発展の実情と合わせて、村の幹部たちと相談した上で農家楽を発展させる方針を定めた。しかし、自宅の空部屋を活用して事業を始める農家楽経営は、コストが低いといっても、基本的な部屋の装飾と施設の整備など、ある程度の投資が必要とされる。当時、村民は農家楽経営の収益性が予想できず、農家楽経営の経験もなかった。

一方、崇明区には「知らない人が自宅に泊ると、運気が悪くなる」という伝統的な観念があるため、村の決議を理解しない村民が多く、農家楽経営に取り組もうとする村民は少なかった。そして、村の幹部たちは村民に経済発展のために伝統的な観光形態を変える必要性を宣伝するほか、「文化搭台、経済唱戯、自愿参与、统一管理」（文化を舞台として、経済が主役、村民が自発的に参加し、村が統一的に管理する）の原則を作り、幹部と共産党員が率先して農家楽の経営を始めた。表 3－1 で示すように、最初に農家楽を経営した 12 戸のうち、9 戸の経営者は当時の村の幹部や共産党員である。ほかに、「伽妮農家楽」の経営者は当時村で生簀を請け負い、「樹青農家楽」の経営者は当時村の工場でセールスを担当していた。2 人ともビジネスの有識者であり、実務家でもあるため、農家楽の開業資金を用意することができ、最初から農家楽経営に参入した。営業開始当初は、自宅全ての空部屋を利用して、3～6 の客室を造り、小規模な経営から開始した。当時、宿泊者にほぼ全ての経営者が食事も提供していたが、専用の食堂は設けていなかった。応接できる宿泊者数も少ないことから、自家用の食卓を利用していた。

そして中国では 1999 年 9 月に休日制度が改定され、ゴールデン・ウィーク制度が開始された。建国記念日の国慶節（10 月 1 日）連休が初めてのゴールデン・ウィークとなった。その影響を受け、国内観光者が急増した。前衛村に訪れてきた観光者は前年に比べ 38,500 人も増え、結果として当年、村は入場料だけで 3 万元の収入を獲得し、農家楽経営を始め

[28] 前衛村の宣伝資料により、最初は 8 軒から始まったが、聞き取り調査の結果は 12 軒である。現在の軒数も資料とは違っており、それは 1 軒の農家楽が親子各自の名義で重複登録していたり、登録していなかったりする農家楽が存在するからである。

表 3－1　前衛村における 1999 年に開業した農家楽の概況

名称	客室数（室）		食事提供	経営者身分
	1999 年	2015 年		
佳佳	4	16	有	幹部
悠然	3	9	有	幹部
庭鶴	4	15	有	幹部
小平	5	8	有	幹部
瀛春	3	15	有	共産党員
紅房子	4	15	有	幹部
伽妮	5	14	有	自営業
甜甜	5	11	無	共産党員
金平	5	17	有	不明
帝樂	4	6	有	共産党員
樹青	4	8	有	村民
名称なし	6	6	有	幹部

（2014 年 3 月の聞き取り調査により作成）

た農家は一戸当たり約 4,000 元の収入増となった。この事実から村民は農家楽経営の経済効果を認識し、徐々に農家楽経営に参入するようになった。

次に 2004 年から 2010 年までの前衛村の農村観光発展の拡大期では、生態農業と農家楽の発展によって村の知名度が高まった。第 2 章で述べたように、2004 年 7 月 27 日に中国共産党中央総書記の胡錦濤氏が前衛村を訪問したことをきっかけに、村の農家楽が評価され、農家楽経営が重要な商機として村民に認識された。そして胡錦濤氏の訪問について、マスメディアが国内で広く宣伝した結果、これらの宣伝を通じて前衛村の農家楽が農村観光のブランドとなり、上海市からの観光者だけではなく、周辺地域の江蘇省や浙江省、ないし遠方からの観光者も訪れるようになった。そして 1981 年に構想され、1996 年に起工された上海―崇明長江大橋（一部トンネル）が 2009 年 10 月 31 日に完成すると、上海市から崇明区へのアクセシビリティが大きく改善され、前衛村農村観光の発展における重要な契機となった。2004 年に 11 軒、2005 年に 18 軒の農家楽が新規に開業した（図 3－1）。

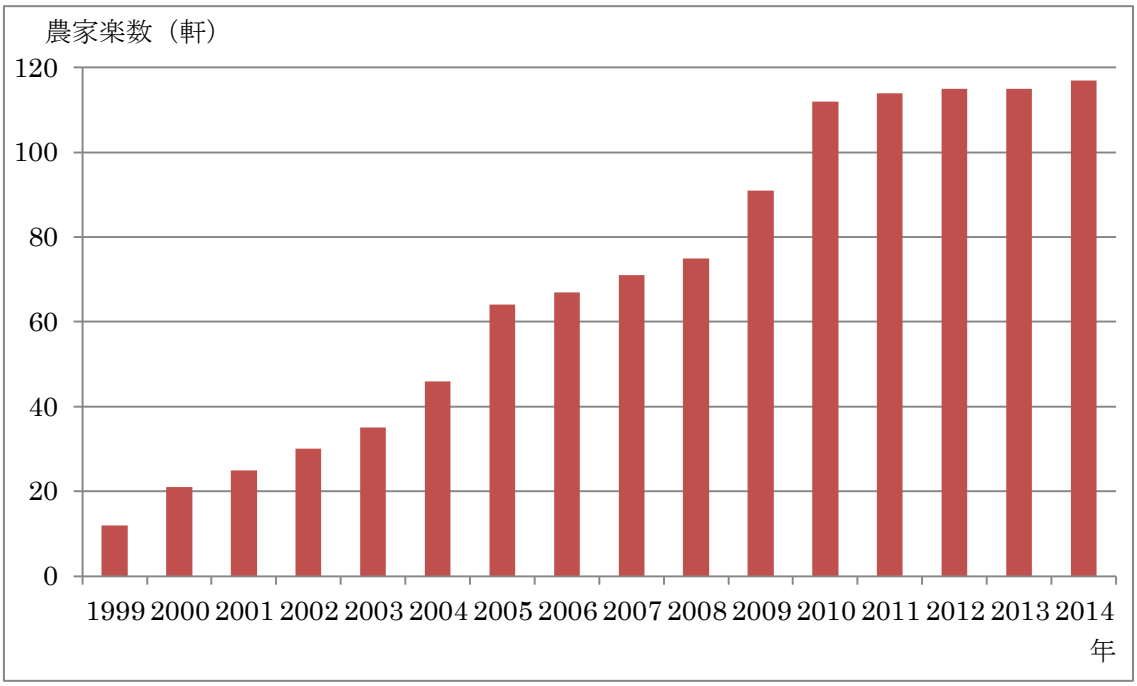


図 3－1　前衛村における農家楽経営軒数の推移

（前衛村の統計資料と 2014 年 3 月、2015 年 3 月の現地調査により作成）

前衛村に訪れた観光者が急増した結果、2009 年には農家楽が 16 軒増えた。また 2010 年に上海で開催された万博では、前衛村の農家楽が上海市の特色ある民間ホテルであると評価され、2010 年には 22 軒増加し、総数は 112 軒に達した。

最後に 2011 年から前衛村の農村観光発展が停滞期に入り、崇明区全体の観光者に占める前衛村の割合が大幅に減少した。2010 年にあった 177 戸の農家のうち、約 3 分の 2 が農家楽を経営している。経営が行われていなかった農家には、担い手不足や経営能力を持たないなどの理由がある。一方、拡大期に急増してきた農家楽は観光者の急減によって競争が激しくなり、とくに新規開業した農家の集客能力は低かったため、リピーターの確保も期待できないため、農家楽経営による収益は低下した。そのため、農家楽の新規開業数が急減し、2011 年に 2 軒、2012 年に 1 軒、2014 年に 2 軒が開業したに止まる。ただし観光者の急減によって経営状況は不振となっているものの、農家楽は自宅を利用して経営を行っているため、完全な閉業には至っていない[29]。

[29]　聞き取り調査時、最初「うちはもう閉業した」と言われたが、詳しく聞くと、「観光繁忙期に経営の良い農家から紹介されてきた場合だけ宿泊者を受け入れる」というケースもあった。

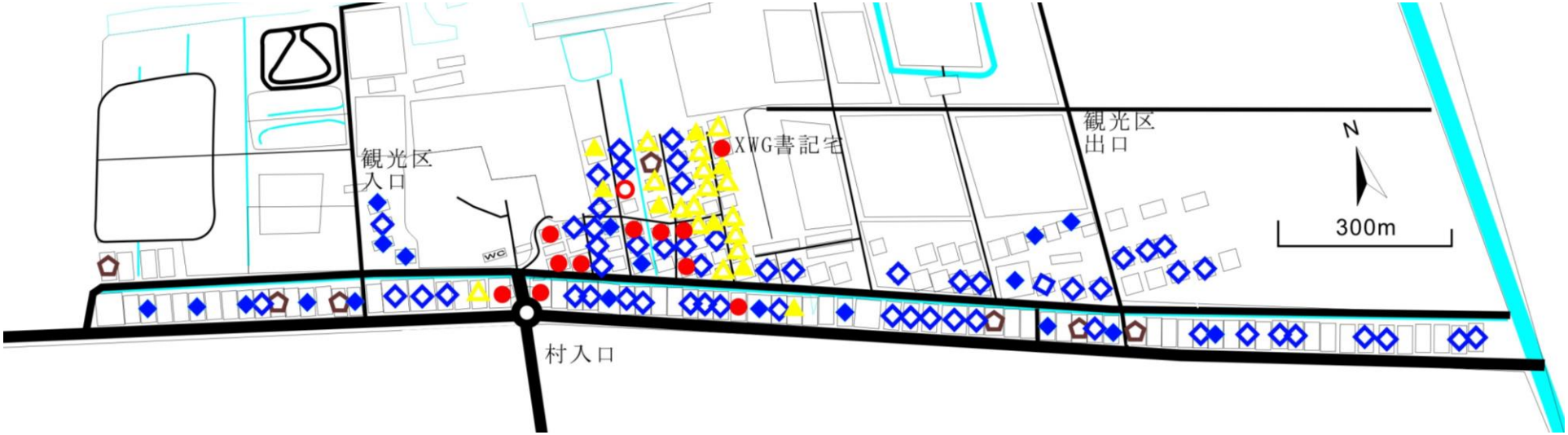
２．農家楽の分布

前衛村は干潟を埋め立てできた村である。村の南部に埋め立て用の堤防があり、最初は住宅がその堤防に沿って分布するように建てられた。1980 年代半ば以降、住宅が不足したため、新築した住宅はほとんど村の中心部に建設され、住宅が逆さの「T」字のように分布するようになった。前衛村における農家楽経営の拡がりを図 3－2 に示す。1999 年に最初に開業した 12 軒の農家楽は、村の入口（写真 3－1）と中央部に位置している。その中で、入口の方は観光者に最初にみられる場所で、立地論の原理に適っている。村の中央部は、とくに X 書記宅は村の入口から離れ、観光スポットの入口からも距離があり、経営者の身分が農家楽の分布に重要な影響要素となっている。

写真 3－1　前衛村の入口

（2014 年 3 月　筆者撮影）

そして 1999 年の経営状況により、農家楽の高収益が認識され、農家楽が初期経営住宅を中心に近隣へと拡がる。とくに 2000～03 年に開業された 23 軒のうち、14 軒（61%）が X 書記宅周辺に集中している。この分布は施設立地の集積の効果を狙う立地行動として、農家の対応を評価できる結果である。また、近隣は空間距離の近さだけではなく、その親戚ないし親しい関係であることが予想され、そうした社会関係ゆえに既存経営者の収入についての情報や既存経営者からのアドバイスを獲得しうる立場にあったと推測できる。たと



1999 年に開業　2000～03 年開業　2004～10 年開業　2011 年以後開業

宿泊だけ提供　飲食と宿泊も提供

図 3－2　前衛村における農家楽の開業年と分布

（2014 年 3 月、2015 年 3 月の現地調査により作成）

えば、以下の聞き取り調査から分かるように、書記 X 宅の南に隣接しているのは彼の義妹のM氏であり、巷の北に位置するのは村設置当初一緒に村の管理職を担当したS氏である。この 2 人は書記 X 氏に誘われ、翌年に農家楽を開業し、いずれも大規模なものに発展させている。

X 書記は私の義兄（お姉さんの夫）である。1999 年に農家楽の経営が始まるとき、収益が確定できなかったため、参入しなかった。農村の人だから、収益が出せたらいいが、万が一、入居者がいなかったら、初期投入があまり高くないといっても、農村はお金を稼ぐのが難しく、大変な損になる。義兄が農家楽を経営してから、観光者が多く来て、私もよく手伝いに行った。観光者が賑やかな様子を見て、私も翌年に農家楽を経営し始めた。義兄は観光者を紹介してくれて、経営はうまくいった。現在、両家の間の壁も取り除き、1 つの家のように経営している。（ML 農家楽経営者 M 氏、家は X 書記の北に隣接する）

X さん（X 書記）は当初（1960 年代）私と一緒に農地を囲墾した。彼は非常に賢い人で、1999 年に農家楽を経営してお金もよく稼いだ。だから、彼に誘われ、翌年に経営を始めた。とくに、2004 年に胡錦濤総書記が前衛村を視察する時、家に入って僕とも握手した。その後、うちの農家楽がすごく有名になり、観光者もたくさん来た。（LS 農家楽経営者 B 氏、家は X 書記宅のすぐ近くにある）

私は農民であり、商売について全く分からないため、農家楽を経営しなかったが、親戚の LS 氏が経営している農家楽が人気で、とくに祝日には観光者が多すぎで、収容できない場合が多い。だから、私を経営に誘い、観光者を紹介してくれて、うちも経営し始めた。（農家楽経営者 C 氏、家は LS 農家楽の対面）

2004 年に前衛村の農村観光が拡大期に入ると、新規開業者が大幅に増加した。この時期において農家楽の立地は、村中心部で早い段階に開業した農家楽の周辺に拡大した一方、村の入口から観光区の入口まで、そして観光区の出口から村入口までの道路に沿って展開してきた。この時期の拡大範囲は前期の核心から周辺への広がりに加えて、線状的な分布も確認できる。これは観光者の行動線路によって、施設の立地が影響された結果である。

しかし、2011 年以後は農村観光発展の停滞期に入り、新規の農家楽は少なく、空間分布としては点在するパターンがみられる。

３．農家楽経営規模の特徴

農村住宅が小規模として認識されている。しかし、農村観光が進展し、より高い利益を追求するために、住居の改築・増築・新築行為が行われ、農家楽の経営規模が拡大する例が前衛村にも現れた。これらの個々の農家楽における経営規模を分析することによって、生活空間の観光化の特徴を考察することができる。

生産空間における観光活動が始まった初期に、観光はあくまでも農業の付随的機能に過ぎなかったため、農家楽経営も農家の空部屋を利用して農家の補助的な収入源になるに止まっている。日本における民宿の経営も高度経済成長期に高まったレクリエーション活動とともに、スキー場の開設の影響で農閑期である冬場に現金収入源を持たない農家において、労働力や土地利用の面で従来の生産構造と競合せずに導入された（石井、1970)。農村地域のコメ生産調整の影響で、これらの民宿は改装のたびに規模を拡大しながら観光業への依存度を強めた（呉羽、1999)。前衛村においても、前述したように（表 3－1)、初期の 1999 年に開業した 12 軒の農家楽はいずれも小規模なものであった。観光が拡大する一方、土地が観光のために開発され、そして工業の停滞によって村の産業が観光業に集中するように調整された。結果、主要な収入源を農家楽に依存する農家が多く増え、経営拡大の例も多く現れた。

2014 年 3 月と 2015 年 3～4 月計 2 回の現地調査からは、前衛村にある 177 軒の農家のうち、約 3 分の 2 の 117 軒が農家楽を経営していることが分かった。農家楽は自宅の空部屋を活用して補助的な収入を得ることが最初の目的であったが、経営者は更なる利益追求のため、家屋の拡大や増築を行い、経営規模を拡大している。例えば、2015 年現地調査により、前衛村の農家楽には 22 室有する農家楽もあった。生活空間の観光機能は補助的なものから徐々に主要な機能に転換してきた。しかし経営規模をみると、前衛村の 117 軒の農家楽のうち、72%の農家楽は客室数が 10 室以下である。6 室以下の農家楽が 47 軒もあり、全体の 40%を占める（図 3－3)。このように農家楽の経営規模に関して、ルーラリティは基本的に小規模経営によって特徴付けられているが、一部では大規模経営も出現している。

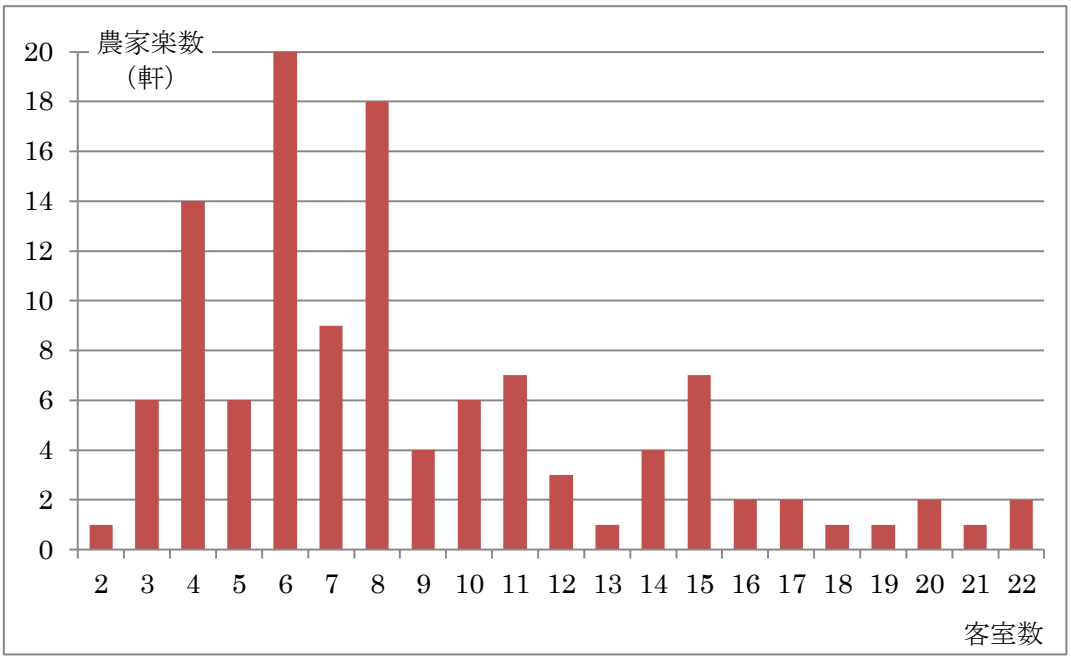


図 3－3　前衛村における農家楽の規模別軒数（2015 年）

（前衛村の統計資料と 2014 年 3 月、2015 年 3 月の現地調査により作成）

第２節　人の変化

伝統的にルーラリティの人口的な特徴では、村民の人数が少なく、密度も低い。また農村観光に参加する観光者数も少ないと認識されている。農村観光の重要な役割の一つは農村地域の過疎化を解消することである。日本においては、農村観光を契機に、都市からの移住者（I ターン、U ターン、J ターン）を増加させることが重視されている。既に欧米では、農村観光の発展に伴い、農村と都市の地価格差も影響して、都市からの観光者が農村に移住してきた。そのため農村地域の人口構造が変わってきた（張・王、2017）。しかし、中国において、社会の発展段階が欧米と異なる一方、都市住民による農村の住宅の売買が政策で厳しく制限されており、日本や欧米のような都市から農村への移住は発生していない。農村観光のために訪れてきた観光者はほぼ短期間の滞在ではあるが、この短期間の訪問も農村地域に賑わいを与えている。従来、村民自身が生活している空間が観光者にも利用されるようになった。利用者が変化した影響で、住宅は個人利用空間から公的な空間となり、外観から内装に至るまで様々な側面に変化がみられた。まず本節では村民と観光者の変化を解明する。

１．村民の変化

前衛村は干潟から埋め立てた新しい村であり、1960 年代に 15 人の村民が近くの村から移住して、村を作り始め、1970 年に村として設立された。経年的な統計資料は存在していないが、メディア報道によると、経済発展に伴う移住者の増加によって村民数も徐々に増加していった。1996 年、常住村民は 284 戸で人口は 753 人であった。1990 年代後期、村経済の停滞と都市部の急速な発展による労働力への需要増加の影響を受け、村から都市部へ出稼ぎに行く人が増加した。

農村観光の発展により、村民の U ターンが期待されていたが、前衛村の現状をみると、農家楽経営、とくに宿泊機能だけで営業する場合、必要な労働力が少なく、高齢者だけでも経営できるため、村民の U ターンが少ない。農家楽経営の農家には 6 軒だけ U ターン者がいる。他に村の管理層に 2 人の U ターン者がいる。

NN 農家楽経営者は 30 代の男性であり、2006 年以前は上海のホテルで調理の仕事をしていた。妻が前衛村の村民であり、上海市内へ出稼ぎに行き、同じホテルで店員として働いていた。二人が結婚してから、前衛村に戻って農家楽の経営を始めた。

私はコックであり、上海ではボスのために一所懸命に仕事をして、疲れも溜まり、不自由もあったりして、給料も少なかった。とくに、上海市内では不動産の価格が高騰し、一生働いても自分の家が買えないと思う。結婚して、妻が前衛村の村民なので、義理の両親の古い住宅の敷地で現在の住宅を建てた。費用は高くなかった。前衛村の農家楽が有名で、観光者がたくさん来ている。自分もコックであるので、農家楽の経営が非常に良い選択であった。上海で仕事していた時に、友達をたくさん作ったため、集客ができる。現在、1 年間に少なくとも 20、30 万元の収入を得られる。（NN 農家楽経営者 D 氏）

他には、JCZX 農家楽経営者は 20 代の女性である。元の経営者は夫の両親であり、結婚してからは夫が上海で仕事し、彼女自身が無職であったので、農家楽経営を任された。また、年を取った両親の世話、あるいは定年や健康という理由で村に戻って農家楽を経営するのは全て 50 代以上の人である。

現在、前衛村には農村観光の発展により 117 軒の農家楽が経営されているが、若年層は都市部で働く場合が多く、常住人口の 66%が 50－60 代（図 3－4）である。

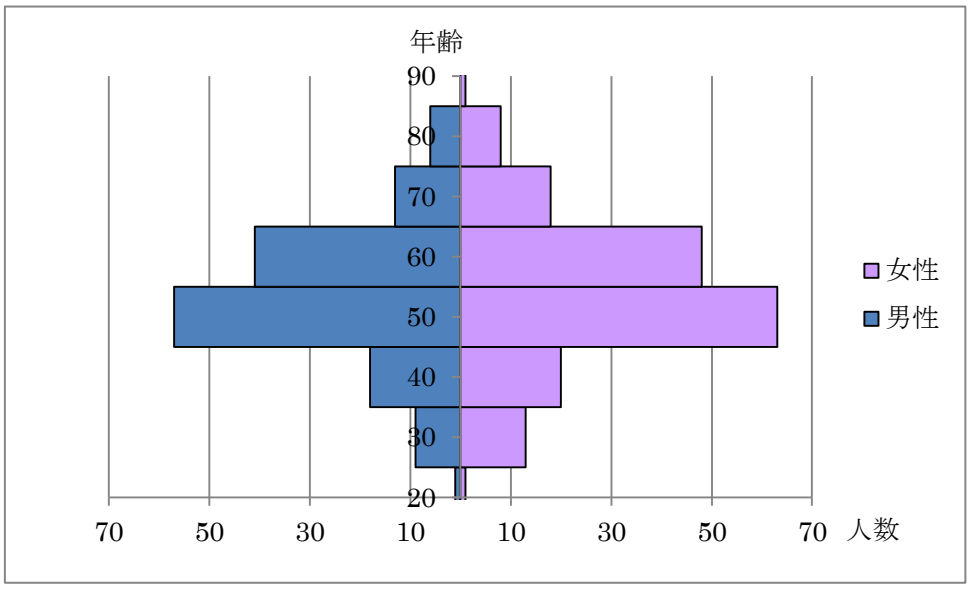


図 3－4　前衛村の常住人口ピラミッド（2015 年）

（2015 年 3 月の現地調査により作成）

一方、大都市近郊に位置する利便性があり、大都市に出稼ぎや就へ行く村民も上海市内

で働くことが多い。そのため、観光業は季節性が著しく、繁忙期の週末や祝日、連休には、市内で働く村民は休暇を取り村で農家楽を開業する者も多く存在する。このように、観光業の繁忙期に応じて、祝日・連休Uターンの傾向が顕著に現れた。2回の現地調査でも、平日では居住者のいない閉鎖された家屋が非常に多く確認されたが、週末、とくに連休には村の様子が賑やかであった。

また、大規模な農家楽には、若年層の経営者が多い傾向も確認できる。若年層が経営しているJJ農家楽（客室数：16）とHTH農家楽（客室数：16)、HJHY農家楽（客室数：21)、JCZX農家楽（客室数：22）はいずれも大規模である。

日本では農村観光の発展に伴い、観光者の滞在形態は「農家民宿」や「クラインガルテン」など一時的な滞在から、週末田舎暮らしなどの二地域居住、また、移住（U、J、Iターン)、田舎暮らしを行う「定住」(長期）まで拡大し、都市農村交流は幅広く行われている（坂井、2017)。それに対して中国では、農村地域の住宅は都市住民に販売してはいけない制限があり、農家楽経営者はほぼ村民に限られている。前衛村における117軒の農家楽のうち7軒だけが賃貸であり、外部からの経営者が経営している。Iターンによる村民の増加は限られており、ほぼないと考えられる。

このように、大都市への出稼ぎや就労により、村民が減少し、高齢化の傾向が著しくなる。一方、農村観光の発展に伴い、都市近郊に位置する利便性によって祝日にUターンすることで農家楽の経営が可能となっている。また、大規模な農家楽の経営者には若年層が多く存在しているため、ある程度、村民と村のつながりが維持されており、村民の離村化が抑制できたと考えられる。

２．観光者の増加

農村人口の流失は農村地域の過疎化に拍車をかける。都市部からの回流人口も少ないため、住民構造の単一性は以前とは変わっていない。1990年代に農村観光が始まると、前衛村には1999年に約3万人の観光者が訪れ、観光者増加率は2009年に57.8%、2010年には157.4%と著しく上昇し、観光者数が最多の62.4万人に達した（図3－5)。観光者の増加に伴い、都市において様々な職業に就く観光者が村での短期な滞在でも村民と交流し、村民の価値観に影響を与えている。

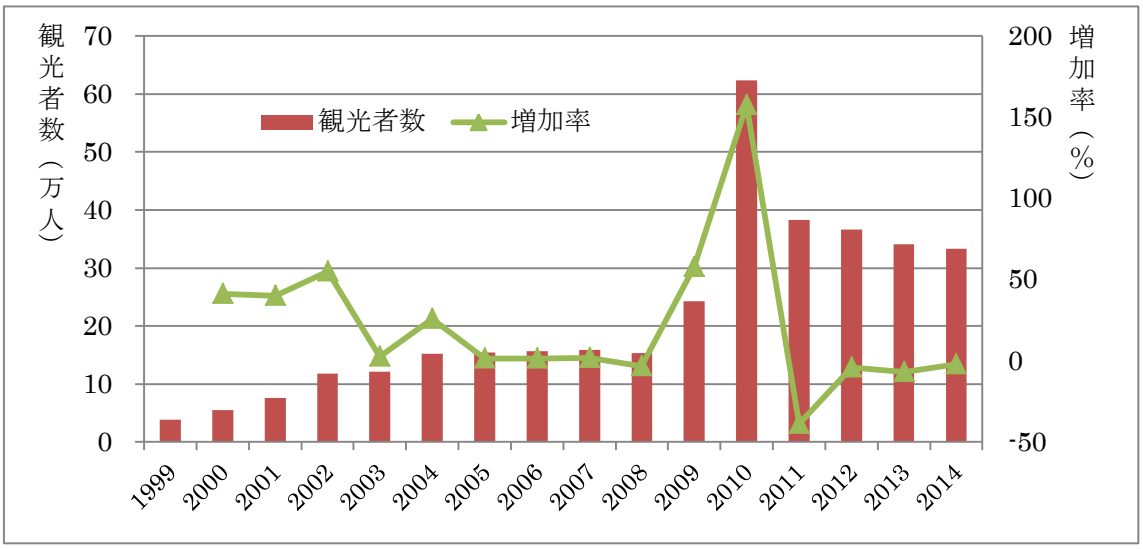


図 3－5　前衛村における観光者数の変化（1999-2014 年）

（前衛村の統計データにより作成）

一方、農村観光は最初に農業生産の付属機能として展開し、オルタナティブ・ツーリズムの一形態であり、観光者の規模が少人数であるという特徴を有している。しかし、農村観光の発展により、観光者の規模が大きくなっている。

このように、ポスト生産主義の背景で、農村の自然環境や生産物、民俗などが都市からの観光者の消費対象になり、観光者の農民生活空間への進入が生活空間に影響を与えている。

第３節　居住空間の変化

住宅と庭園は村落中で最も重要な私有空間であり、その形成には農村の社会文化と伝統的な習俗が生活空間に外在的に表現されているといえる。服部ほか（1976b）は住空間の重要性を認識して、観光開発に伴う農山村地域の変貌の一側面としての住空間の変化を考察している。前衛村では、農家楽の経営によって農家の居住空間に変化がみられた。文(2014)は中国海南省海口市近郊における農村観光による集落景観が観光への転換とスケールの拡大、多様化を認識し、具体には道路や建物、庭景観で現れてくると述べている。

１．住宅外観の変化

1980 年代までは、前衛村では多くの村民が貧しかった。家屋も小さく、低かった。ほとんどの家は一階建てで「独埭頭」と呼ばれる一字形の長屋であった。基本的な間取りは、中央の入口空間である厨房と両側にある東屋、西屋と称される寝室の左右対称形式で構成される。寝室は厨房と連接しているが、直接庭へ到着できるドアがなく窓が設置されている。厨房と寝室の間の壁にはドアが設けられ、そのドアの位置はほぼ壁の真ん中にある。中央の部屋の奥にはキッチンがあり、部屋の手前がダイニングルーム兼応接間で、両側には寝室が配置される。寝室の一部は食糧などを貯蓄する場所として使われる場合が多い。家の両側と裏には、トイレや家畜小屋など小さな補助的な簡易施設がある（図 3－6)。

1980 年代後期に入ると、改革開放政策の実施に伴い村民たちの経済力が向上し、経済的な余裕が出てきた。中国のほかの農村地域と同じく、前衛村の村民たちも「小洋楼」（西洋式住宅）（写真 3-2）という新しい住宅を建て始める。中国東南部に位置している前衛村は年間降雨量が多く、湿度が高いため、一階の部屋は湿気が強く住み心地が悪く、二階建ての鉄筋コンクリートの住宅が好まれる。

伝統的に農村地域では、家屋は経済力を表すもので面子に関わるものでもある。したがって、経済と自然、風習などの要素を取り入れて、この時期に造られた家屋はほとんど 2～3 階建ての住宅であった（図 3－7)。このように、農村自身の発展によって、農家の家屋が主に 1 階建てから 2～3 階建てへと変化した。容積率を都市部と比較すると、農村の方が非常に低くなっていることが分かる。

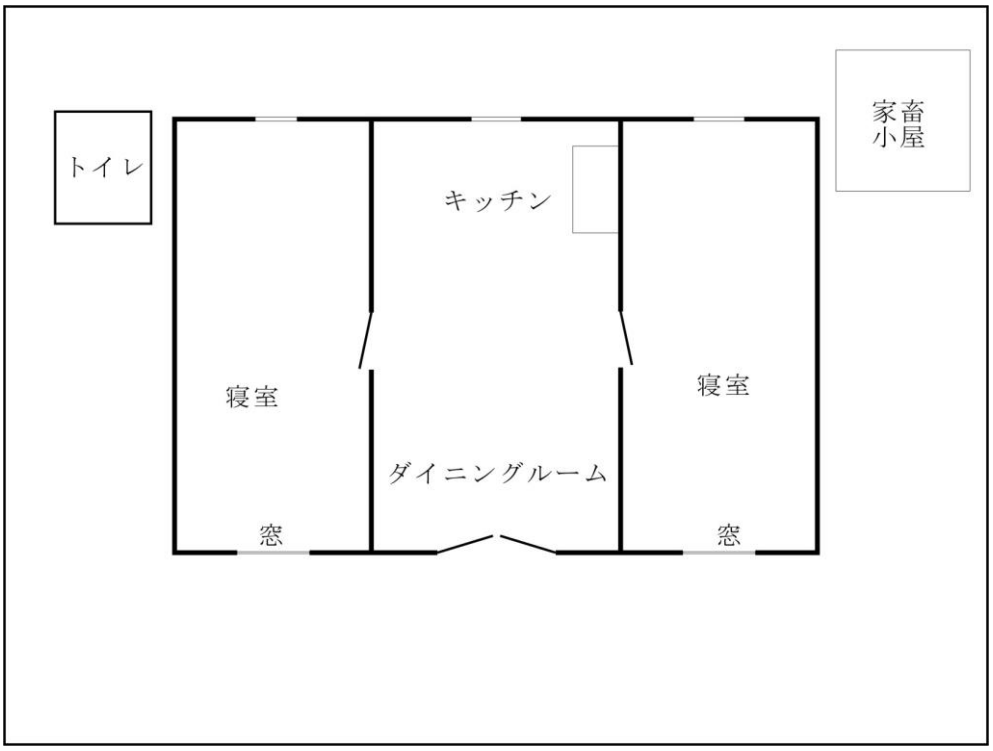


図 3－6　1980 年代の住宅「独埭頭」の間取り

（2014 年 3 月の現地調査により作成）

写真 3－2　1990 年代建築の住宅

（2014 年 3 月　筆者撮影）

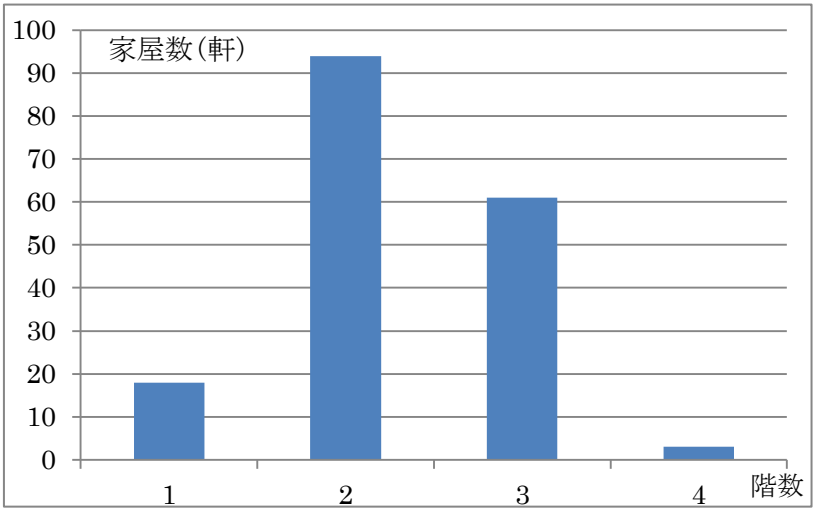


図 3－7　前衛村における家屋の階数別軒数（2015 年）

（2015 年 3 月の現地調査により作成）

これらの家屋の 1 階の湿気の強い部屋はダイニングルームや収納スペース、キッチンとして使われる。2 階以上の各階には、3～4 室があり、所有者は 1～2 室のみを利用するので、基本的には 2 室以上の空き部屋がある。このような空き部屋の存在は、今後「農家楽」の営業のために必要不可欠な条件である。1999 年に、元支部書記 X 氏をはじめ、前衛村の 12 戸の農家が家の内装を施し外観を整えて、正式的に「農家楽」を経営し始めた。

2000 年代入ってから、経済が一層向上した村民は外部との交流が多くなり、それに影響された住宅を建造する際の要求水準も高くなった。この時期、「別荘」[30]と呼ばれる西洋風の住宅が豊かな生活の象徴として中国で流行り、村民もその傾向をつかんだ。一方、農村地域の建設業者もこのニーズに応じて、別荘に関する建築技術を学んだ。その結果、前衛村には西洋風の「別荘」住宅も数多く建設された（写真 3－3）。

住宅の外観と様式は農村経済の発展に影響されている。このような別荘式住宅は前衛村の豊かさと広く認識された。とくに、住宅価格が非常に高い都市部の住民にとって魅力的なものになった。この点からみれば、前衛村は一般の農村観光地と異なる。すなわち、歴史がある伝統的農村地域において、農村観光の主要な観光対象となるものは、伝統文化が反映できる伝統建築物である。しかし、前衛村の場合、農村観光の内容は有機野菜の摘み取りという農業体験から始まり、現在では主に農村の環境を享受するものになっている。前衛村の伝統的な建築物自身は、村の歴史が短いため、伝統文化といえるようなものは成

[30] 中国では別荘と呼ばれているが、実は洋式庭付き一戸建てのものである。

写真 3－3　2000 年代以降建築の住宅

（2014 年 3 月　筆者撮影）

立しなかった。逆に、この都市的な要素と認識されていた西洋風の別荘式住宅は、現代農村の生活水準の向上を象徴するものとなる。中国の都市部、とくに上海市内において住宅の価格が高騰しているため、一般的な都市住民の家は面積が小さく、特色もない。それゆえ農村における戸建の現代住宅は都市部からの観光者の日常生活とは違う景観を呈していると理解できる。

なお、この西洋風の別荘は、当初は都市部の富裕層によって建築されたものが多かった。現代の都市部の一般住宅は地価の高騰を背景に高層ビルの集合住宅が一般的となり、現在、そのような別荘の存在は農村の特徴にもなっている。農村地域には、別荘を建築するのに必要とされる敷地が保障されており、実際に別荘を建造する費用も都市部の一般住宅よりも安価となっている。もちろん、この農家により作られた西洋風の別荘は都市部の本物の別荘とは質的に大きな差があるが、これらは一般的な観光者にとってはアメニティの充実と都市における希少性から魅力溢れる宿泊空間となる。

このように前衛村では経済の発展に伴い、村民が居住空間の利便性とアメニティを追求するため、小規模で古い住宅を新しい現代的な建築に変えていく。この現代的形式の住宅は伝統から離れているものであるが、現在都市部に集中する狭小な住居と異なる形式を有し、生活環境も良好なため、都市からの観光者にとっては一種のアトラクションとなっている。

２．間取りと内装の変化

（１）間取りの変化

一般家屋での農家楽経営は、都市部からの観光者の需要に徐々に応じられなくなり、様々な問題が生じるようになる。最も重要なのはトイレなどのアメニティである。農家楽参入以前の農家には一般的にトイレ数は各階に一つだけであり、多数の観光者が宿泊する場合、トイレ不足が問題となった。また共用のシャワーについても不満の声が上がった。これらの問題を解決するために、多くの農家楽は従来の間取りを改め、各部屋にトイレ（兼シャワー室）を設置するようになった（図 3－8a）。

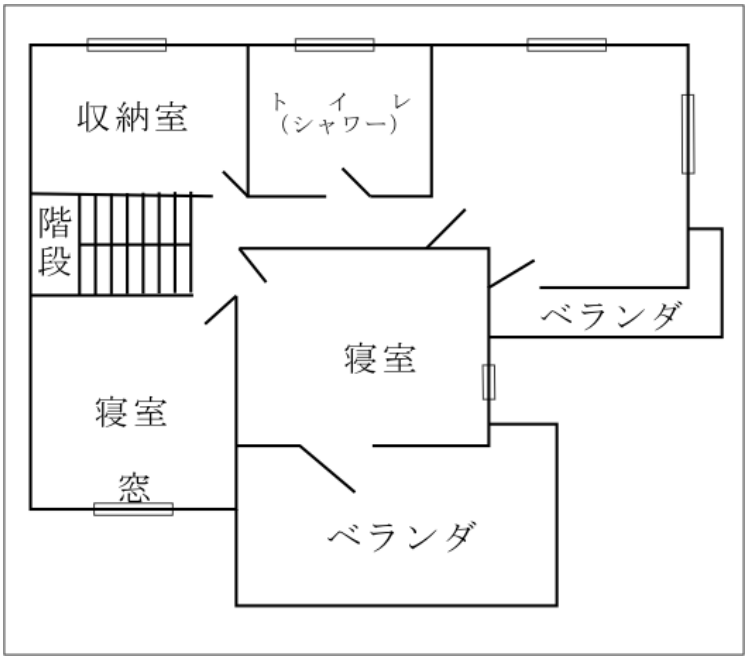


図 3－8a　改造前の間取りの一例

（2014 年 3 月の現地調査により作成）

具体的には、一階の間取りをほとんど変えず、応接間だけを観光者専用のダイニングルームに改装した。家屋所有者は観光閑散期には二階に住み、観光繁忙期には一階に住むように生活パターンを臨機応変に変える。二階では、北側の部屋は従来からの室内空間を、南側の部屋はベランダの空間を利用してスタンダードな客室に変え、全ての部屋にトイレを配置するように改造した（図 3－8b)。

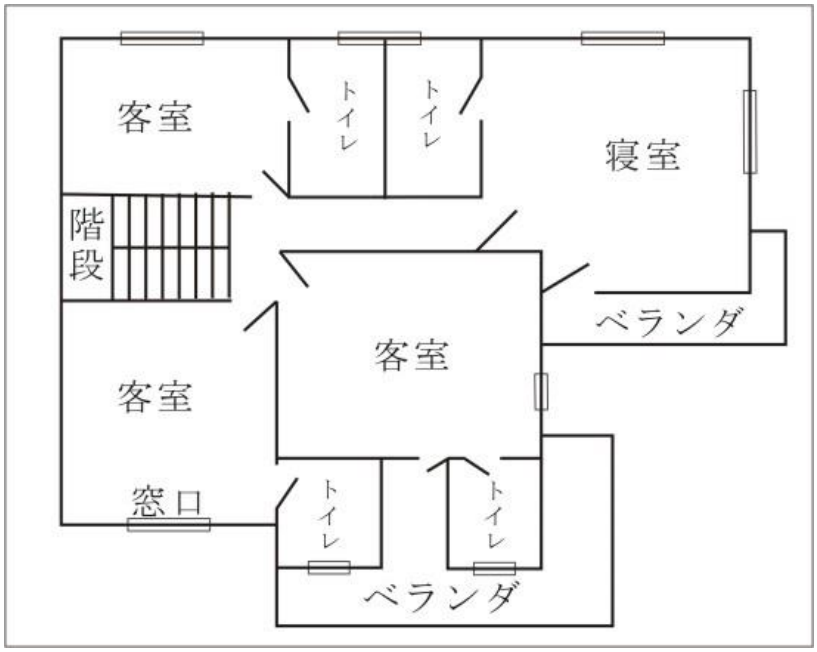


図 3－8b　改造後の間取りの一例

（2014 年 3 月の現地調査により作成）

このような改装は観光者のニーズを満すために行ったものではあるが、政府の勧誘と指導もその進展に重要な役割を果たした。農家楽の発展に伴って地域を管理するため、2003 年に崇明区旅遊局は「崇明県農家楽旅遊管理実施細則」を定め、農家楽を 3 つ星と 2 つ星、1 つ星と 3 等級に区分した。そして農家楽の宿泊アメニティや食品の衛生管理を指導するため、2009 年に「関於加快崇明区旅遊業発展的扶持奨励暫行弁法」（崇明区における観光業の発展を加速するための補助・奨励暫定方法）を実施し、3 つ星に選ばれた農家に 5 万元、2 つ星には 3 万元の奨励金を一括給付した（飲食を提供しない場合は 20%を減額する)。この農家楽の等級を確定する際の重要な基準の一つがトイレの数であり、原則、各階に 1 つ以上のトイレを設置することが義務付けられた。これによって家屋の改装は等級認定する際

に有利であり、それによって宿泊料も高く設定できるということが農家楽経営者に認識された[31]。奨励金が支給された場合、事実上、政府の支給額で家屋の改造費用を賄うことができる。

このように観光者の需要を満足させることと改装費補助事業への応募により、農家楽経営者は住宅の間取りを改装し、住宅のルーラリティ低下に拍車をかけた。しかし、この変化は現代生活の利便性を満たし、従来の農村住宅におけるネガティブな要素を解消したため、農村観光においてはポジティブな効果をもたらした。

（２）家屋の内装と設備変化

①応接間

一般的に、中国では農家の来客が少ないため、応接間を設けない家屋は少なくない。仮に応接間を設置していても簡素なものが多い。しかし、農家楽経営を始めると、とくに大規模な農家楽を経営する場合、利用する観光者が多いため応接間の必要性が高くなる。応接間の設置については都市部のホテルを真似てフロントを整備する農家楽が多い（写真 3－4)。設備は高級ではないが、このような都市的な要素が流入してきた。フロントの周りには経営に関する各種の経営許可証明と税務登録証明、特殊経営許可などが壁に飾られて経営の合法性を来客に示す。このフロントの設置は著しい観光化の例として住宅、つまり生活空間に現れたともいえよう。

②客室

農家楽経営の初期には、農家が所有しているものを活用して観光客を受け入れた。農村観光の発展に伴って競争が激しくなり、観光者により良い客室を提供するため、経営者は客室の内装に力を入れるようになる。一方、地方政府管理部門も農家楽の設備について規定を定めた。農家楽は相対的に新しいものであり、関連の設備設置について前例がなかったため、都市部のホテルとレストランに関する規則に基づいて、農家楽経営の管理方法が提案された。「崇明区農家楽旅遊管理実施細則」では、農家楽の客室はきれいに装飾を施し、テレビやベッド、サイド・テーブル、ハンガー、エアコンを設置することが規定されている。このように、市場競争と政府指導の相乗効果によって、客室の内装はほぼ都市部のホ

---

[31] 「崇明県農家楽旅遊管理実施細則」によると、一泊の宿泊料は 3 つ星の農家楽が 80 元／部屋、2 つ星が 70 元／部屋、1 つ星が 60 元／部屋と規定されている。エアコンが設置されている場合、20 元／部屋を上乗せすることができる。

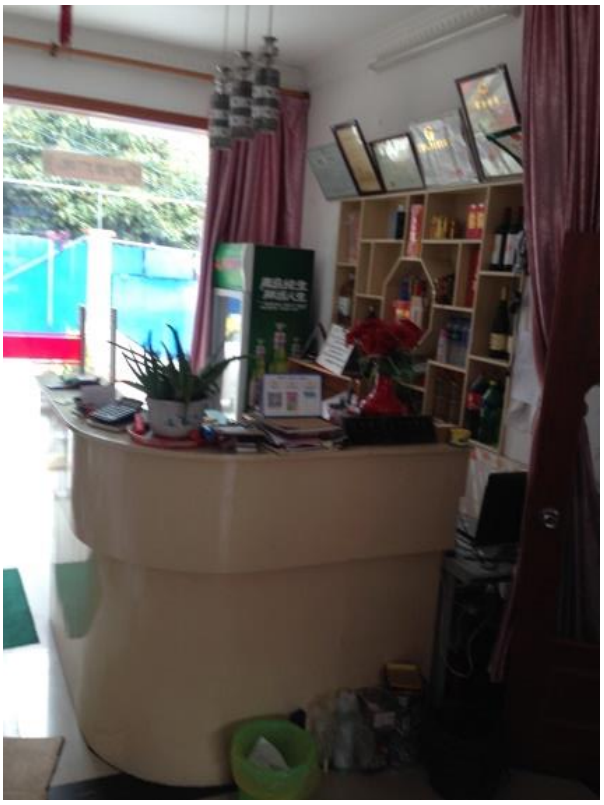


写真 3－4　農家楽のフロント

（2015 年 3 月　筆者撮影）

テルと同じように整備されるようになった（写真 3-5）。

③トイレ

前述した間取りの変化のうちに、重要なポイントはトイレの設置である。トイレの内装にも重要な変化が現れた（写真 3-6）。トイレに関して「崇明区農家楽旅遊管理実施細則」は以下のように規定している。

ⅰ．トイレの床には滑り止めのタイルを使用し、壁に高さ 2m以上のタイルを張り付けて清潔に保つ。

ⅱ．貯水タンクを設置し、24 時間常に、飲用水と生活用水を確保する。

ⅲ．給湯器、水道、便器、浴槽など設備の安全かつ有効な利用を確保する。

ⅳ．化粧用鏡や洗面台、タオル、石鹸、歯ブラシ、歯磨き粉、シャンプー、ボディソープなどを用意する。

ⅴ．トイレの床、壁、便座、洗面台、浴槽などは毎日、洗剤で清掃して消毒を施す。

写真 3－5　農家楽の客室

（2015 年 3 月　筆者撮影）

写真 3－6　農家楽のトイレ兼浴室

（2015 年 3 月　筆者撮影）

しかし、現地調査では、ⅱとⅳの実施が確認できた農家楽は少なかった。聞き取りによると、理由としては、村には水道が完備されており、用水が確保できていることが挙げられる。そしてタオルなどを提供しても、品質があまり良くなく観光者が使わないケースも多いため、結局、提供しなかったなどの問題が挙げられた。

④キッチン

食事を提供している農家楽では、キッチンの衛生状況も次のように管理されている。

ⅰ．壁に高さ1.5m以上のタイルを張り付け、専用の茶碗や箸、食器の消毒設備、冷蔵庫を設置する。

ⅱ．食材は生物と加熱済の物に分けて保存し、調理する。

ⅲ．キッチンを清潔に保ち、換気をよく行う。

などの規定がある。

これらの規定により、キッチンの衛生状況が改善され、機能分化によってキッチンの拡大と区分が行われた。ただし、設備として伝統的なかまどと現代的なガスコロンが併存する場合が多い。生活水準の向上に伴い、ガスコロンが清潔で便利であるなどの利点が評価され、農村にも普及している（写真3－7）。

写真3－7　農家楽のキッチン洗い場とガスコロン

（2015年3月　筆者撮影）

ガスコロンの利便性に対して、かまどは農村の雰囲気を醸し出すほか、特定の郷土料理の調理に適していることもあり廃棄されていない（写真 3－8）。

写真 3－8　農家楽のキッチンのかまど

（2015 年 3 月　筆者撮影）

農村観光の重要な内容は「農家に住み、農家の郷土料理を食べ、農村の景色を享受すること」である。その中でも農家の郷土料理は原材料が当地で生産された新鮮なものであるため、観光者には味が良いと評価されている。事実として、前衛村には現在、農業を営んでいる村民がおらず、農家楽に提供している食材も前衛村で収穫されたものではない。このような事例はスウェーデンと日本にもみられる（Tellstrom et al、2005；藤永、2011）。しかし、観光者にとって重要なのは家屋の雰囲気であり、その中では料理の原材料も農村で生産されたものと錯覚する。また調理するのに長い時間が必要とされるスープや肉料理などは、従来のかまどで調理すると、味が格別だと評価される。そのゆえ、農家楽経営によって内装と施設において都市的要素が大幅に進入した中でも、郷土料理の雰囲気を醸し出せるかまどが存在できた。

３．居住習慣の変化

中国とくに伝統的な四合院などの住宅には、居住秩序が厳しく定められている。通常、南にある日当たりの良い母屋（正屋）は年長者、両側の脇屋は下の世代が住む。前衛村は歴史が短く、四合院のような伝統住宅が存在しないため、身分によって部屋を使い分けることはないが、生活の便宜上、一般的に次の居住秩序を守っている。前述したように、前衛村の家屋は 2、3 階の「小洋楼」（西洋風一戸建て）が多い。また、降水量が多い地域ということもあり、湿気を回避できる二階南向きの部屋が最も住み心地が良い。農家楽経営以前、家屋の持ち主がこの二階南向きの部屋に、年長者は階段を避けて出入りしやすい一階南向きの部屋に住むことが多かった。農家楽経営が始まってから、ほとんどの農家は南向きで日当たりの良い部屋を観光者に提供して客室として利用する。持ち主は日当たりの悪い北向きの部屋に住み替え、居住秩序が観光者最優先に変化してきた。

４．庭の変化

客室が多いほど、多くの観光者を受け入れることが可能であり、現金収入が増えるため、農家楽経営者の間では客室を増築する意欲が高まった。さらに農家楽経営により収入が増加すれば、家屋の拡張に必要な資金も準備できる。2010 年までに、前衛村には住宅の増築に関する制約はなく、自分の庭を利用して自由に増築することができた。

前衛村の農家は広い宅地を有しており、宅地の北側に母屋、南側に菜園、母屋の側に家畜小屋を配置するのが一般的であった。菜園では、自家用の野菜を栽培していた（図 3－9a）。しかし観光者の増加に伴って、農家はより多くの客室を確保するため、自家用菜園を客室と食堂の増築に転用するケースが増えた（図 3－9b）。こうした増築によって、農家楽の収容人数は 10 人程度から 20 人以上に、食堂の収容人数も 10 人から 50 人ないし 100 人まで増加した。その他、もともと土に覆われていた庭はコンクリートの地面に敷き替えられ、観光者用の駐車場が設けられるケースも多い。

このような増築ができた理由は、経済状況と制度整備の双方にあると考えられる。まず、農家楽経営は、主に経済的利益を追求するためである。農家楽経営の初期段階には、客室は自宅の空部屋を利用するため、数は限られていた。新規開業によって農家楽が増えたとしても、繁忙期の一日何千人の観光者に応対することはできない。とくに、2004 年 7 月の胡錦濤総書記の視察後の国慶節ゴールデン・ウィーク期間中には、観光者が前年同時期の何倍も増加した。聞き取り調査によると、当時、客室はすべて満室となり、客室ではない

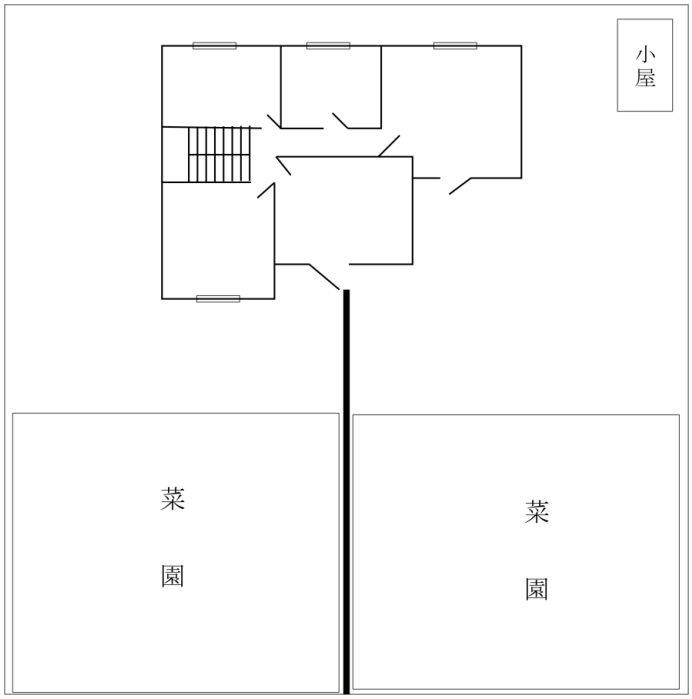


図 3－9a　増築前の住宅敷地の一例

（2015 年 3 月の現地調査より作成）

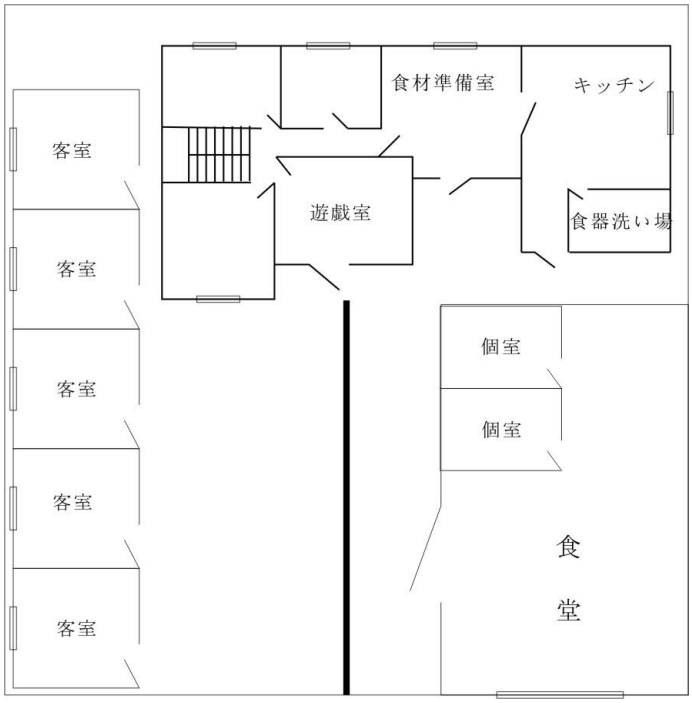


図 3－9b　増築後の住宅敷地の一例

（2015 年 3 月の現地調査より作成）

部屋の床に布団を敷いただけの簡易な宿泊を提供することもあり、農家楽の供給不足問題が顕在化してきた。この背景のもと、新規開業の農家楽の他に、もともとの経営者も敷地内で増築工事を行った。一方、観光の季節性は非常に激しく、繁忙期は限られた祝日と連休のみであることから、客室数の少ない農家楽の収入は出稼ぎよりも少なかった。そのため村民の農家楽経営意欲もさほど高くはなかった。また経営者は訪れてきた観光者をただ受入るだけに止まり、村民自身が農家楽を宣伝して利用者を誘致する意欲もなかった。多くの観光者を同時に対応できる農家楽だけが収益の増加を達成できる状況が、家屋の増築に拍車をかけた。

そして農村地域に対する土地利用制度も変化の要因として挙げられる。現在、敷地にある菜園は農地に計上されるようになり、勝手に家屋の増築に転用することは厳しく禁止されているが、2010 年までは農村における土地利用規則の適応は厳格ではなかった。とくに 2004～10 年の間、地方政府は農家楽の発展を優先していたため、農地の転用行為は見逃された。しかし、農家楽経営者による集客量の拡大を目的とした場当たり的な増築行為が横行し、村の住宅景観の統一性が取れなくなった。そこで 2010 年から、区政府は「住宅の改築や増築は事前に申請し、許可を得てからしかできない」という条例を作り出し、それを厳しく実行した結果、住宅を勝手に改築できなくなった。2015 年の現地調査では、2014 年に 3 軒の農家楽が無許可で違法改築を行い、地方政府が強制的に増築の部分を取り壊したことが分かった。こうした増築によって従来農家の庭でみられた自然風景の減少が招かれた。

第４節　集落景観の変化

１．建築景観の商業化

農村生活空間は村民たちの生活と休暇の場であり、伝統的に商業が発達することはなかった。一方、農村は閉鎖的な空間であり、村民が互いをよく知っている。それゆえ都市の商業宣伝に重要である看板が、かつての農村集落には存在しなかった。

前衛村において、1999 年に農家楽が始まった当時、村民委員会が全ての農家楽を集中管理し、観光者も村から宿泊先を指定されていた。こうしたシステムの下、農家楽経営者の間には競争がなく、それゆえ経営者個人には宣伝の意識もなく、看板を設置することはなかった。

2007 年に農家楽の個人経営が急増してから、競争が徐々に激しくなり、一部の農家楽経営者が観光者に積極的にアピールするために看板を設置した。最初に設置されたものは非常に簡易なものであり、紙で作った農家楽の名称が書かれたポスターを道路向きの窓口に貼っただけであった。

また、前衛村の農家楽経営が発達して観光者が急増してから、都市部にある広告会社が商機を掴み、前衛村の大規模な農家楽経営者に交渉を開始した。その結果結ばれた契約は農家楽が一定の酒類または飲料水を購入すれば、無料で看板を作って提供するというものだった。これによって前衛村には約 20 軒の農家楽が看板を設置し、2 年間ごとに新しい看板を更新することが可能となった。設置された看板は都市部で流行しているものと全く同じで、建築景観の商業化と都市化が強く反映されている（写真 3－9)。

２．道路景観の変化

道路は生活空間の重要な構成部分であり、その景観も地域の発展に伴って変化しつつある。前衛村が設立された当初、村落の南を流れる河川に沿った未舗装の道路が整備され、道路の両側にはメタセコイアが街路樹として植えられた（下は自然に草が生えていた)。このように道路の景観は「河川―メタセコイア―道路」と構成されていた（写真 3－10)。街路樹としてのメタセコイアは、降雨量の多い中国南方地域では成長しやすく、よくみられる。前衛村においては干潟から埋め立てられた当初、土壌はアルカリ性が強く、他の樹木の栽培には適しなかったため、その土壌への適正と景観の良さに配慮してメタセコイアが街路樹として利用された。また街路樹の機能を果たすほかに、河岸の侵食や土壌の流失を

写真 3－9　現代的な農家楽の看板

（2015 年 3 月　筆者撮影）

写真 3－10　観光化以前の道路の景観

（2015 年 3 月　筆者撮影）

防ぐ機能、そして生活用の薪を提供する機能も重要視されていた。1980 年代に入ると、村内の工業発展のために道路は舗装されたが、道路両側の街路樹景観は変わらなかった。この路面の変化は地域発展の需要に応じてできたものと理解できる。

農村観光が発達してから、修景のために都市部の街路樹景観が模倣された。メタセコイアは伐採され、上海市内でよく見られる街路樹に植え替えられた。その中、一番多いのは上海市内の街路樹の 40%を占めるクスノキであり（楊・厳、2013)、他に春に花が観賞できるハクモクレン（上海の市の花）も植えられた。クスノキの下には低木も植えられ、立体的な植物景観の階層区分ができた。このように、村の管理層は観光のため、都市部にある自然景観を借用して農村部に応用した。しかし、この景観の美しさは、農村からのまなざしから考える結果である。結局、道路景観は「川―メタセコイア―クスノキ（下に低木）道路―クスノキ（下に低木）―住宅」に変化し、従来重要視してきた街路樹の環境適応能力と生活機能（薪の提供）より、景観の美化機能が優先されるようになった。

一方、自然景観が変化した他に、人工的で都市的な要素も流入した。観光者の夜間移動の安全性と利便性を考慮して、街路灯が設置された。これには前衛村の生態村の名称に応じて、ソーラーランプが利用されている。灯柱には観光宣伝の看板が掛けられ、下には衛生管理のためのごみ箱も設置された（写真 3－11)。

この 2 枚の写真（写真 3-10、11）は同じ道路で、前衛村と隣の村の堺から双方に撮ったものである。写真 3－9 は隣の村の道路景観で、前衛村に観光化以前の景観と同じものである。写真 3－10 は前衛村現在の道路景観である。

伝統的な農村である前衛村には道路が少なく、村民たちも村の地理を熟知しているため、農村の道路には名称がなく、道路標識もなかった。1999 年に農村観光展開期に突入し、来訪者が増加する中で村の観光施設が多く設置されたことを背景に、来訪者の各施設へのアクセスを向上させるために、道路に名称を付け、さらに道路や観光施設の標識が設置されるようになった（写真 3－12)。

このように、ルーラリティは道路景観の要素において、生活空間の観光化の発達に伴う変化がみられた。道路は舗装され、道路の自然景観に都市的な要素が導入されたことで、新しい農村景観が現れている。人工物としては、都市的な要素である街路照明やゴミ箱、道路標識も設置された。

写真 3－11　現在の道路景観

（2015 年 3 月　筆者撮影）

写真 3－12　前衛村の路標

（2015 年 3 月　筆者撮影）

３．公共空間の再構築

伝統的には、農村の公共生活空間は寺や祠堂、井戸周辺などであり、これらは村民たちが集まって交流する場である（張、2012)。前衛村は新しい村であるため、このような公共空間が存在しておらず、実質的な公共空間は行政機能を果たす村民委員会の建物、穀物を脱穀する場所、レジャー広場の村民生産・生活用空間であった。

1999 年に農家楽経営が始まってから、管理上の便宜を図って、村民委員会の役所が住宅地から外れた村の入り口付近に新たに設置された。元の建築物は宿泊施設として利用された。同時に、観光者の増加により、新しい村民委員会の近隣に観光サービスセンターと駐車場が設置された。

農業生産、とくに穀物生産の停滞に伴い、伝統的な穀物を脱穀する場所の利用がなくなった。その敷地は 2004 年に外部の投資者に賃貸され、香林麗舎という宿泊施設が設置された。

経済が向上し、村民の日常生活を豊かにするため 1993 年に造られた村民用レジャー広場は、1999 年には農村観光の発展により、観光者のために提供されるようになった。この敷地には上海の旅行会社によって、2011 年に野外研修基地、翌 2012 年にテニス場という観光者専用の施設が整備された。

このように伝統的な村民の生産・生活用の公共空間が観光者向けの公共空間に拡大したほかに、村民が利用していた公共空間も農村観光の発展に伴って観光施設が集積する観光空間に変化した。

第５節　まとめ

農村における生活空間の観光化は、生産空間における観光者の進入とその増加による影響を受けて次第に展開されてきた。もともと観光と関係がなかった一部の農家が観光者を住宅に受け入れ、それが観光者向けの宿泊施設の機能を持つようになった。伝統的にルーラリティは住宅建築において、古い・小さい・伝統的などの特徴をつけられてきたが、経済が向上してからの農村住宅は新しいものへと変化してきた。そして、観光者のために、農家が客室の設置、個室トイレの改造、内装のホテル化を行い、観光機能が増大してきた。一方、生活空間の観光化に伴い、農家景観およびそれに関連している道路景観にも新たな特徴が現れた。生活空間におけるルーラリティの変化について、以下の諸点が明らかになった（図３－10）。

図３－10　生活空間におけるルーラリティの変化

まず、住宅の外観要素において、農村発展によって新規のルーラリティが付与された。従来の研究では、農村建築におけるルーラリティは伝統的・古い・小規模であることが特徴とされてきた。この伝統的な建築は地域の自然環境に制限されていながら、自然とも調和している。しかも、経済条件の制限があり、一般的には地元の原材料を利用している。経済発展と新しい建築原材料の発達に影響され、農村地域に自然環境の制限を超えて、現代的な建築を建設できるようになってきた。一方、現代建築は快適で住みやすいだけでなく、農村住民が経済向上した「脱貧致富」（貧困から脱離し、富裕になる）を象徴する文化的な側面もあり、農村建築の現代化が進んできた（王、2017）。

農村生活空間の重要な構成要素である家屋は、建設当初は経済状況や建築材料の制限などによって、住民の生活を充足させる 1 階建ての簡易な建築物であった。しかし 1980 年代末から経済水準の上昇と建築材料の多様化、技術の発達などに起因して、住民の生活空間を改善する需要が高まった結果、新たに 2〜3 階建ての住居が建設されるようになった。この変化は経済発展と住民自身の生活需要によるもので、農村観光の影響を受けていない。逆に、この居住面積の拡大による空部屋の出現によって、その後の農家楽経営などの農村観光に必要な条件が備わった。また、住宅の外観は西洋風の「別荘」式に変化し、現代農家、とくに中国では「社会主義新農村建設」の政策の成功の象徴となっている。また一部の観光客もこのような農村環境で立派な別荘に泊まれることこそ農村観光の新しい形態であると認識し満足している。この住宅は都市部の集合住宅と異なり、ルーラリティの新しい表現となっており、新規のルーラリティと考えられる。

また、住宅の設備や内装において、ルーラリティの低下が著しくなっている。伝統的に居住機能しか備わっていなかった農家に、観光機能が誕生することになったのは 1999 年からの前衛村観光発展の展開期以降のことである。農家楽経営の初期段階には、観光者のための客室の設置は、農家の空部屋しか活用されなかったが、農村観光の進展により、観光者の要求と政策の規制、政府の指導により、部屋の内装や間取り、設備がホテル並みに整備された。しかし、これらの要素において、都市部のポジティブな特徴はルーラリティの低下に繋がるものではあるものの、農村観光の発展にポジティブな影響を与えるものでもある。一方、かまどのような農村的特徴を持つ設備は農村の雰囲気が保ち、ある程度ルーラリティを維持している。

次に、住宅の敷地における自然風景が減少することにより、ルーラリティが低下している。より多くの観光者を受け入れるため、一部の経営者が菜園だった中庭を利用して新し

い建物を増築し、経営規模を拡大する動きも現れた。このように、増築により、庭の自然風景が消失することで生じるルーラリティの低下が農村観光にネガティブな影響を与えている。

最後、集落景観においても、ルーラリティの低下がみられる。農家楽経営により、家屋に広告看板を立てたり、観光客の利便性のために路標や街灯、ごみ箱などが設置されたことで、ルーラリティが低下している。しかし、これらの変化も農村観光の発展にポジティブな影響を与えている。一方、農村住民が綺麗だと感じる都市部の街路樹も農村に導入され、本来の街路樹と共に新たな自然風景を創り出し、新規のルーラリティとなっている。

住民の生活空間に観光空間が侵入した要因としては、農村発展による住民収入の増加という経済的要因と、観光業の発達による観光者の増加という需要側の要因、村民自身による経済的利益の追求という供給側の要因、政府からの支援あるいは制限の政策要因などが挙げられる。

第４章　社会関係にみるルーラリティ再編

農村観光が発展してきた重要な背景として、19 世紀後期における都市化の進展の影響が挙げられる。各地で環境汚染や交通渋滞、人間関係が冷淡になるなど「都市病」といわれた問題が深刻し、都市住民の生活ストレスが増大した。そのため、都市からの観光者は農を自然の美しさや健康・安全な生活環境のほか、情愛に満ちた暮らしなどを含んでいる伝統的な価値観が息づいている場所として認識している（松井、2013）。

先行研究ではルーラリティは都市が持たない特徴として強調されている。それは都市住民からみれば「故郷」、「家族・親族」、「自然」、「実体験」であり、その残存が各農村の地域性を特徴づける（篠原、2013）。農村観光においては、農村の景観のほか、農村住民の間で保たれている血縁・地縁に基づいた親密な人間関係も観光魅力のある重要な資源であると理解できる。またルーラリティは農村景観と農村文化により構成され、後者は具体的に農業生産文化とライフスタイル、民風民俗を指している（尤ほか、2012）。自然・季節に基づいて農業を営むライフスタイルは、時間や仕事に忙殺される生活を送る都市住民にとっては牧歌的な魅力がある。

一方、農村地域は従来農業生産を中心としており、商業が発達していなかったため、現代的なビジネスの管理制度や知識を持つ管理者は存在していなかった。農村観光が発展するにつれて、中国の多くの農村地域では、村民委員会と村民が主体となって観光発展の管理を行うようになった（緒方、2009）。この管理は都市部の現代的なプロフェッショナルな管理に対して、アマチュア的な性格を持っている。具体的な解釈はないが、Lane（1994）もルーラリティにはマネジメントの要素について、アマチュアの特徴を持つと指摘している。

このように、農村地域で展開している人間関係、生活スタイル、経営管理など社会関係もルーラリティの重要な構成要素として捉えることができる。これらの要素の特徴は職業と収入という経済基盤に規定されている。農村観光の発展に伴い、村民の職業と収入構成は、従来の農業生産を中心とするパターンから観光業を中心とするパターンへ転換してきた。それに伴って村民の社会関係も変化しつつある。

以上の理由から、本章では社会関係に着目する。まず前衛村の職業と収入構成の変化を分析し、次に人間関係と生活習慣、村の管理などの要素の変化に基づいて、ルーラリティの再編について考察する。

第１節　職業と収入構成の変化

都市への出稼ぎや農村における工場建設、観光開発など非農業的産業の拡大によって、農民の就業構造にも変化が起こった。農村観光が提唱された一つの重要な理由は農村地域の経済向上であるため、このような経済構造の変化は当然注目すべき研究課題である。

呉羽（1999）はスキー観光地における民宿の成立は農村側にとって、農閑期である冬季の重要な現金収入源になると述べている。高（2004）は理論的には農村観光によって農民の収入は増加するが、農村観光に参入する農民、企業、集落、地方政府間での利益分配は複雑であり、地域によって農民の収入格差も大きいと論じている。農村観光は観光産業従事者数や農民の収入を増加させ、結果的に農民と都市住民との収入格差を縮めたが、同時に農民間の収入格差の増大をもたらしたという指摘もある（森下・宮崎、2008；杜ほか、2011）。何（2006）は中国四川省成都市における農家楽開発の調査に基づいて、農村観光の発展が農村地域に経済利益や環境改善をもたらす効果だけでなく、収益減少などの問題もあると論じる。杜（2006）は中国雲南省麗江市では、土地を売却した農民は新しい仕事を探さなければならないという問題も生じていると指摘している。池ほか（2013）は中国雲南省拉市海の騎馬観光を考察し、騎馬観光の展開は農家所得の増加に大きく貢献し、これまで現金収入確保のために不可欠であった建築労働・出稼ぎの必要性がなくなったという農村観光の意義も指摘している。

これらの先行研究が示すように農村観光の発展は村民の農業離脱や観光業への参入に拍車をかける。これを踏まえれば、農村観光の発展に伴う収入の増減だけでなく、収入構成の変化についての考察も重要であると考えられる。

１．職業構成

伝統的な農村において、農業経営は極めて重要な地位を占める。前衛村は農業のために設立された村であり、設立当初は村民の大半が農業や漁業に従事していた。1980 年以前の中国の農業体系は前述の人民公社によって管理されており、生産隊を基本単位として土地を集団で所有し、生産・分配の意思を決定していた。村民たちは生産隊の指示に従い、集団的に農業に従事し、労働で獲得した点数によって食糧が配分されていた。このように村民が共同で農業に従事するため、その当時は収入格差もほぼなかった。前衛村は干潟の埋め立て地という地理的条件から土壌が劣悪であり、1970 年代には年間 1 人当たりの平均収

入は 150 元（約 900 円）程と非常に少なかった。

しかし、改革開放以降、人民公社制度が廃止された。代わりに生産請負制が導入され、各農家が自ら生産・分配および経営を管理する形態へと変化した。これと同時期に、前衛村には工場が建設され、村民の 8 割が工業生産に従事するようになった。とくに農閑期には農業と工業を兼業する村民が多かった。また都市部の発展により、労働力需要の拡大および居住地域選択の自由化に伴って、出稼ぎ労働を行う村民も増加した。1980 年代の開発初期に設置された工業は規模が極めて小さかったため、村民は工業と農業を両立することができた。しかし、工業規模の拡大につれ、工業と農業の兼業が難しくなった。工業による収入が高いものの、この段階では村民にとっては副次的な職業であり、農業生産が優先されていた。1985 年の農繁期には、工場に大きな発注が入ったが農産物の収穫期と重なったため、村民は工業生産に参加する時間を確保できなかった。村民委員会は工業生産を維持するため、土地を村で集中管理することにした。このように、農業より収益性が高い工業っが発展したことで、工業と出稼ぎによる収入が村民収入のメインとなった。

しかし、農村観光が始まると、観光産業に携わる就業が多くなった。全ての観光施設は村委員会と外部投資者によって開発されたため、村民が参入できるのは観光施設での勤務または自宅での農家楽経営である。現在、前衛村における観光産業従事者は、農家楽経営者が多い。そこで農家楽経営の有無および就業先（の村内か村外か）という 2 つの基準から現地調査を行い、その結果から 2015 年現在前衛村の村民職業構成を分析する。

図 4－１から分かるように、前衛村における村民の職業構成は、農家楽を専業する村民が 123 人（32%）と最も多かった。農家楽を兼業する村民の勤務先をみると、村内に勤務する村民が 65 人（17%）で、村外に勤務する村民が 35 人（9%）となっている。農家楽経営に必要な労働力は少なく、とくに小規模経営の場合は農業生産を妨げず、日常生活にも支障をきたさずに兼業ができる。仮に村外で勤務しても、休日が観光の繁忙期に当たるため、休日だけ観光者の応対を行うように兼業することもできる。他には農家楽を経営しておらず、前衛村内で勤務している村民は 37 人（10%）がいる。前述の通り前衛村においては 1985 年から土地が集中管理されており、農村観光の発展に伴って、現在までに土地はほぼ観光開発に利用されている。そのため村の 60 歳以下の村民が勤務を希望する場合、村民委員会が仕事を配分しており、給料は村民委員会の決定により上海市最低賃金基準で支給されている。このように、前衛村では観光業に携わる村民の割合は全体の 68%に達している。

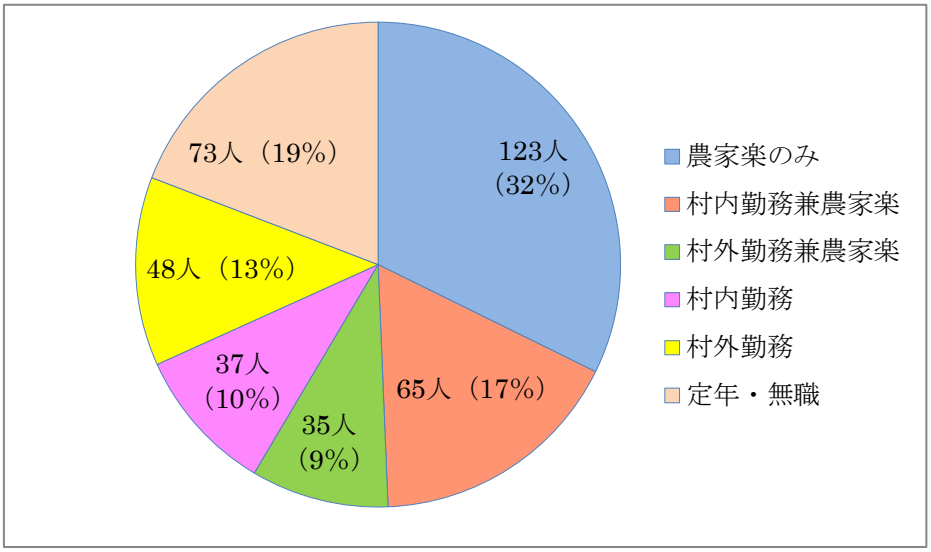


図 4－1　前衛村における村民の勤務状況構成（2015 年）

（2015 年 3 月の現地調査により）

その他に、定年あるいは無職の村民が 73 人（19%）いるが、これらはほぼ 60 歳以上の村民である。中には家族が農家楽を経営しており、時々手伝う村民もいる。また村に在住しているが勤務を村外で行う村民は 48 人（13%）いる。

２．家庭の収入構成

先述した職業構成に基づき、前衛村における農家の収入状況を、農家楽経営の参入および専業者の有無を考慮して、4 種に分類した。その結果を表 4－1 に示す。

村民が村から分配された仕事に従事する場合、村の幹部を除き、前述の通り村民全員が上海市の最低賃金（2016 年現在の月給は 2,190 元（約 34,000 円）が支給される。加えて土地利用補償金として、年間一人当たり 3,500 元（約 54,000 円）が支給される。以下では前衛村の農家収入を類型別に考察する。

A1 型は大規模な農家楽を積極的に経営している農家である。観光産業が始まった初期段階から経営してきた者が多く、前衛村における農家楽の発展の核心を担っており、経営期間が長く、経験豊富な者で構成される。また世帯の年収は 10 万元以上に及ぶ。さらに、これらの農家楽は飲食も提供している。なお自分の店舗で客室が足りない場合、他の農家楽に宿泊客を紹介し、食事のみを提供している。

表 4－1　前衛村における農家の農家楽経営類型と収入状況（2015 年）

類型			収入状況	戸数	割合（%）
A	家族全員農家楽経営	A1	農家楽経営	27	17
		A2	農家楽経営　＜　補償金	8	5
B	農家楽専業経営者いる	B1	農家楽経営　＞　その他	12	8
		B2	農家楽経営　＜　その他	18	11
C	農家楽専業経営者いない	C1	農家楽経営　＞　その他	7	5
		C2	農家楽経営　＜　その他	30	19
D	農家楽経営しない	D1	村内勤務	13	8
		D2	村外勤務	15	10
		D3	年金・補償金	27	17
合　計				157	100

（2015 年 3 月の現地調査より作成）

A2 型のほとんどの経営者は高齢者で、他の仕事に参入することが難しい。設備投資に余分な投資を行わず、家屋を簡単に装飾して農家楽を営む。経営経験が乏しく、規模も 5 室以下の小規模な農家楽であるため、観光最盛期の 2010 年前後では収入が確保されたが、停滞期には農家楽経営による収入は零細となっている。

B１型は家族全員が宿泊産業に従事しているわけではないが、経営者が専業で農家楽に参入しており、積極的に経営に取り組むことによって、農家楽経営の収入が主な収入源となっている。

B2 型は A2 型と似ており、小規模で経営経験もないため、積極的なマーケティングは行っていない。村からの土地補助金と年金などで生活している。農家楽は大規模な農家楽からの紹介があった場合に宿泊を提供しているが、それ以外では閉業している。そのため収入も非常に少ない。

C1 型は専業経営者がいないが、経営規模が大きく集客能力もある。平日には別の仕事（主に村での仕事）をしている。少人数の観光者には対応せず、大規模団体のみを受け入れしているため、兼業ではあるが農家楽経営による収入が多い。

C2 型に属する農家は前衛村で最も多く、他の仕事に従事しながら、農家楽も兼業してい

る。大多数の農家楽の経営規模は零細で、積極的な経営は行わない。主な収入源は村内での仕事あるいは出稼ぎによる給料であり、農家楽による収入は補助的なものに止まっている。

最後の D 型は農家楽を経営していない農家のグループである。この中で最も多いのは D3 型であり、全員が 60 歳以上の高齢者である。仕事には従事しておらず、年金と補助金だけで暮らしている。ただし出稼ぎによる村外勤務の給料が主となる D2 型や、村内勤務の給料が主となる D1 型も一部存在している。

このように、現在の前衛村において、村民たちは農業に就かず、その代わりに、現在農家楽に関連する就業と収入が増加している。農家の収入は生産空間から生活空間の経営に転換した。

第２節　人間関係の変化

農村観光による地域の変容は経済や景観だけではなく、住民の生活そのものにも大きく影響を与えている。伝統的な農村社会において、近隣住民同士は日常の生産・生活で互いに助け合うことが多い。中国においても「遠親不如近隣」（遠くにいる親戚より、近隣の人々が頼もしい）という言葉に代表されるように、村民同士の関係性は極めて親密である。都市からの観光者にとって、この親密な人間関係は観光魅力ともなっている。しかし、農村観光の進展に伴い、村民同士および村民と観光者の関係性は、経済的利益を巡る状況に影響されてきた。

１．村民関係

従来の村落社会は小規模な地域社会であるため、村民の活動領域が複雑に絡み合い、重層化していることから、村民が同じ村の村民に対して様々な役割を演じている（緒方、2009）。中国の伝統的な農村は「熟人」社会（村民たちがよく知り合っていること）と呼ばれ（費、1985）、地方性の制限の下で、村民の間に血縁と地縁が一致しており、いわゆる親類・友人の間柄あるいは親族でなくても親しい関係を維持している[32]。人間関係が希薄な都市部に比べ、農村の民俗は純朴であり、この民俗の純朴さや村民の友好性、優しさ、誠実さに保たれた村民関係も観光者に対して重要なアトラクションとなっている（鄒、2005）。前衛村においても、1980 年代以前の伝統的な農業時代ないし 1980 年代からの工業時代でも、村民たちの間ではそれほど衝突も起こらず、親密な関係が維持されていた。

しかし、農村観光が発達してきた 1990 年代以降、とくに農家楽経営が拡大してからは状況が変化した。観光による金銭獲得が村民の共通目標となり、それまで存在しなかった村内での競争が顕在化し、村民間に経済的な関係が介在するようになった。

農家楽経営の初期段階には、村民委員会が統一的に集客し、来客を各経営農家に配分する統一管理制度が実施された。しかし、管理者が観光者を分配する際に、自分の知り合いを贔屓する不正行為が頻発し、村民からの不満と苦情が噴出した。

統一管理が廃止された後、「紹介」や共同組合（合作社）による集客形態が出現した。「紹介」というのは、予約数が多い農家楽経営者が観光客を他の経営者に紹介し、紹介費を徴

---

[32]　日本語は http://blog.goo.ne.jp/shoujo/e/6894844bf4c80a5732c6d25c3d615747 により引用した。熟人社会という論述は費（1985 年）が論じている。

収する方法である。共同組合は数軒の農家楽経営者が集まって共同的に集客を行い、訪れてきた観光客を組合メンバーが優先的に受け入れるという組織である。この連盟関係は、杜ほか（2011）が考察した、中国雲南省拉市海における地域住民による自律的な観光施設経営の例と同様に、持続可能な観光発展に対して重要な役割を担う期待がされたが、前衛村ではこの方式は成功しなかった。杜ほか（2011）の研究では、参加農家による平等な収益分配、参加農家のメンバーによる管理者選挙などによって、共同組合において民主的な共同経営が行われてきた。しかし、前衛村の共同組合は政府と村民委員会の意思の影響で結成された。集客力の弱い農家楽は経営困難になり、これらの農家を支援するため、経営に成功を収めた実力者たちが何軒の小規模経営者と提携し、崇明区政府もそれらの実力者に 2 万元（約 30 万円）を補助し、8 つの共同組合（農家楽合作社）が結成された。しかし、これらの共同組合は予想通りに実力を発揮することができたとはいいがたい。というのも、共同組合の管理者（実力者）が観光者を自家に優先的に配分し、組合メンバーへの配分は自家の受け入れキャパシティを超えた場合に行うという不平等な行為が横行したからである。このようなやり方は前述した「紹介」と同じであり、当然組合メンバーからは不満の声が溢れた。また配分された観光者に不満があった場合、各メンバーが管理者に改善を申し出る仕組みがあったが、その申し出内容の複雑さから管理者はそれへの対応に煩わしさを感じることとなった。本来、管理者はメンバーを適切に指導する立場にあるが、実際にはそうしたことは行われず、また管理者にはその能力もなかった。

メンバーに配分する観光者は様々で、彼らは私の苦労を理解せずに、細やかなことも管理者に申告する。例えば、女性の観光者を配分して欲しくないメンバーもいる。理由は女性の方がシャワーを長く使い、電気代と水道料金が掛かかるからだ。観光者が夜遅くまで寝ないでうるさいとか、今度素質が高い観光者を配分してくれという例もあった。私も観光者を選択していないのに、すごく面倒だった。彼らを支援するために組合を立ち上げたが、恩をありがたがることもなく、逆に文句を言われた。だから、組合の仕事について、もう努力したくない。（SQ 農家楽合作社管理者 E 氏）

合作社を作ったが、その機能は全く果たされていない。理由は色々があるが、実力者が自家の経営を優先することもあるし、メンバーが管理者の苦労を理解しないこともある。（村の観光会社管理者 F 氏）

また、客引きして観光客を自分の農家楽に招く農家もある。客引きの対象は宿を予約していない観光客だけでなく、宿を予約済みの観光客に対してもより安い価格で自家に泊まらせようとする場合もある。

このような客引きにより、村落の伝統的かつ親密的な関係ないし親戚関係にひびが入り、軋轢が生じた。一方、紹介という行為は自発的なものであり、一般的に親戚または近所の間に発生する。この点では、血縁や地縁に基づいた親密な人間関係という伝統的な農村の特徴が農家楽経営においても現れている。

２．ホスト―ゲスト関係

日本におけるグリーン・ツーリズムは農山村地域における過疎化の解決のほか、都市と農村の交流、観光者と農民の触れ合いが非常に重視されている。Lane （1994）も都市観光のアノニマスな関係に対して、農村観光におけるホスト―ゲスト関係はパーソナルな関係が特徴であると指摘している。従来、農村観光はオルタナティブ・ツーリズムの一種として考えられ、小人数での能動的な行動形態であるとされてきた。これを踏まえれば、その交流を可能にする基盤は小規模な観光者への対応だと考えられる。張（2013）が述べているように、農村観光は団体観光客を受け入れる大規模な事業者ではなく、ほとんど少人数の観光客に対応した事業であるため、観光者と事業者の接点を作りやすく、両者の情報交換も頻繁に行われている。

前衛村の場合でも、農家楽発展の初期段階は、受け入れ観光者数が 10 人以下の小規模な経営が中心となっていた。この段階では、観光者と経営者はそれぞれ互いの生活に好奇心を持っていた。こうした少人数へ応対することで、観光者と経営者との交流が生まれ、その触れ合いは重要的な観光内容になっていた。現在、前衛村では小規模の経営者はとくに自分が直接集客した観光者に対して、非常に親切に対応しており、筆者による現地調査でも丁寧な対応を受けた。現地調査では、小規模の経営者がよく「うちの農家楽経営はあまりよくないので、調査する必要がない」というが、質問に対して熱心的に答え、質問以外にも自分の生活まで色々話してくれるケースが数多くあった。その農家楽に宿泊していなくても、食事の誘いが来たこともあった。2015 年 3 月の第 2 回の調査では、4 つの客室しかない小規模な農家楽を利用した。その際、経営者と毎日食を共にしたが、会話も弾み、非常に良い雰囲気を感じられた。それに対し、大規模な農家楽の経営者は団体観光者を重視しており、団体の組織者とはよく交流するが、個人レベルでの交流は行われていない。

個人観光者に対しては、あまり親切ではない。第 1 回目の調査で、最初に泊まった農家楽は 16 室の客室を持つ大規模なものだったが、滞在した 3 日間で交流は一切なかった。調査協力の依頼については忙しさを理由に拒否され続けた。さらに平日で団体観光者がいないという理由から、客用の食堂を営業せず、筆者への飲食提供を拒んだ。

農村観光の拡大期に入ってから、前衛村の農村観光はオルタナティブ・ツーリズムからマス・ツーリズムに変化しつつある。多くの観光者が来訪し、とくに観光繁忙期には大規模な農家楽は一日に何百人という数の観光者を受け入れることもある。小規模の農家楽はほぼ宿泊だけを提供し、利用する観光者も大規模な農家楽からの紹介が多く、観光者と経営者の交流は少ない。都市住民の志向にも変化がみられ、農村観光の発展初期には農民の生活そのものに興味を持っていたが、次第に農民生活の体験よりも、農村という場所あるいはその場の良好な自然環境で過ごすということを重視するようになった。このように、農村観光のホスト―ゲスト関係はパーソナルからアノニマスなものへと変わりつつある。

また行き過ぎた経済的利益追求の弊害として、観光者に対する詐欺紛いの行為も現れている。現地調査では、次のようなことに遭遇した。

都市からの観光者たちは郷土料理が美味しいと思って、わざわざ農村にやってくるが、実際は彼らは何も分かっていない。先日、ある観光者がうちに来て、ガチョウを注文したが、私はガチョウの頭と足にアヒルの肉を合わせてと一緒に調理して出した（ガチョウよりアヒルが安いから）。彼らは美味しい美味しいと言っていた。ガチョウとアヒルを全く区別できないバカモノだ。（LJY 農家楽経営者 G 氏。方言で話していたが、一緒に夕飯を食べた観光者に翌日に訳してもらった。）

都市からの観光者が農家で生産された農産物が無添加で健康だと思い、高値で購入することが多い。前衛村には現在鶏を飼養している農家がほぼない。うちは自家食用のため、何羽か飼っている。先日、別の農家楽に入居していた観光者が地産のタマゴが欲しいといって、そこの経営者が私を紹介してくれた。うちにもたくさんあるわけではないので、町で購入したものを自家産タマゴとして観光者に売った。どうせ、区別できないから。（農家楽経営者 H 氏）

伝統的な農村観光は、村民が道徳や習俗を守り、観光者を客として親切に応対する。こ

の親切さは都市部では得がたいものである。王（2007）は観光者に対する親切（中国では「好客」（客を好む）と言う）の真正性を論議する際、商業化する前、住民が客に親切な対応することは伝統的な道徳や人情が現れたものであり、観光化の初期には住民は観光者に親切に応対したと考察している。しかし、観光化が進み、観光者と住民の関係に商業が介在するようになると、そうした親切さが利益を追求するためのものに変わる。王（2007）はこれを商業化された親切さと名付けている。本研究は親切さの真正性を究明することを目的とはしないが、農村観光の初期段階では親密さを維持していた農民と観光者の関係は、観光化の進展に伴い、ホスト―ゲスト関係は疎遠になりつつある。

３．ソーシャル・ネットワーク

伝統的な農村では、人々は相対的に閉鎖的な農業社会で生活し、親縁関係が社会交流の主な基盤であったため、ソーシャル・ネットワークは極めて単純であった。しかし農村観光の発展により、村民たちは異なる地域から訪れてきた観光者と接触することが可能となった。観光者は地域も職業も異なるため、交流を通じて村民たちのソーシャル・ネットワークが次第に拡大した。

農家楽を経営してから、私は多くの観光者と友達になり、平日にもよく連絡を取り合うようになった。観光者から色々勉強した。うちの農家楽は村で最初にネット宣伝を始めたが、それもネット会社で働いていた観光者が、色々紹介してくれたからだ。（農家楽経営者Ｉ氏）

浙江省からの地方官僚もうちに何回も泊まったよ。リピーターになっている。連続で何年間も、毎年当地の幹部を連れてきて、こちらの農家楽経営の経験について聞いてきた。もちろん、彼らからも色々教えてもらった。ある時、連れてきた観光者がサトウキビのもぎ取りをしたがったので、私の知り合いの田畑に連れて行き、無料で体験させてあげた。（農家楽経営者Ｊ氏）

農家楽を経営してから上海市の旅行会社の経営者とよく交流し、何人かと友達になった。そこから観光者の団体をうちに連れてきてもらった。また、農家楽経営について、色々な経営知識も教わった。（農家楽経営者Ａ氏）

このように、外来の観光者の増加に伴って、従来の閉鎖的なソーシャル・ネットワークは、商業関係に基づくソーシャル・ネットワークへと拡大し、村民の視野を広げることに繋がった。

第３節　生活習慣の変化

１．勤務時間

（１）繁閑期の変化

伝統的な農村では、農産物の生産が労働の中心であったため、村民の生活は農事期に合わせたものになっていた。前衛村が設立された当初は、農産物の収穫を目的とする生産活動が主であった。主要生産物は水稲と小麦、トウモロコシ、菜種などであり、現地の気候条件に応じて、二毛作が行われることが多かった。水田の表作として水稲を植え、次の作付けまでの期間を利用して、裏作として小麦を栽培する。また畑の表作がトウモロコシの際は、裏作には小麦と菜種を主として栽培する。それ以外、棉やソラ豆を栽培する場合もあった。このように、前年に植えた小麦と菜種が 5 月下旬の成熟期に入るころから収穫が始まる。収穫後、すぐに土地を片付けて水稲の田植あるいはトウモロコシの播種を行い、新しい作物のために施肥を行う。この夏季に行う収穫、播種、施肥が非常に忙しい時期は「三夏農忙」と呼ばれる。それに対して、秋の 10 月上旬から水稲の収穫（トウモロコシが少し早く、9 月中旬から)、そして小麦や菜種など裏作の播種、施肥が「三秋農忙」と呼ばれる。最適な農期を逃がさないように、この 2 期間に農作業が集中する。これ以外の期間には田畑管理も行われるが、それは農閑期である。したがって、前衛村が伝統的な農業社会だった時期は、農事期に合わせて 5～6 月と 9～10 月が非常に忙しい作業期間であった。このような、村民の生活が農事期に影響されている点に伝統的なルーラリティの特徴がある。

1980 年代に入ると、前衛村に工業が導入され、村民の 8 割が工場で働くようになった。その中で村民は都市部の工場勤務者と同様に年間を通じて働き、繁忙期と休暇期の区別が付かなくなった。しかし、工場の生産発注状況により、一時的に忙しくなることもある。この段階におけるルーラリティは、生産状況に合わせ、繁閑期が変わるといった都市的な要素に影響され、季節の影響といった自然的な性格が弱まった。

1990 年代の生態農業の発展に伴い、前衛村の農村観光が発展してきた。とくに観光発展の展開期（1999～2003 年）に入る 1999 年から、観光業に参入した村民が多くなり、村民たちの生活は農村観光に強く影響されるようになった。観光業は一般的に季節性のある産業であり、とくに農村観光は「週末経済」、「祝日経済」と称されるほどその起伏が激しい。前衛村の観光者数の季節変動状況を図 4－2 に示す。10 月が「国慶節」の長期間休暇に加え

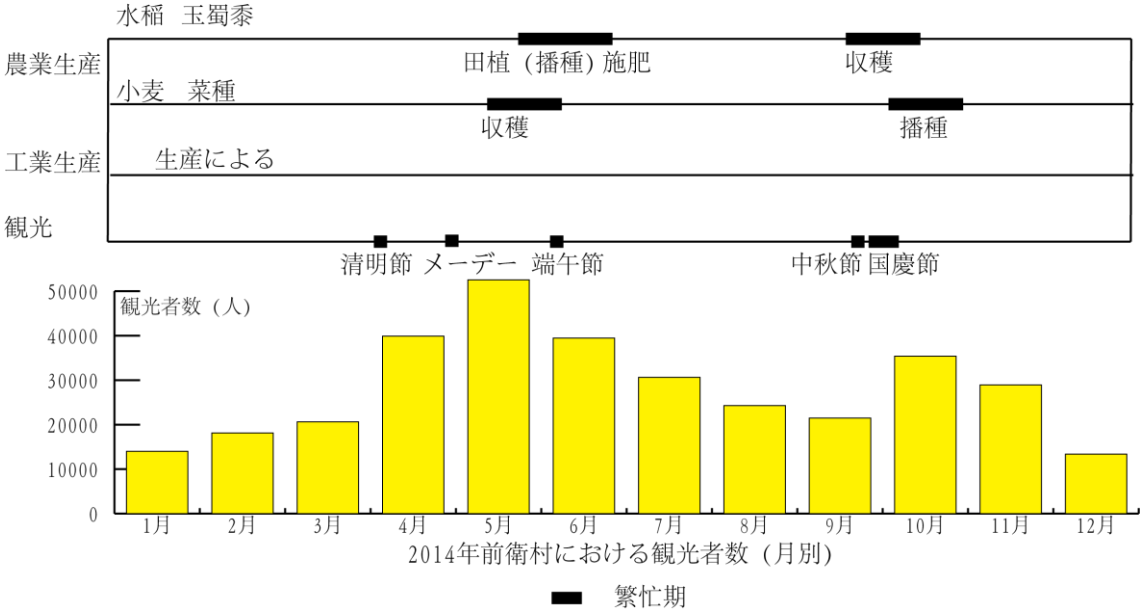


図 4－2　前衛村における村民の労作繁忙期の変化

（2015 年 3 月にの現地調査と前衛村の統計データにより作成）

秋季の気候が外出に適しているため、観光者が多い季節となっている。そして、4 月の「清明節」と 5 月の「メーデー」、6 月の「端午節」にはそれぞれ連休があり、この期間を利用して春と初夏の美しい農村景観を体験する観光者が最も多い。対照的に、年末の 12 月から翌年の 3 月までは冬季であり、農産物や緑も少ないため、農村地域としての景色があまり良くなく、観光者は相対的に少ない。8 月には学生の夏休みがあるが、里帰り人をする人が多く、さらに蒸し暑い気候の影響も加わり、観光者が減少する。週末には平日より多くの観光者が来訪する。したがって、観光産業が卓越するようになると、村民生活におけるルーラリティには季節的な影響が強くなる。しかし、この季節というのは自然の四季だけではなく、祝日や長期休暇による休日制度変動が加わり、都市観光にも類似した変動パターンが示されている。

他方、観光者数の季節変動の強さと繁忙期、休日が一致することは、農家楽経営者の休日兼業の経営を可能にする条件ともなっている。

（2）日常生活の変化

伝統的な農業を営んでいる時期、村民たちは「日出而作、日落而息」（日の出と伴に働き、日没と伴に休む）」という自然なライフスタイルを守り続け、仕事時間は天候によって決め

られていた。休憩時間も自分で決めることができた。そして、村民はほとんど農業に従事し、同質的な社会が形成されていた。

1980 年代に工業が始まると、工場で勤務する一部の村民の生活リズムは「朝八晩五」（朝 8 時から夕方 5 時まで出勤する）へと変化した。このような時間に規定された毎日の生活は、天候に影響されやすい農作業に対して、都市的な生活リズムの重要な特徴である。一般的に農村社会では、工業化に伴い住民の就職分化が現れるが、前衛村では工業生産を確保するため、田畑は全て村が集中的に管理・経営を行い、村民の大部分は工業に従事した。それゆえ同質的な農村社会の特徴は、工業導入後も変化が現れなかった。

しかしながら、農村観光が発展し、農家楽の経営が増加してからは、村民の就業体系が大きく変化した。前衛村において、農地が全部統一的に管理され、農業も外部からの経営者により展開されているため、村民が農業を就業していない。生活リズムに基づいて以下の主な就業形態が確認できる（表 4－2）。

表 4－2　前衛村における村内勤務の村民の就業形態

	20 代（人）		30 代（人）		40 代（人）		50 代（人）		60 代（人）		70 代（人）		合計（人）
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
農家楽専業		1	4	7	7	11	13	17	22	30	2	2	116
管理層者 サービスセンター	1		2	5	1	1	2	6	1				19
清掃員						1	2	6					9
観光スポット				1	2	5	9	18	2	1			38
フリーター					2		5	2	5	2	1	1	18
その他			1		2	1	6	4	2	1			17
合計	1	1	7	13	14	19	37	53	32	34	3	3	217

（2015 年 3 月の現地調査により）

①農家楽専業者：前衛村における農家楽専業者は 116 人である。60 代の従事者が 52 人と約半分であり、うち女性が 30 人と 60 代従事者の半数以上を占める。宿泊者がいる場合、彼らの生活リズムはほぼ宿泊者の活動によって規定される。一般的に、宿泊者から食事の注文があった場合、朝 5 時に起床し、町へ食材の買い出しに出かけ、7 時に料理を用意し始

め、8 時に朝食を提供する。その後、客室を清掃する。そして、昼食を 12 時、夕食を 18 時に宿泊者に提供する。あるいは観光者の要求によって時間を変えて三食を提供する。雇用者がいる場合は作業を分担し、経営者は主に接客を担当する。食事の提供をしない場合、宿泊者に他の農家楽での食事を紹介するため、客室への案内が済むと他に仕事はほとんどない。空き時間に路上で客引きをしたり、近所の人とマージャンを遊んだりして過ごす。

②村の管理層・サービスセンター従業員：この類型の村民は 19 人で、50 代の女性が 6 人と全体の約 1/3 を占めているが、20・30 代の村民も 8 人となっており全体の 4 割強を占める。この階層に所属している者は、普段「朝八晩五」で生活している。村民委員会または観光サービスセーターで朝 8 時から夕方 17 時まで事務処理の仕事し、昼食休憩は 12～13 時の 1 時間で、生活リズムは比較的に安定している。

③清掃員：主に 50 代の女性が担当している。担当者は朝 6 時から仕事を始め、担当区域を掃除する。一般的に 1 時間程度で一日の仕事が終わり、その後は自由時間である。

④観光スポット従事者：これらの従事者は観光スポットで入場券のチェック、観光施設の管理、警備などを担当し、管理層と同じく「朝八晩五」の勤務時間である。朝 8 時、観光スポットが開業する前には仕事場に就き、夕方 17 時まで勤務する。警備は交替で夜間当番を担当する。

⑤フリーター：主に 50、60 代の安定した仕事を持たない男性であり、電動三輪車で観光者を乗せて村を周遊して案内する。労働時間は固定されていないが、朝 9 時くらいから村の入口で待機する。あるいは臨時的な仕事がある場合は、村の管理者の指示により業務を行う。

その他には、村にクリニックの医者、電気修理者、工場勤務者もおり、彼らの従来の生活スタイルには変化が少ない。

このように、農村観光の発達に伴い村民の職業が分化し、村民のデイリーリズムも職業と関連して多様化したのが大きな特徴である。

２．技術の習得

伝統的な農業時代には、農民は生産活動を通じて、農業生産の知識と技能を次世代に継承してきた。農業生産を中心とする農民は、一般的に商売や経営に関する知識は乏しい。そのため、観光業が発展してから、村民のサービス知識と技能を向上させる必要があり、村の幹部は区のホテル経営者や旅遊局の幹部を招いて、経営者に必要なノウハウや技能に

ついて学ぶコースを設置した。そして、農家楽経営の資格取得の要件として、このコースでの試験の合格を課した。この規定によって、農家楽経営者は接客のマナーや客室管理の技能を習得することができた。

次に、インターネットの普及により、ネット宣伝の優位性が村民たちに認識された。村の旅行会社は外部の技術者を招いて村の宣伝サイトを作成した。インターネットの技術を熟知する農家楽経営者は、自分の農家楽サイトや個人ブログを立ち上げ、あるいは専門的な予約サイトなどを通してインターネットで自分の農家楽を宣伝するようになった。個々の宣伝サイトを所有する農家楽も計 11 軒あり（表 4－3)、さらに中国における有名な観光の専門予約サイトである携程（http://www.ctrip.com)、同程（https://www.ly.com)、去哪児（http://www.qunar.com)、大衆点評網（http://www.dianping.com）などに掲載されている農家楽は計 36 軒あった。

表 4－3　前衛村における宣伝サイト所有農家楽一覧

農家楽	サイト
佳佳農家楽	http://www.shnongjiale.com/
蛮霊閣	http://www.manlingge.com/
金平農家楽	http://jpnongjiale.com/
麗峰農家楽	http://www.shlffz.com
迎富貴農家楽	http://sh-nongjiale.ebdoor.com/
晶麦子飯荘	http://www.jingmaizi.com/
琴楽農家楽	http://www.cmqinle.com/
庭鶴農家楽	http://clthnjl.e-fa.cn/
黄家花園	http://www.haoyunjl.com/
錦洪農家楽	http://www.qw-jh.com/
漁民人家	http://clylrjnjl.e-fa.cn/

（2015 年 4 月の聞き取り調査と該当ネット資料により作成）

また、観光記念品や土産品開発にも力を入れており、平日に時間に余裕を持つ村民を中心に組織を立ち上げ、その構成員に切り紙やクロスステッチ、キルトなどの作り方を教え

た（写真 4－1）。前衛村元書記 X 氏によると、これらの手作りの工芸品は伝統文化も取り入れているため、工芸品を通して伝統文化を体験することにもなる。また、記念品や土産を販売することは村民の新しい収入源にもなる。しかし、このようなアマチュアが作った土産品には品質に改善の余地があり、加えて中国では類似するものが遍在していたため、オリジナリティの乏しさから売行きが悪化し、現在は生産中止になっている。

写真 4－1　クロスステッチの学習クラス

（http://travel.163.com/10/0115/18/5T3C032T000641QT.html より転載）

３．村民の余暇活動

鄭ほか（2017）は、中国四川省彭州市白鹿鎮における震災後の観光地の再建事例を通じて、農村観光の発展地域において、公共施設と娯楽空間の改善が住民に多様な余暇活動場所を提供することとなり、当地の余暇活動を豊かにすることに繋がると論じている。

前衛村の場合、それとは対照的に村民の余暇活動は観光開発によって単一的なものになった。工業発展によって前衛村が豊かになり、村は村民たちの余暇活動を増やすために、レジャー広場を造った。その広場には、バスケットボールとゲートボール、バドミントン

のグラウンド、そして舞台などが設置されており、余暇時間には各種のスポーツまたは芸能活動を行う人が多くいた。村もスポーツ大会を開催し、とくにバスケットボールは鎮内で毎年試合が開催された。しかし観光の発展に伴い、そのレジャー広場は観光施設に転用され、村民が活動に参加することができなくなった。

> *昔は（農村観光発展以前）、村には色々な運動施設があり、試合もたくさんあった。前衛村のバスケット・ボール・チームは鎮で優勝した。そして、村に太鼓隊とオーケストラ、ファッションショーなどを行うグループもあった。観光発展の初期には、これらの組織も重要な観光資源になっていた。私もサックスをやっていたよ。*（農家楽経営者 A 氏）

農家楽が発達してから、多くの村民は自分の農家楽経営に力を入れ、集団活動に参加する時間が大幅に減り、以前展開していた余暇活動が徐々に衰退した。

現在、暇がある村民には麻雀が人気の余暇活動となっている。現地調査の際、平日に村民が集まって麻雀をやるところをよく見かけた。現地調査の際、「私は友達のところへ麻雀しに行くよ、ご飯の時に戻ってあなたに料理を出す」という話を、筆者が宿泊した農家楽の経営者からも何回も聞いた。

第４節　村の管理と運営の変化

中国では村が最も基本的な行政組織である。従来、村の幹部は上級政府機関からの指示や任務を遂行させる行政的な役割を果たしていた。村の管理も行政管理が中心であった。しかし、現在では村の発展のために、行政管理だけではなく、新しい産業の開拓と導入のための業務管理やマーケティングなどの重要性が高まってきた。前衛村においても、新たな産業としての観光業が発展するにつれ、村の管理者と管理方式に変化がみられるようになった。そこで以下では、前衛村における管理者と管理方式の 2 つの要素の変化について考察する。

１．管理者

林（2007）は、地域リーダーの存在が観光農業における先駆的農家の誕生と周辺農家の組織化を促すほか、補助事業の積極的な活用が観光農業の充実に繋がると指摘している。鄒（2005）は中国において村の幹部が村民を率いて農村観光を発展させる「好書記（良い書記）モデル」の重要性を述べている。伝統的な農村では、村民たちが生産活動に尽力するために外部社会との繋がりが弱く、一般的に経営への意識や経験に乏しい。こうした地域では、「村の核（コア）」と呼ばれる幹部たちが重要方針決定の際に陣頭に立つ必要がある。そこで本節では、前衛村における 2 名の管理者について分析を行う。

（１）伝統的権威の代表

1970 年代、当時 20 代の X 氏は 73 名の農民を率いて干潟を埋め立て、前衛村を開村した。その際、悪条件の中で奮闘する姿やその精神が村民に評価され、開村後には支部書記に当選し、以降 2011 年に病気で辞任するまで 40 年間に渡って村支部書記を担当した。1980 年代に改革開放政策が実施された際、X 氏はいち早くその機会を掴み、工業発展を通じて村を豊かにする方針を定め、村への企業誘致を行った。村内に最初に設立された工場は結局失敗に終わったものの、その際、X 氏は当時近隣にあった経営状況の良い国営農場の長江農場化学製品工場の見学を通じて、技術や運営について学んだ。その経験を元として、村内に共同経営による企業を起し、結果として村民の収入を大幅に増加させることに成功した。この共同経営の実現には、X 氏と国営工場の幹部とのコネクションが非常に重要な役割を果たした。そして、村経済の向上に伴い、X 氏の経営能力が村民に認められ、次第に村の権威

的な存在となった。以降、1990 年代からの生態農業、1993 年からの農村観光、1999 年からの農家楽経営など前衛村における発展の転換点と節目は、すべて X 氏が提案したものであり、各産業での成功が彼の影響力をさらに高めた。2004 年の胡錦濤総書記の訪問の際、前衛村がマスコミに取り上げられ、X 氏の権威がピークに達した。こうした長期間に渡る政府上級機関との交流によって、各部門と良好な関係が維持されてきた。政府上級機関に評価されることは中国において非常に重要な政治資本であり、村の発展方向に関する意思決定も X 氏の意向が強く反映されるものとなった。X 書記について、聞き取り調査では、以下のような評価を村民から聞いた。

X 書記は前衛村の発展に対して多大な貢献をした。たとえば、当時科学普及教育基地を建設する時、投資者は手続きが煩雑で投資をやめようとあきらめかけた。しかし、X 書記は定期的に上級部門と交渉し、結局 1 か月で手続が完了した。そして、建設には通常 1 年間掛かる建物も、X 書記が村民を率いて連日残業し、3 か月で完成させた。投資者は X 書記の仕事に対する意気込みに感動し、投資を決めた。（村長 N 氏）

X 書記には先見の明があり、1990 年代に生態農業を導入する際、村民たちがその価値をあまり認識していなかったが、彼が最後まで方針を堅持した。農家楽も彼が観光発展の傾向を把握し、当時農家楽が発達していた四川省まで視察に行き、幹部と共産党員に呼びかけて最初に経営を始めた。（村民 K 氏）

このような権威の成立は経済状況と関連している。経済状況の良い時には、権威による不合理な点も無視された。たとえば、村の土地を村民大会で議論しないまま外部投資者に売却したが、村民の疑問の声に対して、「あなた自身がよく考えてみて。開発以降、村の収入が増えてきたかどうか」という質問だけで問い返し、村民は何も言い返せなかった[33]（陸・袁、2009）。一方、経済状況が悪くなった場合、権威の維持が困難となり、とくに観光発展に伴う村民間の収入格差が拡大してからは、低収入の村民から反対の声が出始めた。X 書記は権威を利用して、村の管理と運営について不規範的なところが多く、例えば、村の土地

[33] 中国、特に農村地域には経済発展が最重要視され、村民たちの法律意識が薄く、経済すら向上すれば幹部の功績と認識する場合がまだ多い。

を外部会社に賃貸する場合、法律では村民大会を開いて村民の投票で決定しなければならないが、前衛村の場合、このような契約はすべて X 書記と幹部だけで決められ、実行された。こうした資産管理の手続きの不透明さから、前衛村の農村観光発展が停滞して以降は、村民たちはX書記を様々に批判した。

X書記は村一番のお金持ちで、我々の土地を違法に外の会社に転売し、分からないほどのコミッションをもらった。現在、彼は脳卒中になったけど体のせいでなく、中央政府の廉潔政治が進んで、政府からの検査官が村に来るそうだという噂を聞いて、驚いて病気になった。（村民Ｊ氏）

前衛村でお金を稼ぎたければ、X書記との関係を良くしなければならない。現在、村のお金持ちはほぼ彼の親族と親友だ。（村民Ｋ氏）

村の土地賃貸について、帳簿は確かにごちゃごちゃになった。X書記が喜んだら、どうでもいい。もし、彼が不機嫌だったら、調印された契約でも開発者はその土地をもらえない（村民Ｌ氏）

これらの話の真実性は不明であるが、こうした言説の出現は、経済発展の停滞によって、村民とリーダーの間に不調和が現れていることの証左と位置付けられる。このような不調和も権威管理の弱点であると考えられる。

（２）現代管理の代表

2011 年にX書記が病気を事由に辞任すると、2012 年にN氏が村長[34]に当選した。N氏はまだ 30 代の若手幹部で、1999 年に専門学校を卒業した後、上海市内の会社に勤務した。2002 年に上海市第二工業大学（高等専門学校）に入学し、卒業後には上海市の中外合弁会社で設備メンテナンスの仕事に就いた。2006 年に中米合弁会社へ転職しセールスマンとして働き、後にセールスマネージャーに抜擢された。2012 年には父の要望に応じて仕事を辞め、村長に立候補して当選した。N氏が当選した理由としては、大都市での仕事経験や高学歴を

[34] 支部書記を郷政府が外部からの担当者に指定した。新書記は経営にはあまり関心がなく、代わりに村長が村の主要管理者になった。

持つこと、若さから外部の新しいものを受け入れやすいことなどが挙げられている。N 氏自身も都市で勉強した科学的な管理方法と経験を村に応用して、村の発展に寄与できるように努力している。N 氏の合弁会社での仕事経験は有力な資本であり、村民たちはN 氏の管理能力を信じた。N 氏の父親は村で大規模かつ知名度の高い農家楽を経営しており、N 氏の当選にも力を入れた。

N 氏は知識あり文化あり、また上海市の大手企業での仕事経験もあり、しかもマーケティングの仕事をしていた。だから、彼が村長の選挙に出馬したとき、我々は彼の仕事経験を誇りに思った。彼の当選によって村がもっと発展すると希望を持っている。（村幹部 M 氏）

しかし、彼はまだ若いため、村での権威は高い段階には達しておらず、村民の不和を調合する場合には力不足を感じることも多々あるという。当時 X 書記と郷政府の推薦が内定していた人物はG 氏であり、N 氏の当選は意外な結果であった。そのため、X 書記と郷政府が根回しをしたことで、N 氏は仕事をする際に様々な抵抗を受けた。

村にはいろんな些細なことがあり、N 氏は村長としてこれらのことを処理するのにたくさん時間が掛かった。彼は村の人間関係についてはあまり知らず、村民間でも権威がないため、問題を処理する効率が悪い。先日、ある村民たちが土地問題について集まって騒いだが、N 氏は歳下ということもあって年配の方に対して全く対応できなかった。（村幹部 M 氏）

このように、伝統的な農村における権威管理には様々な問題が存在しているが、科学に基づく管理法を導入する時、逆に権威層から抵抗されこともある。

２．管理方式

農家楽が発展してくると、村幹部の役割が行政的管理から経営管理へと転換することも注目すべきで点である。前衛村の村民委員会は前衛村農家楽旅遊服務公司（前衛村農家楽観光サービス会社）を設置し、幹部たちが会社の経営者を兼任することで観光事業を推進してきた。

前衛村では 1999 年から農家楽の経営が始まり、村が統一的に農家楽を管理する方式を取った。その管理内容は主として以下のように点を抜粋できる。

ⅰ．農家楽は農家を単位として観光者の接待を行い、管理上の便宜を図るために村が「前衛村農閑楽[35]旅游服務公司」（以下村旅游公司と略する）を設立し、各農家は当会社の名義で経営する。会社が経営に必要な営業許可を申請するため、農家は各自で営業許可を申請しないこと。

ⅱ．各農家は経営収入の 20%を村旅游公司に納める。村旅游公司は各経営者にサービスを提供し、経営に関する責任を負う。

ⅲ．村旅游公司は会社の規程を通じて各経営者の行為を規範し、観光資源と観光者ともに統一して管理する。すなわち、統一して接待、登録、分配、決算の「4 つの統一」管理モデルを取る。

ⅳ．村旅游公司は実際には第三セクターの部門であり、形式上は農家楽経営に参入しているが、主な責務は農家楽を経営する農家に対する管理である。会社の責任者は村の委員会委員が担当し、会社は村民委員会に対して責任を負う。

ⅴ．「4 つの統一」管理モデルは実際に地方政府が農家楽に対する管理の責任を村旅游公司（村委員会）に委託し、政府部門の代わりに村が農家楽経営者を直接管理する。

このような管理方式が成立した背景には、以下の理由が挙げられる。

まず、農家楽は、当時新しい観光形態であり、その管理についても先例がなく、発展初期では村民委員会が集中管理する必要があった。そして、農家楽発展の初期段階では、経営者が少なく農家楽の規模も小さかったため、村旅游公司は内部の規程を通じて集中的に管理しても、村と経営者の間に矛盾やトラブルが発生しなかった。さらに、中国における個人経営企業に対する管理法では、経営場所は商用の建物に限られていたが、農家楽の経営場所は居住用の住宅であり商用建物ではないため、各農家が経営に関する許可を得るのは非常に困難である。したがって、村旅游公司の名称での統一管理を行うことで許認可に融通を利かせる。第 4 に、経営用の各種許可の取得は非常に煩瑣で費用も高額である。村旅游公司の集中管理で各農家が個別に対応するよりも経営コストを削減できる。第 5 に、各農家の独立経営は管理が難しくなり、農家間の競争が激しくなる問題点も存在する。村

[35] 農村観光において、一般的に農家楽と呼ばれているが、ここの会社の名称は「農閑楽」となっている。

はこの問題を危惧し、統一経営方式を取った。最後に、集中管理によって、各経営農家から徴収した管理費もある程度、村の管理経費として村に貢献できる。

しかし、観光発展に伴って農家楽経営を拡大せざるを得ない状況になると、村委員会と各農家との間で利益相反の矛盾が生じてきた。統一管理の場合、村委員会が観光者の分配を把握し、管理者が自分の知り合いに便宜を図りがちになるからである。そして、村が徴収した管理費に対しても不満の声が多く上がった。そのため、2007 年に崇明区政府が干与して「4 つの統一」管理を廃止した。その結果、農家楽経営は個人経営時代に突入した。

農家楽が個人経営になってから、農家楽経営者から管理費を徴収することができなくなり[36]、村の収入は入場料と土地の賃金に限られた。しかし、村民の土地は全て集中して経営されており、村民に対する補助金や給料などで支出が発生する。それゆえ、現在村の財務状況が悪化し、観光商品の更新や景観維持・改造に対する投資が不足がちとなることで、観光魅力が低下し、観光者が減少するという悪循環に陥っている。

さらに村の管理体制が弱体化したことで、個々の農家楽が目先の利益を追求するために悪質な客引きを行うことが頻発し、村のイメージが破壊されつつある。また、農家楽経営の飲食や宿泊によって発生した汚水は処理されないまま直接村の水域に排出され、村の自然環境と生態が崩壊に瀕するようになった。このような問題を解決するために、池・崔 (2006) は①住民が十分な自治意識と資質を持つこと、②外部からの経営者が地元の経営に取って代わってしまう可能性の排除、③管理に当たる村の組織が十分な権威を持ち信頼に値すること、の 3 点を挙げている。しかし、現在、前衛村にはとくに農家楽の経営について、外部からの経営者が非常に少ないものの、村民の自治意識が弱く、自家の利益のみを重視しているのが現状である。また、村が統一して農家楽を経営しても、参入農家の増加に伴い、観光者を各農家に平等に配分することが難しくなり、村管理層の権威が弱体化している。

以上のことから、農村観光の発展においてはプロフェッショナルな管理者と管理方式の導入が必要であるものの、管理者の権威や村民の資質、利益の分配などの要因の影響を受けて、未だアマチュア的な特徴が存在している。このような状況は、管理者の更迭のみによって改善を図るのは困難である。

---

[36] 統一的に管理する場合、村が直接収益の 20%を管理費として徴収した。個人管理になってから、村は農家楽経営者に宿泊観光者 1 人 5 元の管理費を支払うことを求めているが、集客が把握できず、管理費の徴収が困難となっている。

第５節　まとめ

本章は、前衛村における農村観光の発展に伴い、村民の職業と農家の収入構成の変化を考察した上で、収入変化による村民の人間関係、生活習慣、村の管理の変化の特性に焦点を当て、社会関係の側面からルーラリティの再編について明らかにした。その結果は以下のようにまとめることができる。

第一に、職種と収入構成からみると、ルーラリティの低下が著しい。前衛村は 1970 年代に設立されて以降、伝統的な農業を営んでいたことから、村民の職業と収入構成は単一的で収入も低かった。1980 年代に村主導の工業発展に伴い、土地が集中的に経営され、8 割の村民が工場で勤務することになった。農村観光は 1993 年に発展を始め 2010 年に最盛期を迎えた。これによって村民が農業と工業から脱離して、観光業による収入が所得のメインとなった。

第二に、人間関係の面においては、農村観光の発展によってルーラリティは低下してきたが、ある程度新しい特徴が現れた。まず、伝統的に農産物生産を追求してきた村民たちは経済利益を追求するようになった。とくに、農家楽に参入した農家が多く、客引きにより経営者間の競争が激しくなるにつれ、トラブルが頻発するようになった。また、村民間の相互協力を図るために区政府が支援して設立された共同組合（合作社）においても、管理者と加盟者間の関係が悪化したことで実態を失い、名義上のみに存在する組織となった。このようなことから、親密的な近隣関係ないし親族関係にもひびが入り悪化するケースもあった。

他方、農家楽経営者の間では自発的な「紹介」形式が親友と近所に展開していることを鑑みれば、従来の地縁・血縁に基づいて親友関係が経営の提携に貢献している。また、農村における伝統的な道徳や習俗に従って、来客に親切に応対することできる。観光発展の初期段階に観光者が少なく、この伝統的な親切さのルーラリティも継承され、ホスト―ゲスト間の親密な関係性が維持されていた。しかし観光者が増加すると、伝統的なホスト―ゲスト関係が経済関係に強く影響され、従来あったパーソナルな関係からアノニマスな関係へと転換していく。このように、人間関係の指標で、ルーラリティが低下しているものの、現在でも経営活動において、それをある程度みることができる。

第三に、村民の生活習慣が観光の季節性や観光者の需要に影響されるようになったことで、新しい特徴がみられる。従来、農村では伝統的な農事歴に基づいて村民の生活リズム

や農時期が規定されていた。これは時間に規定された勤務を送る都市住民の生活に対して、自由度が高く感じられ、農村の観光魅力の一つでもある。しかし、農村観光の発展に伴って就労形態にも変化が現れ始めた。すなわち、村内の企業で働くことあるいは「農家楽」を経営することで、観光業に参入する村民が増加し、観光による収入の比重が拡大した。そして職業の変化に伴い、住民たちの年間スケジュールは観光の季節性に合わせたものになり、日常生活のリズムも観光産業に影響され、変化した。村の管理層と、観光サービスセンター、観光スポットに努めている村民は、都市部の社員と同じく、観光者の少ない閑散期にも規則正しく朝 8 時から午後 5 時まで出勤している。農家楽経営専業者は利用する観光者の注文に合わせて、サービスを提供し、以降は自由となる。

最後に、伝統的に農村で行われる管理は農業生産と行政管理であった。前衛村の行政管理の実態としては、村の権威者による非科学的な個人思想によって執り行われている状況があった。内部権力の構造は体制エリートの村幹部と一般村民であったが、経済力によって影響力を有する非体制エリートも出現した。それゆえ村の管理が複雑になり、経済管理や企業管理が必要とされ、実際にその要素が導入された。このように管理体制が従来の社会主義の権威管理から、科学的なものに変化した。ルーラリティは社会関係の側面において農民が脱農傾向にあり、現代的な管理要素の導入などの特徴が確認できるものの、農村観光の管理にはアマチュアの特徴が残っている。

第５章　結論

観光地化とは、観光地ではない場所が人々に注目されるようになることで、やがて観光関連の業務が営まれ、さらに観光協会のような組織が形成される地域となることである（長谷、1997）。しかし、観光地化を考える際には、観光地ではなかった場所が人々の注目を集めるようになった理由こそが重要である。観光対象に着目すれば、一般的に地域が所有する何らかのものに観光価値が発見されることで、観光活動が生じるという考え方がある。観光地化した後、地域は観光者の需要に応じて変容し、さらに観光機能を拡大させることで観光が発展する。その発展過程で、地域にどのような変化が発生しているか、そしてその変化と観光はどのような関係にあるかという点は、いずれも重要な研究課題である。

農村観光の場合、ルーラリティが観光魅力の核心であり、独自のセールスポイントでもあると認識されている。ルーラリティは農村地域が持つ様々な要素の特徴であり、その中の何らかの要素が観光対象となる。しかし農村観光の発展が進むにつれ、その要素も次第に変化し、結果としてルーラリティの再編が生じるというのが一般的な見方である。こうしたルーラリティの再編は、農村観光の発展に対して影響を与えていると考えられる。したがって、農村観光の実態を明らかにするためには、農村観光とルーラリティの再編の関係性を解明する必要がある。

本研究は上海市崇明区前衛村を事例として、ルーラリティの変化と再編に着目し、農村の生産空間と生活空間、社会関係という 3 つの側面から、農村観光の展開に伴うルーラリティの変化の特徴を考察し、その要因を明らかにすることを試みた。

本章では、前衛村における農村観光の発展プロセスを明らかにした上で、前述した 3 つの側面からルーラリティ変化の特徴を検討し、この 3 つの側面の相互関係と変化のメカニズムについて考察する。

第１節　前衛村におけるルーラリティ再編の特徴

１．生産空間のルーラリティ再編

農村観光が発展する以前、農村は農作物を栽培する場であり、伝統的な農業が営まれていた。当然、土地利用も農業用地が中心となっており、生産空間としての景観も伝統的な作物の栽培や収穫に基づくものが中心となっていた。このような農的な土地利用と農産物の生産風景が従来のルーラリティの特徴である。

中国では 1990 年代に入ってからは、農業生産のパラダイムが生産主義からポスト生産主義へ移行した。それによって、農村は農産物の生産の場としてだけではなく、別の機能を持つ場としても捉えられるようになった。この時期、前衛村では生態農業の発展理念を導入し、農作物の収穫量よりも質を追求する方針に転換した。当時、生態農業の希少性により、都市からの観光者が流入し、農村の生産空間に観光機能が加わった。これはルーラリティの観光化であり、前衛村における農村観光の萌芽であった。

1999 年における休暇制度の変更により、都市住民の観光需要が高まった。それに伴って前衛村の農村観光もより発達し、農村観光発展の展開期に突入した。この段階では観光者に多くの観光資源を提供するため、人工的な観光施設が建設されたが、そうした用地の都市的な変化により、土地利用におけるルーラリティの低下が発生した。また観光施設も遊園地や動物園など都市的な特徴を持つものが主流となり、観光施設におけるルーラリティをさらに低下させた。

2004 年 には、中国共産党総書記胡錦濤氏が前衛村に視察に訪れた。その様子を報じたマスメディアを通じて前衛村の農村観光が広く宣伝されることとなった。その影響を受け、前衛村の農村観光はさらに進展し拡大期に入った。この段階では生産空間において、多くの外部投資が流入し、多様な観光開発が行われた。そのため人工的な観光施設が増加し、土地利用におけるルーラリティの低下が加速していった。しかし、これらの観光施設には擬古的な建築スタイルが反映されたものや、伝統的な生産・生活文化を活用したものがあり、「ルーラリティ＝伝統的」という面からみれば、それらは新規のルーラリティと捉えることができる。また自然的な観光対象においても、野菜のもぎとりからイチゴ狩り、ブドウ狩り、ハーブ鑑賞へと変化し、これらも新規のルーラリティに繋がっている。

2009 年の上海長江大橋の開通と 2010 年の上海万博開催の影響を受け、2010 年に前衛村における農村観光の発展はピークに達した。しかし、2011 年以降は農村観光発展の停滞期

に入った。この段階では、観光の停滞の影響から一部の観光施設が廃棄されるという事態が発生し、生産空間におけるルーラリティの低下に拍車をかけた。

２．生活空間のルーラリティ再編

1980 年以前、経済状況の不振もあって、村内における大多数の住宅は古い小規模な平屋であった。これは住宅におけるルーラリティの特徴となっていた。1980 年代に入ると、村内工業の発展によって、経済的に豊かになった村民の中に、住環境を向上させるために新しい家屋を建築する者が現れた。この変化は住宅の空き部屋を増加させ、後に生活空間の観光化を可能にさせる必要条件になった。

観光資源と観光内容の多様化により、観光者の滞在は長時間化した。それに伴って宿泊需要が顕在化したが、前衛村における宿泊施設はまだ十分ではなかった。このため、早い段階で家屋を改築した村民が、家屋の空室を活用して 1999 年から農家楽の経営を始めた。これは観光活動の生活空間への侵入と捉えられる。

2004 年の観光発展の拡大期には、農家楽に参入する農家が増加する中、より多くの観光者を受け入れるため、住宅の菜園の敷地に建物を増築する動きも現れた。菜園は農家楽における自然風景の良さに寄与していたため、結果として自然風景のルーラリティは低下した。さらに農家楽経営の拡大に伴い、商業宣伝のために都市部と同様の広告看板や、観光者向けのゴミ箱や路標が設置されたが、これは集落景観におけるルーラリティを著しく低下させた。

また観光者により快適なサービスを提供するため、政府管理部門は農家楽に対して都市的なサービス理念や施設の導入を促すための規制を定めた。これによって農家楽経営者の中に、家屋を都市部のホテルのように改装した者が多く出現したため、生活空間におけるルーラリティは低下した。しかし一方で、この変化は農村観光にアメニティの改善という面でポジティブな効果をもたらした。また経済的な余裕と、農村地域における建築技術の進歩、村民の価値観・美意識の変化を背景として、新築家屋は西洋風の「別荘」が多く建設されることとなった。この建築様式の変化は、新規のルーラリティとなっている。

2011 年以降は、農村地域の土地管理制度が厳しくなり、増築行為が抑制されたことで、ルーラリティは一定程度維持されている。

３．社会関係のルーラリティ再編

前衛村が設立された当初、自然条件の劣悪さから営農には向かなかった。それでも大多数の村民は農業経営に従事していたが、収量は少なく、収入も極めて低かった。しかし中国において改革開放政策が実施されると、前衛村では 1980 年代に工業が発展し、村民の収入は大幅に増加した。これは職業と収入という面で村民の農業からの脱離を促し、ルーラリティを低下させた。

1999 年からの農村観光発展の展開期に、生活空間において農家楽の経営が開始された。これは村民の収入構成にも変化を及ぼし、ルーラリティが低下した。この時期は観光者数がまだ少なく、村民は観光者に対して丁寧に対応を行っていた。このような、接客対象が親類や近隣住民から観光客に変化したことは、人間関係におけるルーラリティの観光化と捉えられる。こうした親切な対応に代表される農村の親密な人間関係は、都市からの観光者にとって、重要なアトラクションとなっている。

2004 年からは農村観光の拡大期に入った。先駆的に農家楽経営を始めた村民の成功をみて、他の村民も農家楽経営に参入するようになった。その結果、観光関連の職業に従事する村民が増加し、農家の収入構成や生活習慣が農地・農業から離脱したことで、ルーラリティが低下している。人間関係においては、農家楽経営者間の競争により、軋轢が生じるようになったことで、伝統的に親密だった人間関係が変容し、これもルーラリティを低下させた。一方、経営者の間において親族や友人の農家楽に観光客を「紹介」するという行為が生じており、これはルーラリティが経営活動に貢献していると認識できる。しかしながら、観光者の増加に伴い、経営者と観光者個人と直接的な交流は少なくなっている。これはルーラリティの低下だと捉えられる。

第２節　農村観光発展とルーラリティ再編のメカニズム

伝統的な農村地域においては、農業が生産空間と生活空間、社会関係の在り方を決定づけている。農村観光が導入されて以降、伝統的な農業は観光農業に転換した。観光業が拡大してくると、従来の農村と異なる都市的な要素が出現するようになった。それらの要素が農村地域に侵入する過程で、ルーラリティには再編が生じている（図 5－1)。

本稿第 2 章から第 4 章では、前衛村の生産空間と生活空間、社会関係におけるルーラリティの評価指標を分析したうえで、以下の 4 点を結論としてまとめている。

第一に、生産空間と生活空間、社会関係の 3 つの側面において、各要素が相互に影響し合い、農村観光の発展過程でルーラリティが再編されてきた。先行研究では、ルーラリティの商品化について生態的基盤と経済的基盤、社会的基盤から分析した Kikuchi et al（2002)、菊地（2012）の研究、また民宿を分析対象とした石井（1970)、服部（1976b）による研究がみられるが、前者は生産空間と社会関係、後者は生活空間のみからの考察に止まっている。本論文はルーラリティを 3 つの側面から全体的に捉え、考察した。

社会発展によって、農業に対するパラダイムが生産主義からポスト生産主義に転換し、生産空間に対する認識が変化したことで、農業の機能にも変化が現れた。前衛村においては、農作物の量より質を求める潮流が生まれ、生態農業の発展が始まった。この変化は当時の都市住民を引き付け、農産物を中心要素とする農村観光が端緒についた。これは生産空間への観光機能の付与と言える。この時期の観光活動は野菜狩りが中心であったため、観光は生産空間で展開し、従来の生産機能を果たしてきた農業生産風景や農産物が観光対象になっていた。このような観光活動によってルーラリティに変化が現れるようになった。また、観光業の拡大に伴い、生産空間においては非農的な観光施設が整備されるようになったことで、生産空間における土地利用という指標から、ルーラリティの低下がみられた。

生活空間においては、宿泊需要の増加に対応するために、住宅が改築され観光者に提供されるようになった。これは観光の生活空間への流入である。観光者の需要を満たすため、住宅の間取りや内装、設備、庭園の景色、道路・並木修景などの指標において、都市的要素が進入したことで、ルーラリティの低下が進んだ。また、同時期に生産空間に高級宿泊施設が新たに整備された。これは生産空間と生活空間両方で観光化が拡大したことを意味する。

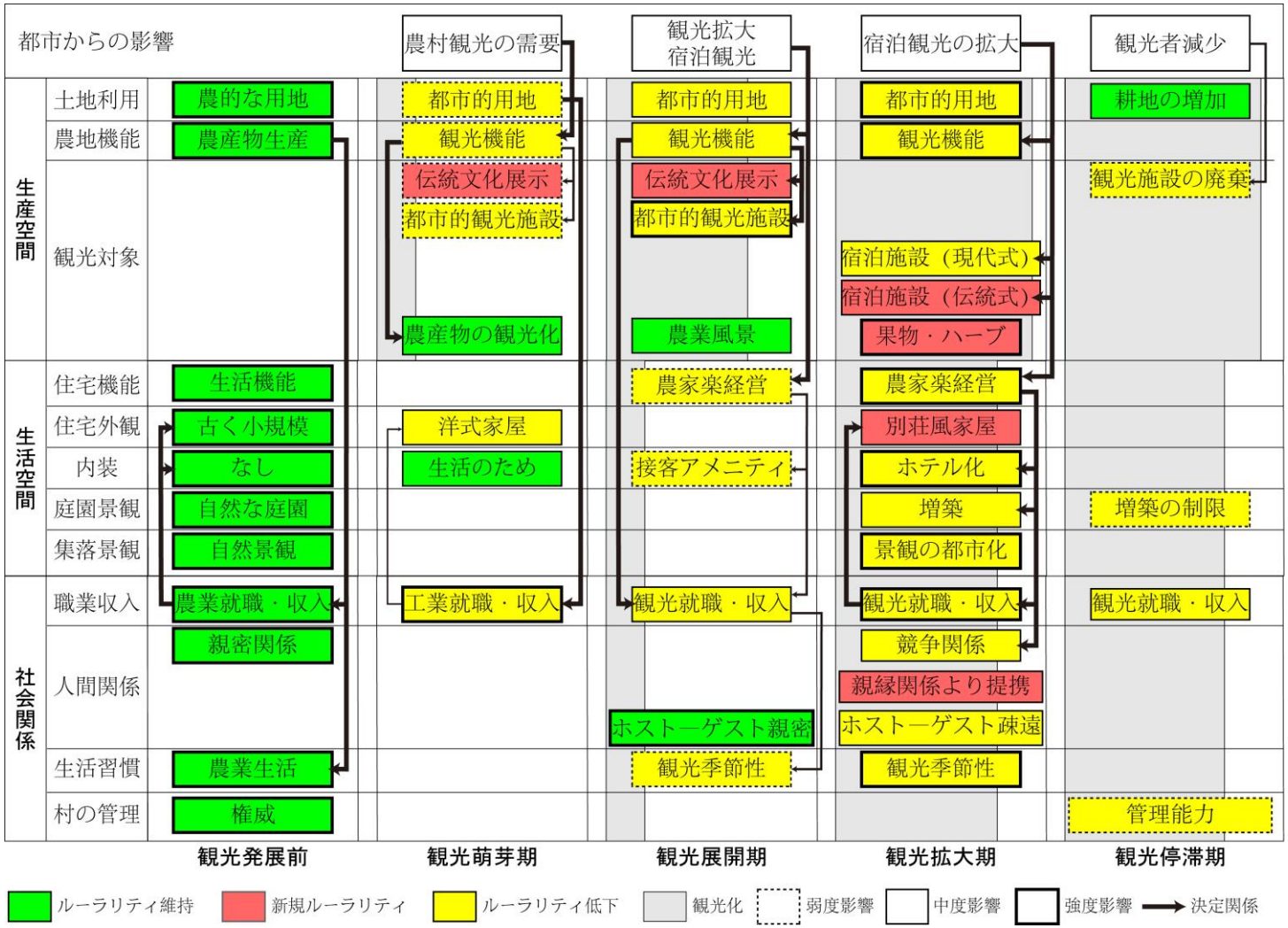


図 5－1　前衛村における農村観光の発展とルーラリティの変化

社会関係においては、村民の収入・職業構成が観光業への依存度を増し、ルーラリティの低下を招いた。一方、観光業の参入に伴い、村民関係やホスト―ゲスト関係、村の管理・運営の指標において、観光業との繋がりによる新たな特徴も表れている。

全体的にみると、生産空間では比較的ルーラリティが維持されているが、生活空間、社会関係ではルーラリティの低下が著しい。

第二に、農村観光の進展に伴い、ルーラリティの維持において、新たな傾向がみられるようになった。Lane（1994）が指摘するように、従来、ルーラリティの重要な特徴は農的・ローカルな要素、伝統性とされており、前衛村においても、従来から生産されていた水稲、アブラナの生産風景や、生活空間におけるかまどなどの存在がルーラリティの維持に重要な役割を果たしていた。しかし、ルーラリティの詳細な実態をみると、維持されていると評価できるルーラリティにおいても、その実態には新たな特徴が現れている。

まず、生産物はローカルなものから非ローカルなものへと転換し、現在では後者によってルーラリティが維持されている。前衛村に農村観光が導入された当初、主な観光対象は従来から生産されていた野菜などローカルな農産物のもぎ取りであった。この段階の農産物は、生産機能が中心となっており、観光機能は補助的に存在しているにすぎなかった。農村観光の発展に伴い、観光機能が重視されるようになると、栽培される生産物は非ローカルなイチゴやブドウの他、ハーブといった景観作物へと変化していった。このような景観作物の栽培は、従来の農産物のもぎ取りという体験型観光に加えて、農的環境の中で過ごす保養型観光が農村観光の重要な内容になりつつあることを示している。また、人工的な観光施設においても、「ルーラリティ＝伝統的」という見方をすれば、伝統文化に基づいて造られた新たな観光施設がルーラリティを維持する役割を果たしていると捉えられる。ただし、ここでの伝統文化とは、前衛村が経験した生産・生活文化の再現だけではなく、崇明島ないし中国における伝統的な文化を含むものと拡大解釈されている。

生活空間において、2000 年以降に西洋風「別荘」様式家屋が多く建築された。このような家屋は現代的な形式と自然豊かな環境の下に存在し、農村の新たな特徴になっている。この状況は、多くが集合住宅に居住する都市住民にとっては魅力的なものである。これらの家屋は建築様式という指標からみれば、伝統性と乖離しているが、現代都市が持たない特徴である点を考慮すれば、新たなルーラリティとして捉えることができる。

第三に、農村観光にとって、ルーラリティの低下は必ずしも悪影響を招くとはいえない。先行研究では、ルーラリティの低下が農村観光の魅力を損なうことが強調され（鄒、2005；

席ほか、2011)、前衛村においても、生産空間における人工的な観光施設の増加により農的用地の減少、現代な娯楽施設の建造、生活空間における家屋の増築による庭園の農的景色の消失、社会関係における農家楽経営の競争による村民関係の悪化など多くの問題は確かに存在している。しかし、農村地域におけるルーラリティには、アメニティの欠如などのネガティブな要素が反映されていることも少なくない。ルーラリティ低下の背景には、そうした面を改善し、農民生活と農村の魅力を向上させる取り組みも必要不可欠であることは否定できない。

前衛村では、従来、農業生産の収益性が低く、多くの村民が貧しい生活をおくる経済状況であった。生活空間における住宅規模の狭さや老朽化、内装の簡素さは、こうした経済状況を反映したものであると理解できる。こうした住宅に関する指標に反映されているルーラリティは、観光客受け入れ態勢の不十分さという点で農村観光の阻害要因になっている。経済状況の好転に伴い、住宅規模の拡大による空き部屋の増加が、農家楽経営すなわち生活空間の観光化の前提条件となった。とくに生活空間においては、政府の規制によって家屋の間取り変更や設備の設置が促されたことで、住宅のルーラリティの低下が著しくなっている。しかし、このような変化は機能面で優れたものの導入でもあったため、農村観光の発展を促進する効果もあった。

社会関係の側面においては、収入・就職構成が農業から観光業へ転換するというルーラリティの低下がみられたが、村民の収入が増え、生活に対して良い影響を与えている。このように、村民の観光に対する関心が高まり、農村観光の発展にも繋がっていると考えられる。

最後に、農村観光において、ルーラリティへの重要視と経済利益の追求、村民の生活向上欲求は互いに競合し合い、このメカニズムによってルーラリティを評価する各指標の強弱が変化させられている。ルーラリティが農村観光商品の中心的でユニークなセールスポイントになっていることが挙げられている（OECD、1994)。農村観光の発展によるルーラリティの低下が批判されている（鄒、2005；席ほか、2011)。しかし、ルーラリティは観光者の認識に判断される一方、観光施設の整備は村或いは投資者、政府によって実施されている。このように、ステークホルダーの需要に合わせて、異なる指標でルーラリティの再編が進んでいる。

ホスト側の村民は観光者に認識されるルーラリティの特徴に誘導され、農業生産風景の維持や伝統文化の活用などのために観光施設を整備し、ルーラリティを維持している。一

方、経済的利益の追求のため、非ルーラリティの要素が進入してくる。前衛村における農村観光への外部投資者は、観光客を増加させるために多くの都市的観光施設を整備し、とくに観光発展の萌芽期と展開期に農村観光の発展に対して、補助的な役割を果たした。また、生活空間と社会関係の都市化が進んでいることは、前衛村の経済が向上して以降、生活空間の改善と、収益性が高い農村観光業への参入によって展開されてきたと理解できる。

第３節　本研究の意義

ルーラリティは農村観光の核心と位置付けられる。そこで本研究はルーラリティに着目し、農村の生産空間と生活空間、社会関係の 3 つの側面から上海市崇明区前衛村における農村観光の発展とルーラリティの変化について考察してきた。その結果、農村観光の発展過程とルーラリティ構築の関係が、農村地域、そして農村観光に大きな影響を与えていることが明らかになった。

第一に、Lane（1994）はルーラリティの特徴について分析しているが、その分析は時系列の変化を考慮せずに静態的なものとしたことに特徴がみられる。本研究は農村観光の発展プロセスにおいて、段階別にルーラリティの変化を解明し、動態的な研究を試みた。時系列の段階別分析に加えて、生産空間と生活空間、社会関係の 3 側面から、農村地域で発生したルーラリティの再編を包括的に考察した。生産空間における地元の農産物から、地元になかった農産物、景観作物への変化は、新しいルーラリティを創造している。また生活空間において、従来の農村観光に重要であった住宅の伝統性というルーラリティとは異なり、現代的な様式の住宅は農村環境の優位性を表し、新たなルーラリティとなることが明らかになった。

第二に、ルーラリティと農村観光の関係については、観光客による農業生産物の利用から始まったが、観光者の増加に伴い、農的・ローカルな資源の観光化から、非ローカルな農的観光商品が導入され、最終的には農的・ローカルな要素とも関係のない観光商品の開発が展開されてきた。一方、観光利用は生産空間から住民の生活空間にまで拡大し、伝統的な生活施設、景観の商業化が進展する。このような産業変化は住民の社会関係にまで影響を及ぼし、素朴であった社会関係を変化させつつある。

本研究の意義は、農村観光の進展を背景にして農村観光の核心であるルーラリティの変化プロセスを分析し、農村観光において、いかにルーラリティが再編されてきたのかを解明した点にある。

第三に、農村観光の発展プロセスにおいて、農村観光の発展とルーラリティの関係を考察することができた。ルーラリティは農村観光の核であると認識されているが、ルーラリティの低下は必ずしも農村観光の阻害になるとはいえなかった。とくに生活の利便性とアメニティ向上のため、都市的な設備を導入することは、農村観光の発展にとって必要だと考えられる。

最後に、第１章で論述したように、本研究では農村観光を農村地域における全ての観光活動であると定義している。しかし、農村観光の内容と形式は多様であり、それぞれの地域によってルーラリティの特性や変化は異なっている。本研究では、大都市近郊における農村観光を事例に分析を行ったが、他の地域でも同様の研究が望まれ、さらに普遍的な結論が得られることが期待される。

参考文献

池　俊介・杜　国慶・白坂　蕃・張　貴民（2013）：中国雲南省拉市海周辺における乗馬観光の展開．E-journal GEO，8(2)，208-222.

石井英也（1970）：わが国における民宿地域形成についての予察的考察．地理学評論，43(10)，607-622.

井口　梓・田林　明・ワルデチュック　トム（2008）：石垣イチゴ地域にみる農村空間の商品化：静岡市増集落を事例として．新地理，56(2)，1-20.

応　舎法（2011）：新砂島：別様的田園風光．浙江日報，2011 年 5 月 6 日，23 版．（中国語）

王　小会（2009）：浅析郷村旅游的郷村性．現代経済，8(2)，123-124.（中国語）

王　寧（2007）:旅游中的互動本真性 :好客旅游研究．広西民族大学学報（哲学社会科学版），29(6)，18-24.（中国語）

王　寧（2017）：伝統村落的地理嵌入性、地理脱嵌性及其社会保護機制．旅游学刊，32(2)，1-3.（中国語）

王　文亮（2001）：中国観光業概説．日本僑報．402p.（中国語）

緒方宏海（2009）：中国における「郷村観光」の実態に関する社会人類学的研究．旅の文化研究所研究報告，17(2)，1-14.

小原規宏（2004）：ドイツ・バイエルン州におけるルーラリティによる社会的持続性の創生―アルゴイ地域ウンターヨッホの事例―．2004 年度日本地理学会秋季学術大会発表要旨集，68，9.

小原規宏（2010）：大都市外縁部における滞在型市民農園の発展とルーラリティの再構築の萌芽―茨城県笠間市の笠間クラインガルテンを事例に―．茨城大学人文学部紀要（社会科学論集），50，47-59.

何　景明（2006）：城市郊区郷村旅游発展影響因素研究――以成都農家楽為例．地域研究与開発，25(6)，71-75.（中国語）

何　景明・李　立華（2002）：関於郷村旅游概念的探討．西南師範大学学報（人文社会科学版），28(5)，1-4.（中国語）

韓　魯安（2008）：中国観光産業の課題と持続可能な観光への若干の展望．人間社会環境研究，15，165-188.

菊地俊夫（2008）：地理学におけるルーラル・ツーリズム研究の展開と可能性：フードツーリズムのフレームワークを援用するために．地理空間，1，32-52.

菊地俊夫（2012）：大都市近郊の横浜市青葉区寺家地区におけるルーラチティの商品化．観光科学研究，5，23-33.

菊地俊夫・堤　純（1998）：都市近郊農村における農業的土地利用の持続性と変移性―前橋市近郊の養蚕農村元総社地区の事例―．季刊地理学，50，1-16.

呉羽正昭（1999）：日本におけるスキー場開発の進展と農山村地域の変容．日本生態学会誌，49，269-275.

呉羽正昭（2013）：レクリエーション・観光―ルーラル・ツーリズムの展開―．田林　明編『商品化する日本の農村空間』p29-44．農林統計出版.

高　元衡（2004）：陽朔郷村旅游発展中各方利益分配問題研究．桂林旅游高等専門学校学報，15(6)，58-62.（中国語）

坂井加寿子（2017）：日本における都市農村交流をめぐる時代背景の変化と研究の特徴．観光学，16，39-48.

周　星（2011）：現代中国社会における古村鎮の「再発見」．愛知大学国際問題研究所紀要，138，89-111.

篠原秀一（2013）：北海道羅臼・標津町における漁村空間の商品化とその地域性．田林　明編『商品化する日本の農村空間』p93-109．農林統計出版.

鐘　偉（2007）：郷村旅游地城市化問題及防範研究．華東師範大学（修士学位論文）．100p.（中国語）

肖　佑興・明　慶忠・李　松志（2001）：論郷村旅游的概念和類型．旅游科学，3，8-10.（中国語）

徐　衛国（1995）：依靠科技建設生態村、促進経済快速協調発展．上海農村経済，9，18-21.

（中国語）

崇明県誌編纂委員会（1989）：崇明県誌．1006p.（中国語）

鄒　統釬(2005)：中国郷村旅游発展模式研究――成都農家楽与北京民族村比較与対策分析．旅游学刊，20(3)，63-68.（中国語）

鄒　統釬（2006）：郷村旅游発展的囲城効応与対策．旅游学刊，21(3)，8-9.　（中国語）

席　建超・趙　美風・葛　全勝（2011）：旅游地郷村聚落用地格局演変的微尺度分析――河北野三坂旅游区苟各荘村的案例実証．地理学報，66(12)，1707-1717.（中国語）

薛　熙明・王　宗琳（2017）：旅游社区東道主家庭的社会変遷研究綜述．旅游学刊，32(4)，96-105.　（中国語）

高橋　誠（1997）：都市近郊農村の地域社会変動．古今書院，279p.

高橋伸夫・菅野峰明・村山祐司・伊藤　悟（1997）：新しい都市地理学．東洋書林，237p.

高柳長直（2013）：兵庫県佐用町南光地区の景観形成作物によるルーラリティの創造．田林明編『商品化する日本の農村空間』p221-238．農林統計出版.

高柳長直・今野絵奈・小川英之・磯野貴志（2009）：景観形成作物によるルーラリティの創造商品化する日本の農村空間に関する調査報告（6）．日本地理学会発表要旨集，75，122.

池　静・崔　鳳軍（2006）：郷村旅游地発展過程中的公地悲劇研究――以杭州梅家塢、龍塢茶村、山溝溝景区為例．旅游学刊，21(7)，17-23.（中国語）

中華人民共和国国家統計局（2016a）：中国統計年鑑 2015．http://www.stats.gov.cn.（中国語）

中華人民共和国国家統計局（2016b）：2015 年国民経済和社会発展統計公報 http://www.stats.gov.cn.（中国語）

中華人民共和国国家旅游局(2006)：関於促進農村旅游発展的指導意見．http://www.gov.cn.（中国語）

張　貴民（2014）：中国における農村空間の商品化とその課題―改革開放以来を中心に―.

愛媛大学教育学部紀要，61，203-211.

張　健(2012)：伝統郷村公共空間的更新与重構――以番禺大嶺村為例. 華中建築, 7, 144-148.（中国語）

張　広帥（2010）：郷村観光の定義とその重要性に関する一考察．北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集，6，83 - 90.

張　広帥（2013）：「郷村観光」の多面的効果を活用した持続的な農村振興の可能性：大連市甘井子区紅旗鎮岔鞍村を事例として．観光研究，25(1)，3-12.

張　小林（1998）：郷村概念辨析．地理学報，53(4)，365-370.（中国語）

張　娟・王　茂軍（2017）：郷村紳士化進程中旅游型村落生活空間重塑特徴研究――以北京爨底下村為例．人文地理，32(2)，137-144.（中国語）

陳　斌（2004）：旅游発展対摩梭人家庭性別角色的影響．民俗芸術研究，2，68-71.（中国語）

鄭　詩琳・薛　熙明・朱　竑（2017）：新生的旅游地：災後重建背景下的地方重構．旅游学刊，32(5)，59-70.（中国語）

展　鳳彬（2008）：中国の新型観光農家楽：四川省・成都市を事例に．同志社政策科学研究，10(1)，241-246.

杜　国慶（2006）：観光開発に伴う世界遺産「麗江古城」の変容．アジア遊学，83，145-159.

杜　国慶・池 俊介・白坂 蕃（2011）：世界遺産観光が地域に与える影響に関する一考察：麗江市拉市海周辺村落の乗馬観光を事例として．日本観光研究学会全国大会学術論文集，26，405-408.

ハーヴェイ，D．著，吉原直樹訳（1999）：ポストモダニティの条件．青木書店．502p.

長谷政弘（1997）：観光学辞典．同文舘，268p.

Norman, L.（2007）：21 世紀郷村研究的新挑戦：一個社会学的視角．中国農業大学学報（社会科学版），1，33-37.（中国語）

服部千之・岡本光生・伊藤友典（1976a）：長野県白馬村における土地所有・土地利用の変

化と問題点：農山村地域の観光化に関する研究　その 1．学術講演梗概集計画系，51，1107-1108.

服部千之・岡本光生・伊藤友典（1976b）：長野県白馬村における民宿建築の形成と問題点：農山村地域の観光化に関する研究　その 2．学術講演梗概集計画系，51，1109-1110.

林　琢也（2007）：青森県南部町名川地域における観光農業の発展要因：地域リーダーの役割に注目して．地理学評論，80(11)，635-659.

費　孝通（1985）：郷土中国．生活・読書・新知三聯書店．97p.（中国語）

馮　仕政（2007）：国家、市場与制度変遷――1981-2000 年南街村的集体化与政治化．社会学研究，2，24-59.（中国語）

藤永　豪（2011）：有明海沿岸地域における地域資源としてのルーラリティと商品化―鹿島市「ガタリンピック」と太良町「カキ焼海道」を事例に―．佐賀大学文化教育学部研究論文集，16(1),197-205.

文　運（2014）：郷村旅游介入下海口郷村聚落景観的変化与営造研究．海南大学（修論）．80.

ホガート，K.，ブラー．H 著，岡橋　秀典・澤　宗則訳（1998）：農村開発の論理 ： グローバリゼーションとローカリティ．古今書院．373p.

舛谷　鋭（2009）：レッド・ツーリズムとは何か―中国革命聖地観光について―．稲垣　勉・杜　国慶編『暮らしと観光―地域からの視座―』p141－150．立教大学観光研究所出版.

松井圭介（2013）：農村観光の商品化と文化的背景．田林　明編『商品化する日本の農村空間』p373-379．農林統計出版.

宮崎　猛（1998）：グリーン・ツーリズムと日本の農村：環境保全による村づくり．農林統計協会．239p.

森下裕之・宮崎　猛（2008）：中国における棚田農業の保全と農家楽：雲南省元陽県土戈寨村を事例として．農林業問題研究，44(1)，256-261.

山田耕生（2008）：日本の農山村地域における農村観光の変遷に関する一考察―「グリーン・

ツーリズム」登場以前の 1992 年まで―. 共栄大学研究論集, 6, 13-25.

山本　充（2013）:都市農村関係からみた農村空間の商品化の意義. 田林　明編『商品化する日本の農村空間』. p339-347. 農林統計出版.

尤　海涛・馬　波・陳　磊（2012）: 郷村旅游的本質回帰 : 郷村性的認知与保護. 中国人口・資源与環境, 22(9), 158-162.（中国語）

楊　旭（1992）: 開発郷村旅游勢在必行. 旅游学刊, 7(2), 38-41.（中国語）

楊　瑞卿・厳　巍（2013）: 上海市行道樹建設管理現状与展望. 江蘇林業科技, 40(3), 34-37.（中国語）

李　開宇（2005）: 基于郷村性的郷村旅游及其社会意義. 生産力研究, 6,107-108.（中国語）

李　紅波・張　小林（2015）: 郷村性研究総述与展望. 人文地理, 30(1), 16-20.（中国語）

陸　柳・袁　媛（2009）:生態村理念在農村的拡散与実現――以上海市崇明県前衛村為個案. 西南民族大学学報（人文社科版), 8,115-118.

龍　花楼（2013）: 論土地整治与郷村空間重構. 地理学報, 68(8), 1019-1028.（中国語）

龍　花楼・張　杏娜（2012）: 新世紀以来郷村地理学国際研究進展及啓示. 経済地理, 32(8), 1-7.（中国語）

龍　花楼・劉　彦随・鄒　健（2009）: 中国東部沿海地区郷村発展類型及其郷村性評価. 地理学報, 64(4), 426-434.（中国語）

劉　徳謙（2006）:関於郷村旅游、農業旅游与民俗旅游的幾点辨析. 旅游学刊, 21(3), 15-18.（中国語）

林　剛・石　培基（2006）: 関於郷村旅游概念的認識――基于対 20 個郷村旅游概念的定量分析. 開発研究, (6), 72-74.（中国語）

魯　書君（2012）:四川省成都市における農村観光施設「農家楽」の発展プロセスと現状に関する考察. 立教大学観光学研究科修士論文. 94p.

Bramwell, B. (1994): Rural tourism and sustainable rural tourism. *Journal of Sustainable Tourism*, 2, 1-6.

Cloke, P. (1977): An index of rurality for England and Wales. *Regional Studies*, 11, 31-46.

Halfacree, K. (1995): Talking about rurality: Social representations of the rural as expressed by residents of six English parishes. *Journal of Rural Studies*, 11(1), 1-20.

Ilbery, B. (1998): *The Geography of Rural Change*. Addison Wesley Longman. 280p.

Jones, A. (1987): Green tourism. *Tourism Management*, 8(4), 354-356.

Kikuchi, T., Oishi, T., Saitoh, R. (2002): Recreating of the rurality in the urban fringe of Tokyo metropolitan area: A case study of Kodaira city. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University*, 37, 93-102.

Lane, B. (1994): What is rural tourism. *Journal of Sustainable Tourism*, 2, 7-20.

OECD (1994): *Tourism Strategies and Rural Development*. Paris. OECD. 94p.

Pintassilgo, P. (2016): Green tourism . *Encyclopedia of Tourism*. Springer International Publishing. 1168p.

Sung, K., Seong, I., Jae, H. (2003): Implications of potential green tourism development. *Annals of Tourism Research*, 30, 323-341.

Tellstrom, R., Gustafsson, I., Mossberg, L. (2005): Local food cultures in the Swedish rural economy. *Sociologia Ruralis*, 45(4), 346-359.

謝　辞

本論文を執筆するにあたり、多くの皆様にご助力を賜りました。

指導教授の杜国慶先生には、2012 年 9 月に日本へ留学してから、学術面の熱心で厳しい指導だけでなく、生活面でも手厚いサポートをいただきました。入学したばかりの頃、先生は貴重な時間を割いて、日本語が非常に下手だった私と一緒に、『観光学入門』を読み、発音から指導してくださいました。論文を提出する際には、毎回非常に丁寧に添削していただきました。論文が真っ赤な添削一杯で返ってくることを恥ずかしいと感じながらも、非常に感動しました。今後、自分が教員として仕事を続けていくにあたり、先生の振る舞いを模範としていくつもりです。ここに深謝の意を申し上げます。

副指導教授の佐藤大祐先生にも、ゼミにて様々な貴重なご意見を賜りました。本論文の副査をご担当いただいた舛谷鋭先生、愛媛大学教育学部の張貴民教授にも、本論文の細部にわたりご指導を賜りました。さらに、立教大学観光学研究科の先生方には、中間発表や予備審査会、公聴会にて、本論文の進行に有益なご指導を賜りました。感謝の意を表します。

私が日本に留学できたきっかけは、文部科学省から国費奨学金を授与していただいたことでした。また、2016 年度には、大学のセントポールズ奨学金も授与していただきました。これらの奨学金のおかげで、研究に専念することができ、心から感謝いたします。

現地調査の際には、当時崇明県旅游局の龚伟副局長、前衛村の倪潜村長、現地住民の皆様から、貴重な資料を提供していただき、研究を進行させることができました。心から感謝いたします。

杜研究室の何晨氏、板垣武尊氏、澁谷和樹氏、五艘みどり氏、また佐藤研究室のアコマトベコワ・グリザト氏、陳慶光氏とは、研究会を通じて有益なコメントをいただきました。板垣武尊氏、澁谷和樹氏には、論文の日本語をチェックしていただきました。また、日本語チューターを担当していただいた木村竜也氏には日本語の添削を丁寧にしていただきました。大変感謝しております。

立教大学大学院観光学研究科の院生、李崗氏、呉晨峰氏、謝暢氏、ジャムジュン・モンティチャー氏、丸山宗志氏には、留学生活全般において、お世話になっております。感謝いたします。

最後、生活を支えてくれた妻、日々の緊張した研究生活を笑顔でリラックスさせてくれ

た娘、いつも支えてくる祖父母、両親、両親の世話をしてくれた妹、弟にも、謝意を表します。

2018 年 1 月 23 日

呂　帥

索　引

アーバニティ，22，23，29，30，77
アグリツーリズム，19，20
エコ・ツーリズム，18，19，20，21
グリーン・ツーリズム，19，20，21，25，127
経済的基盤，27，151
社会関係，12，14，26，28，29，31，34，87，118，119，144，145，147，150，151，153，154，155，156
社会的基盤，27，151
生活空間，28，29，31，32，36，57，81，82，90，95，96，102，110，112，114，115，116，117，124，147，149，150，151，153，154，155，156
生産空間，27，28，29，31，32，37，38，39，51，65，66，78，79，82，90，115，124，147，148，149，151，153，154，156
生態的基盤，27，40，151
前衛村，30，31，32，33，34，35，36，41，42，43，44，45，46，47，48，49，50，51，52，53，54，55，56，57，58，59，60，61，62，63，64，65，66，68，70，71，72，74，75，77，78，82，83，84，85，86，87，88，89，90，91，92，93，94，95，96，98，100，106，107，110，112，113，114，116，119，120，121，122，123，124，125，126，127，128，131，132，133，135，136，137，138，139，140，141，142，143，144，145，147，148，149，150，151，152，153，154，155，156
農業観光，18，19，20，21，83
農村観光，12，13，14，15，17，18，19，20，21，22，23，24，25，26，27，28，30，31，32，34，36，38，39，40，42，43，45，51，53，55，56，57，60，61，62，63，65，67，71，72，74，76，77，78，79，82，83，85，86，89，90，92，93，94，95，96，98，102，106，112，114，116，117，119，120，121，125，127，128，129，131，133，134，136，137，138，139，140，142，143，144，145，147，148，149，150，151，152，153，154，155，156，157
ファーム・ツーリズム，19，20，21
ルーラリティ，14，15，17，22，23，24，25，27，28，29，30，31，32，36，37，38，39，40，43，55，56，57，60，61，65，67，68，72，74，77，78，79，80，81，82，90，92，102，112，115，116，117，118，119，131，132，144，145，147，148，149，150，151，152，153，154，156，157
ルーラル・ツーリズム，19，21
ローカリティ，39，55，61，62，63，65，76
ローカル，26，56，61，70，74，75，76，153，156